

ANNUAL REPORT 2024

2024年度 アニュアルレポート



KIT | ICT

学校法人金沢工業大学



学園の学章

「三大建学綱領」

人間形成 技術革新 産学協同

三位一体の「学園共同体」

学生 理事 教職員

科学技術を学ぶ者への指針を示す、「3つの“T”」

Truth Theory Technology

以上の3つの要素を、学園のシンボルであるゴールデンイーグル(いぬ鷲)の翼をモチーフにデザインしたものです。

白山に棲息する天然記念物ゴールデンイーグルは、光に向かって進むとき頭部が金色に輝く特徴を持っており、鳥類の中では最も高空を飛翔する勇敢な鳥と言われます。そのゴールデンイーグルの力強いイメージは、勇気と信念を象徴しています。



学校法人金沢工業大学



高邁な 人間形成

我が国の文化を探究し、高い道徳心と広い国際感覚を有する創造的で個性豊かな技術者・研究者を育成します。

深遠な 技術革新

我が国の技術革新に寄与するとともに、将来の科学技術振興に柔軟に対応する技術者・研究者を育成します。

雄大な 産学協同

我が国の産業界が求めるテーマを積極的に追究し、広く開かれた学園として地域社会に貢献します。

KIT-IDEALS (学園共同体の信条)

「学園共同体が共有する価値」に基づく信条（行動規範）

この学園に集う私たちは、学園共同体として共有すべき価値を“KIT-IDEALS”としてまとめ、これらに基づく信条を次の通り決めました。これを学生、理事、教職員が常に意識し、尊重することによって学園共同体の向上発展を目指します。

K Kindness of Heart 思いやりの心
私たちは「素直、感謝、謙虚」の心を持つことに努め、明るく公正な学びの場を実現します。

I Intellectual Curiosity 知的好奇心
私たちは「情熱、自信、信念」を持つことに努め、精気に満ちた学びの場を実現します。

T Team Spirit 共同と共創の精神
私たちは「主体性、独創性、柔軟性」を持つことに努め、共同と共創による絶えざる改革を進め、前進します。

I Integrity 誠実
私たちは、誠実であることを大切にし、共に学ぶ喜びを実現します。

D Diligence 勤勉
私たちは、勤勉であることを大切にし、自らの向上に努力する人を応援します。

E Energy 活力
私たちは、活動的であることを大切にし、達成や発見の喜びを実現します。

A Autonomy 自律
私たちは、自分の行いを律し、1人ひとりを信頼し、尊敬します。

L Leadership リーダーシップ
私たちは、チームワークを大切にし、自分の役割を自覚しつつ、責任を果たします。

S Self-Realization 自己実現
私たちは、自らが目標を持つことを大切にし、失敗に臆することなくさらに高い目標に向かって挑戦することに努めます。

学園共同体の理想

学園創設者の泉屋利吉翁は、学生・理事・教職員の三位一体で構成する学園共同体の理想を掲げ「工学アカデミア」の建設に全力を傾けました。学園創設期においては、学生を“Young gentlemen”と呼び、彼らの自律と自主的な活動を支援し、自由と活気ある学園の樹立に心がけました。特に、直接、その設立を企画した穴水湾自然学苑は、豊かな自然の中で教職員と学生が寝食を共にし、規律ある共同生活を送ることにより、お互いの信頼関係の構築と学園共同体の理想を実現せんとするものでありました。傍ら、教職員の資質向上を図るため、教職員の学内外への留学制度を構築し、全ての教職員に教育者としての自覚を強く求めました。

初代校長・学長の青山兵吉先生は“Truth (真理)”“Theory (理論)”“Technology (技術)”を当時の学園の記章に三つの“T”として込められ、学園を「知を求める場」「知を生産する場」とされ、本学園卒業生が我が国産業界において指導的役割を担う技術者・研究者として活躍することを強く念じ、また信じておられました。学術に生きる青山兵吉先生の純粋で崇高な願いと言動は、当時の教職員には忘れ難いものがあります。

第2代大学学長の京藤睦重先生は、学生の学力や資質を直視され、多年にわたる教育者としての信念に基づき、学園共同体の理想を「親切な学園である」との言葉に込められ、学生との信頼関係を構築する軸として、基礎学力の向上を目的とする徹底した教育訓練を展開されました。特に、「努力すれば、必ず報われる」と学生に熱く語りかけておられた姿や「誠意をもって学生に対応すれば、学生は必ず応えてくれる」と自ら率先して学生と向き合う活力ある行動は、教職員を励ますのみならず、学外の多くの方々から支持されました。

私は、“KIT-IDEALS”を標榜するにあたり、学園が組織として重視すべき価値と位置づけた

- ・“Kindness of Heart”（思いやりの心）は、京藤睦重先生の教育者としての学生を思う心を
- ・“Intellectual Curiosity”（知的好奇心）は、青山兵吉先生の学者としての純粋な崇高さを
- ・“Team Spirit”（共同と共創の精神）は、泉屋利吉翁の学園共同体の理想を追究する闘志に満ちた活動をそれぞれ想起し定めたものであります。

また、学園を構成する（学生、理事、教職員）個々人が重視すべき価値として位置づけた

- ・Integrity（誠実）
- ・Diligence（勤勉）
- ・Energy（活力）
- ・Autonomy（自律）
- ・Leadership（リーダーシップ）
- ・Self-Realization（自己実現）

は、創設者を始めとして、歴代の学長・校長が話されたり、学生を諭された言葉の数々から、その思いを要約させていただいたものであります。学園を構成する人々（学生、理事、教職員）が生涯にわたる「行動」を通して自己実現を目指され、学園共同体の理想実現に寄与されますことを念願するものであります。

平成14年1月 理事長 泉屋利郎
(学園顧問・名誉理事長)

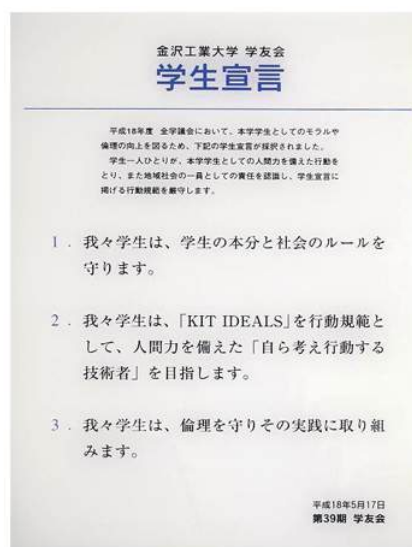
学友会 学生宣言

平成18年度全学議会上において、本学学生としてのモラルや倫理の向上を図るため、下記の学生宣言が採択されました。

学生一人ひとりが、本学学生としての人間力を備えた行動を取り、また地域社会の一員としての責任を認識し、学生宣言に掲げる行動規範を遵守します。

1. 我々学生は、学生の本分と社会のルールを守ります。
2. 我々学生は、「KIT IDEALS」を行動規範として、人間力を備えた「自ら考え行動する技術者」を目指します。
3. 我々学生は、倫理を守りその実践に取り組みます。

平成18年5月17日
第39期学友会



アニュアルレポート 目次

- 005 文部科学省「大学・高専機能強化支援事業」の選定による学部学科・大学院の教育環境の充実と高度情報専門人材の育成を推進
- 006 文部科学省の「私立大学等改革総合支援事業」において全4タイプで選定
- 007 文部科学省の高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)採択校を支援するプログラムを開催
- 009 高校生のためのデジタル体験会「DXフェス」を開催
- 010 SDGsゲーミフィケーション教材を通じた次世代人材の育成と国際展開
- 011 内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」の一環で、小松マテールとKITコーポ教育プログラムを実施
- 012 独・フラウンホーファー研究機構IGCVとの研究開発・事業化拠点(FIP-MIRAI@ICC)を立ち上げ
- 013 参画中の「Tech Startup HOKURIKU」が本格始動～スタートアップ創出を目指し研究の社会実装を加速～
- 014 中小機構北陸本部と金沢工業大学との包括的連携協定を締結
- 015 国際高専が海外子女教育振興財団と協力協定を締結
- 016 電気技術者試験センターの国家試験を全国の教育機関で初めてオンサイト型CBT方式で実施
- 017 学友会を中心とした地域貢献活動～能登半島地震支援、イーグル隊の野々市市表彰～
- 018 KIT・ICT『災害対応力の強化』『学生募集力の強化』『修学指導強化』Daysを実施

金沢工業大学

I. 教育の取り組み	020
教育目標を具現化するための学部における3つのポリシー	020
世代・分野・文化を超えた共創教育研究の推進	022
学部プロジェクトデザイン教育の推進	026
KITオナーズプログラム及び課外活動の充実と実施	033
キャリア教育の推進	036
II. 研究の取り組み	046
学術研究助成・公的研究プロジェクトの推進	046
研究シーズ・研究成果の発信および産学連携マッチングの促進	048
先進的な学術研究や社会実装型の研究開発	050
顕著な研究成果の受賞等	053
III. グローバル化への取り組み	056
海外協定校及び関係機関との着実な交流実績の積み重ね	056
IV. 学習環境の整備	068
V. 社会貢献への取り組み	072
多様なステークホルダーとの連携と社会貢献	072
能登半島地震・豪雨災害からの復興支援	076

VI. 自己点検・外部評価	078
VII. 学生募集	088
学生募集活動	088

国際高等専門学校

I. 教育・研究の取り組み	091
「グローバルイノベーターの育成」のための教育システム	091
正課・課外教育プログラムの充実と実施	095
II. グローバル化への取り組み	110
III. 社会貢献への取り組み	115
IV. 自己点検・外部評価	119
V. 学生募集	121

文部科学省「大学・高専機能強化支援事業」の選定による学部学科・大学院の教育研究環境の充実と高度情報専門人材の育成を推進

文部科学省の「大学・高専機能強化支援事業(学部再編等による特定成長分野への転換等に係る支援[支援1]及び高度情報専門人材の確保に向けた機能強化に係る支援[支援2])」の交付決定を令和6(2024)年8月21日(水)付けで受け、事業計画に基づき、令和6年度における事業を推進しました。

[支援1]に関しては、事業計画「金沢工業大学における社会実装型教育研究プロジェクトを文理探究から実践する情報専門人材の育成」に基づき、令和7(2025)年度の16号館X(クロス)デザインラボの着工に向けて、基本設計が完了し、運営体制等について検討を進めました。

～社会実装型教育研究イノベーション拠点：16号館X(クロス)デザインラボの基本設計が完了、31号館に情報技術AI研究所サテライトを整備～



(左から)インタラクティブコミュニケーションLab、IoT Lab、セキュリティLab

X(クロス)デザインラボは、様々なステークホルダーと連携し「専門分野×AI・情報技術」により、社会課題の解決等に向けた社会実装型教育研究プロジェクトを推進する拠点とする計画です。

[支援2]に関しては、事業計画「金沢工業大学における社会実装型教育研究の実践を通じた高度情報専門人材の育成」に基づき、大学院の質的・量的充実(教育研究の充実、大学院生の増加)を目指し、情報技術AI研究所サテライトとして「インタラクティブコミュニケーションLab」「IoT Lab」「セキュリティLab」「Web3 Lab」「エンターテインメント&デジタルコラボレーションLab」「グローバル人材育成Lab」を31号館2階・3階に整備し、各Labで、教育研究の充実に向けた研究プロジェクトが発足しました。

今後の計画(令和7年度)について

令和7年度には、大学・高専機能強化支援事業[支援1]では、X(クロス)デザインラボの着工が予定されており、大学・高専機能強化支援事業[支援2]では、31号館の教育研究環境の整備(令和6年度繰越事項：学際的研究プロジェクト推進Lab)及び12号館2階の研究所サテライトの整備並びに研究プロジェクトの立ち上げを予定しています。今後もKITビジョン2025に基づき、学部学科改組及び大学院工学研究科充実に向けた取り組みを推進していきます。



(左から)Web3 Lab、エンターテインメント&デジタルコラボレーションLab、グローバル人材育成Lab

文部科学省「私立大学等改革総合支援事業」 において全4タイプで選定

本学は、文部科学省が実施する「令和6年度私立大学等改革総合支援事業」において、「特色ある教育の展開」「特色ある高度な研究の展開」「地域社会の発展への貢献」「社会実装の推進」の全4タイプで選定されました。これは全国の私立大学の中でも限られた実績であり、4タイプすべてに選定された大学は、本学、東京都市大学、芝浦工業大学、帝京大学、東京電機大学、藤田医科大学、龍谷大学の7大学でした。

本学の教育・研究・社会貢献・イノベーションの各分野における総合力の高さや先進的な取り組みが高く評価されたものです。今回の選定は、長年にわたる教学改革や地域・産業界との連携、学生の主体的な学びを支える仕組みづくりの成果です。特に、2025年度から本格展開される全学的な学修改革をはじめとする継続的な改善活動は、大学が社会の変化に対応しながら教育の質を進化させていきます。さらに、研究活動においても特色あるテーマの創出と社会実装の推進に力を入れ、地域と共に未来を拓く大学としての役割を明確にしています。

教育・研究・地域・社会実装の4分野における主な取り組み

本支援事業は、大学が自らの特色・強みを活かし、教育・研究・社会貢献・社会実装の各側面で改革に取り組むことを目的として文部科学省が支援するものです。タイプごとの内容は以下の通りです。

タイプ1：特色ある教育の展開

Society5.0の実現を見据えた文理融合教育や教育課程の革新を促進し、高校との接続強化も支援対象とされます。

タイプ2：高度な研究の展開

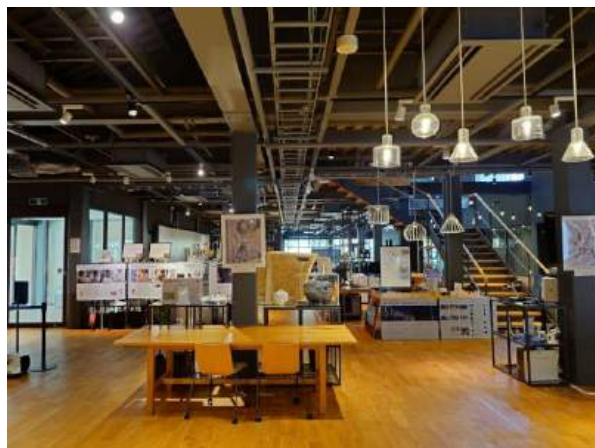
国内外の研究者との交流や研究インフラの整備、大学間・機関間連携による研究高度化が評価対象です。

タイプ3：地域社会への貢献

地域課題に対応する教育・研究や社会人教育、産学官連携を通じた地域振興が求められます。

タイプ4：社会実装の推進

産業界との共同研究、知的財産の活用、技術の実用化などを通じて、研究成果の社会実装を推進します。



本学の社会実装型研究の拠点「Challenge Lab」

本学では、DX（デジタルトランスフォーメーション）、GX（グリーントランスフォーメーション）、SX（サステナビリティ・トランスフォーメーション）といった国家的重点分野に対応する社会実装型の教育・研究を学内全体で推進しています。その象徴が「Challenge Lab」であり、学問領域を超えた連携によって、未来社会に必要とされる新たな技術や価値の創出を目指しています。

今回の全タイプ選定は、こうした挑戦的な取り組みが国に認められた成果であり、本学は次世代を担う情報に強い人材の育成拠点として、引き続き地域と社会に貢献し続けます。

文部科学省の高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)採択校を支援するプログラムを開催

第1回DXハイスクール応援プログラム

文部科学省の高等学校DX加速化推進事業(DXハイスクール)採択校の支援を目的として、令和6(2024)年8月5日(月)・6日(火)にDXハイスクール応援プログラムを開催しました。2日間で全国26都府県から高校教諭95人(延べ128人)、文部科学省・各県の教育委員会7人、高校生51人(延べ104人)の参加がありました。

①探究学習におけるICT機器の活用例の紹介

1 講座あたり20分～60分程度で体験・理解できる10のプログラムを開講しました。

②ICT機器展示・操作体験

本学が有する3Dプリンタ、VR・MR、遠隔授業支援など、探究学習や情報教育に活用できる機器を展示し、操作体験を行いました。

また、北菱電興(株)(石川県)、(株)ストリートスマート(東京都)、(株)マーターポート(東京都)の協力を得て、最新デジタル機器の展示やソフトウェアコンテンツの体験を提供しました。

プログラムと参加人数

プログラム名	内容	場所	参加人数
プログラム① P-1	探究学習のグループ討議を支援するDX経営情報学科 武市祥司教授、平本晋太郎教授	23号館 218室	計3回 50人
プログラム① P-2	生成AIとGoogleのツールで実践できるデジタル探究学習 経営情報学科 平本晋太郎教授 株式会社ストリートスマート	23号館 218室	計1回 41人
プログラム① P-3	新商品デザイン、プロモーション素材作成のための生成AI活用法 経営情報学科 平本晋太郎教授 株式会社IDU【金沢工業大学発スタートアップ企業】	23号館 218室	計1回 34人
プログラム① P-4	探究学習に活かす3DCGとXR(VR/AR/MR)コンテンツ・クリエイション 経営情報学科 出原立子教授	23号館 412室	計4回 55人
プログラム① P-5	人間を測る：アンケートの設計・実施・解析手法と生体・生涯計測 心理科学科 伊丸尚秀教授・渡邊伸行教授、川島朋也講師・加藤俊里講師	23号館 330室	計3回 24人
プログラム① P-6	探究学習のためのプロンプトエンジニアリング 情報工学科 山本知仁教授	23号館 218室	計2回 57人
プログラム① P-7	修学データ解析の手始め 情報工学科 山本知仁教授	23号館 218室	計1回 31人
プログラム① P-8	スマート農業の理解とデータ活用 アクアボックスを例とした農業SDGs 応用バイオ学科 相良純一准教授	23号館1階 学生ステーション	計3回 13人
プログラム① P-9	身の回りの空間のVR撮影とVRメタ技術 建築学科 下川謙一教授・須田 達教授、佐藤弘美講師	23号館 216室	計6回 34人
プログラム① P-10	VR・360度カメラを活用した安全教育(危険の疑似体験) 夢考房運営室 澤田隆之	23号館 221室	計6回 33人



ICT機器を見学する参加者

③教育DXカフェ(フリーディスカッション)

探究学習の進め方や、デジタル機器を活用した教育の実践方法等について、高校教諭と本学の教員とで意見交換の場を設けました。2日間で約50分間の意見交換を3回行い、大澤 敏学長、宮里心一学長補佐、山本知仁情報工学科教授(教育DX推進委員会委員長)と高校教諭延べ20人が意見を交わしました。高校教諭から様々な課題や不安について相談があり、本学の教員がアドバイスをしました。



教育DXカフェの様子

第2回DXハイスクール応援プログラム

令和7(2025)年度の継続支援ならびに新規採択校への支援を目的として、令和7(2025)年2月25日(火)に第2回の応援プログラムを開催しました。

第1回の実施を踏まえ、「高校現場の事例紹介」「プログラミングや国際化・半導体を含む魅力発信型対応に向けたセミナー・ワークショップ」「高校教員同士の意見交換ができるDXフリートーク」「オンライン対応」を充実させ、30以上のプログラムを用意しました。全国29都道府県の72高等学校(公立50校・私立22校)・教育委員会から149人の参加がありました。

第2回の開催に際し文部科学省から後援を受け、開会に先立ち初等中等教育局参事官付参事官補佐の三井俊祐氏からあいさつをいただきました。

①オープニングセミナー

本学が取り組んでいる教育DXの状況や、デジタルを活用する人材像、高校教育現場のご支援・高大連携による人材育成について紹介しました。

②事例紹介(高大連携・企業連携)

高校4校と企業1社から、本学との連携事業についてご紹介をいただきました。

③セミナー・ワークショップ

AI、データサイエンス、プログラミングなどをテーマに本学の教員と技師が実施しました。

④DXフリートーク「教育DXカフェ」

第1回同様に高校と本学とで意見交換をしました。

⑤課外活動紹介

デジタルを活用している課外活動団体がポスター展示・ポスターセッションを実施しました。
[協力団体]IoTプロジェクト、CirKitプロジェクト、電気現象探究会、子どもの成長を見守る「おもちゃ」開発プロジェクト、データサイエンスプロジェクト・RoboCup@Homeプロジェクト

⑥デジタル機器展示・操作体験

本学の所有機器の他、連携する北菱電興(株)(石川県)、リコージャパン(株)(東京都)、(株)マターポート(東京都)、西日本電信電話(株)(大阪府)の協力を得て、高校で活用できそうなデジタル・ICT機器の展示操作体験を行いました。

各プログラムと参加人数

テーマ	コード	プログラム名	担当者	参加数
オープニング	OP	DXを通じた高大連携	大澤 敏学長	101
高大連携・企業連携	K1-1	課題研究を通じたプロジェクトマップの取り組み	静岡県立掛川工業高校 中村博志校長、吉村恵太教諭	22
	K2-1	オンラインツールを活用したAIの基礎を学習する出張授業例	兵庫県立神戸商業高校 大山俊也教諭、データサイエンス・AI教育課程 中村 晃教授	24
	K3-1	デジタル機器を探究活動に活かすための高大連携による3Dプリンター・VR体験事例	石川県立大聖寺高校 高野英樹教諭	49
	K3-2	未来を切り開くデジタル教育-NTT西日本のDX事例とデータサイエンティストのスキルと育成-	NTT西日本エンタープライズビジネス営業部 酒井佑太氏	21
AI	K4-1	探究的学びを推進するためのデジタルモノづくりを通じたカリキュラム開発 静岡県立伊豆総合高等学校	静岡県立伊豆総合高校 小谷安孝教諭、水野純介教諭	25
	A1-1	生成AIとGoogleのツールで実践できるデジタル探究学習	経営情報学科 平本賢太郎教授	38
AI	A2-1	高等教育における生成AIの活用法-探究学習におけるプロンプトエンジニアリングを中心として-	情報工学科 山本知仁教授	27
	A2-2	GX時代の電力システムにおけるAI活用事例の紹介	プロジェクトデザイン基礎教育課程 西田操人講師	2
	A3-1	探究学習での議論を支援するデジタルツール	経営情報学科 武市祥司教授	19
	A4-1	情報通信分野におけるAI及びデジタルツインを活用した事例紹介	電気電子工学科 横谷西也教授	4
	A4-2	新商品デザイン、プロモーション素材作成のための生成AI活用法	経営情報学科 平本賢太郎教授	19
	A4-3	AI+プログラミングでゴミ箱ハック(ものづくり体験)	情報工学科 河並 崇教授	19
DS	B1-1	航空宇宙業界におけるデジタル技術の紹介	航空システム工学科 森吉貴大助教、廣瀬康夫教授、藤田部志講師	3
	B1-2	Web上で実施するアンケートの設計・実施・解析・結果の可視化	心理科学科 伊丸阿佐秀教授、渡邊伸行教授、加藤樹望講師、川島朋也講師	18
	B2-1	データを活用した探究学習のヒント	数理・データサイエンス・AI教育課程 山岡英孝教授	27
	B4-1	地理情報システム(GIS)の利用体験	環境土木工学科 徳永光晴教授	12
プログラミング	C1-1	農業DX・スマート農業の探究学習への導入I～農業DXを学んでみようI～	応用バイオ学科 相良純一准教授	9
	C2-1	掃除ロボットによるプログラミング体験	ロボティクス学科 土居隆宏教授	6
	C3-1	小型ドローン制御のプログラミング体験	ロボティクス学科 村尾俊幸教授	18
xR・3DCG	C3-2	農業DX・スマート農業の探究学習への導入II～スマート農業を体験してみようII～	応用バイオ学科 相良純一准教授	10
	D2-1	探究学習に活かす3DCGとxR(VR/AR/MR)コンテンツ・クリエイション	メディア情報学科 出原立子教授	24
デジタル機器・ツールの活用	D3-1	身の回りの空間のVR撮影とVRメモ技術	建築学科 佐藤弘義講師、須田 達教授	5
	E2-1	フライトシミュレータを用いた遠隔授業体験	航空システム工学科 橋本和典教授	中止
	E2-2	DX生産システムの探究	機械工学科 林 晃生准教授	4
教育全般	E4-1	ドローンの教育DX活用	航空システム工学科 赤坂剛史准教授	5
	F1-1	素朴な想いをカタチにする探究学習の紹介(ものづくり×IoTプログラミング)	電気電子工学科 野口啓介教授、大澤 直樹教授、金野武司准教授、学生プロジェクト	11
	F1-2	グローバル人材を育てるための教育DXと事例紹介	ロボティクス学科 鈴木亮一教授	9
	F4-1	修学データ解析の手始め	情報工学科 山本知仁教授	11
	G3-1	半導体科目開講に向けての基礎講座	電気電子工学科 山口敏史教授	4
課外活動・フリートーク	P5-2	DXフリートーク「教育DXカフェ」	-	32
	P5-1	AI・xR等を活用した課外活動(ポスターセッション・ポスター展示)	-	-
その他	X1-1	デジタル機器展示・操作体験	-	-
	X1-3	個別相談	-	-
	X1-4	キャンパス見学	-	-
合計(のべ)				592

高校生のためのデジタル体験会「DXフェス」を開催

令和6(2024)年8月5日(月)・6日(火)に高校生のためのデジタル体験会「DXフェス」を開催しました。令和6(2024)年2月に開催した「Techフェス」をベースに新たに文理融合型のプログラムを加え、ICT機器の展示・操作体験は、同時開催の「DX応援プログラム」と共通のプログラムとしました。2日間で高校生延べ57人、高校教諭延べ47人、計104人が参加しました。北陸三県以外に宮城県・山形県・栃木県・群馬県・東京都・長野県・岐阜県・大阪府など遠方の高校生も来てくれました。

ITソフトウェアを活用したグループディスカッションや生成AIの体験、データ分析体験、3DCG&3Dプリンタ体験、プログラミング体験、大型飛行機のシミュレーション体験等、90分程度の8種類のデジタル体験講座を開講しました。



モデリングとプリンティング体験をする参加者



地域幸福度についてカードゲームを用いて学ぶ参加者

プログラム名	内容	場所	参加人数
F-1 カードゲームとオープンデータを用いた地域幸福度(ウェルビーイング)向上ワークショップ 経営情報学科 平本督太郎教授 株式会社LODU [金沢工業大学発スタートアップ企業]	様々なデータを活用し皆が幸せな地域を創るための考え方を楽しみながら学べるカードゲームを体験！日本政府推奨の地域幸福度指標のデータを用いて、各地域の強み・弱みを把握するスキルを習得！	23号館 214室	計1回 6人
F-2 Googleのツールを併用した探究学習におけるアイデア創出体験ワークショップ 経営情報学科 平本督太郎教授 株式会社ストリートスマート	大手コンサルティング会社出身の教員とGoogle認定パートナー企業の支援を受けながら、生成AIとGoogleツールの併用により実現する、探究学習の質を飛躍的に向上する手法を体験！	23号館 214室	計1回 20人
F-3 新商品デザイン、プロモーション素材作成のための生成AI活用体験 株式会社LODU[金沢工業大学発スタートアップ企業]	探究活動で実際に活用できる新商品デザインの方法やポスターなどのプロモーション素材作成を簡易に体験することができます。	23号館 214室	計1回 11人
F-4 コンテンツ評価の実際 アンケート評価と生理計測から分かること 心理科学科 伊丸岡俊秀教授・渡邊伸行教授、川島朋也講師・加藤樹里講師	同じコンテンツに対する評価でも、アンケート調査から得られることと人間の直接計測による生体データから得られることには違いがあります。両方を体験することで、それぞれの特徴について考えてみよう！	23号館 327室	計3回 16人
F-5 モデリングとプリンティング体験 夢考房運営室 榎本龍政	3Dモデリングツールの導入を体験できます。リングのモデリングを通して3Dデータ作成を体験しよう！	26号館1階	計3回 19人
F-6 ロボット掃除機とプログラミング ロボティクス学科 土居隆宏教授	ロボット掃除機とコンピュータをつないでプログラミング！モータを駆動したり、メロディーを鳴らしたり、さらにセンサの状態を読み取ったりして自由自在にコントロールしてみよう！	23号館1階 コラボレーション スタジオ	計3回 19人
F-7 ドローンと大型旅客機の操縦体験 航空システム工学科 橋本和典教授	ドローンと大型旅客機、かたちの全く異なる飛行機械を、実機やシミュレータを用いて操縦体験します。さて、操縦方法も全く異なるのか？！	24号館 110室	計5回 23人
F-8 AI+プログラミングでゴミ箱ハック 情報工学科 河並 崇教授	AIとプログラミングを学んで、便利なゴミ箱を作ろう！	23号館 415室	計3回 40人

SDGsゲーミフィケーション教材を通じた次世代人材の育成と国際展開

金沢工業大学は、SDGs時代のグローバルリーダー育成の成果を認められ、平成29(2017)年に第一回ジャパンSDGsアワード内閣官房長官賞を受賞しており、学内外におけるSDGsの推進を目的として、同年にはSDGs推進センターを発足させました。

センターでは、教育機関、自治体及び企業などがSDGsに取り組む活動として、「THE SDGs アクションカードゲーム X (クロス)」など、数多くの独自のゲーミフィケーション教材を開発しています。こうしたゲーミフィケーション教材の開発やそれを用いたSDGs教育について、国内外から大いに注目を集めており、各地域ごとの課題や特色を反映したオリジナルのゲーム開発や、ゲーミフィケーション教材を通じた人材育成に関する活動ぶりは高く評価されています。

ブータン版「THE SDGs アクションカードゲーム X (クロス)」の開発

SDGs推進センターは、「THE SDGs アクションカードゲーム X (クロス)」のSustainable Bhutan Version (以下「ブータン版X (クロス)」)の開発プロジェクトに取り組み、2024年8月に完成しました。当開発プロジェクトは国連の専門機関の一つである国連食糧農業機関 (FAO) が後方支援を行い、ヒマラヤ山脈地域の農業食料システムの変革に焦点を当てたゲームとして制作され、ブータンで開催されるユース会議で発表しました。

完成したブータン版X (クロス) は8月12日の国際青少年デー (International Youth Day) にあわせてブータンで開催されたFAOとブータン農業省共催の「National Youth Symposium」初日に体験会が行われ、ブータンのワールド・フード・フォーラムのユースメンバーなど100人が参加し、非常に好評を博しました。

今後は、ブータンのユースメンバーにオンラインでファシリテーター研修を実施し、そのメンバーが主体となってブータン国内に展開していく予定です。



ゲーム体験会の様子

「SDGsユース沖縄会議2024」を開催 ～SDGsゲーム体験も実施～

令和6(2024)年12月20日(金)に、SDGs全国フォーラム2024沖縄のサイドイベントとして、SDGsユース沖縄会議2024「遊びながら未来を語る」を開催しました。本イベントでは、小学生から大学生までの若者約40人が、SDGs後半戦とポストSDGsに関してディスカッションを行い、また本学がこれまでに開発した4種類のSDGsゲームを体験し、参加者が理想の未来について宣言しました。

その活動ぶりが高く評価されている本学の特色を活かし、今後もさまざまな地域で次世代を担う若者を主体としたディスカッションや宣言の場を設け、ポストSDGsの議論の活性化にも貢献します。



本学と中継を繋ぎディスカッションする参加者

内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」の一環で、小松マテールとKITコーオプ教育プログラムを実施

化学素材メーカーの小松マテール(株)(石川県能美市)との産学連携で行われた「KITコーオプ教育プログラム」の成果報告会が、2月26日(水)に金沢工業大学扇が丘キャンパスで行われました。



成果を報告する谷本さん



共同開発した「カボコーマ®ストランドロッド」(左)を世界で初めて耐震補強に用いた小松マテールのfa-bo(右)

内閣府「令和5年度地方大学・地域産業創生交付金事業」の一環で実施

石川県が申請し、金沢工業大学革新複合材料研究開発センター(以下:ICC)を拠点として実施する研究開発プロジェクト「地域で培われてきた高度な繊維・機械加工技術を活かした環境適合型複合材料川中産業創出プロジェクト」が、内閣府の「令和5年度地方大学・地域産業創生交付金事業」に採択されました。

本プロジェクトでは、金沢工業大学がハブとなり、複合材料産業において高度な繊維・機械加工技術を有する地元中小企業群が連携。デジタル技術による生産プロセスの高度化や素材の低環境負荷化に関する研究開発、素材・設計～評価に精通した専門人材育成を実施します。石川県内にある複合材料の「川中企業」群をクラスター化し、強靱なサプライチェーンの構築を目指しています。

このたびの小松マテールとのKITコーオプ教育は、当内閣府事業の一環で行われた第一号となるもので、複合材料を研究テーマに行われました。

共同開発された熱可塑性炭素繊維複合材料を研究テーマに実施

小松マテールとICCが共同開発した熱可塑性炭素繊維複合材料(CFRTP)「カボコーマ®ストランドロッド」について、機械工学科4年次の堀 裕貴(ほり・ゆうき)さんと、建築学科4年次の谷本早紀(たにもと・さき)さんが、小松マテールの社員と共に、その機械的特性評価や木材建築への耐震補強材としての活用に向けた課題検証に取り組みました。

成果報告会には、小松マテール常務取締役技術開発本部長兼管理本部長の小川直人氏と、実務家教員として学生の指導にあたっていただいた奥谷晃宏氏、各学生のメンターとしてサポートいただいた中山武俊氏、細川穂奈美氏が参加しました。金沢工業大学からは大澤 敏学長や各学生の指導教員、ICCの鷗澤 潔所長や小田切信之教授など総勢20人が出席しました。

学生からの発表後はメンター役の社員や指導教員からもコメントがあり、活発な質疑応答もなされるなど、本取り組みの重要性や有用性を感じさせる熱気あふれる報告会となりました。

内閣府事業における専門人材育成の取り組みとして、コーオプ教育プログラムは次年度以降も継続的な活用を予定しています。複合材料という共通性のあるテーマのもと、ICCと大学の研究室間の連携や、先輩から後輩への広がり、そして企業との一層の連携拡大と強化が期待されています。

独・フラウンホーファー研究機構IGCVとの研究 開発・事業化拠点「FIP-MIRAI@ICC」を立ち上げ

本学の革新複合材料研究開発センター（ICC）は世界有数の応用研究機関である独・フラウンホーファー研究機構（Fraunhofer-Gesellschaft）の鑄造・複合材料・プロセス技術研究所（IGCV）との研究開発・事業化拠点（FIP拠点）をICC内に立ち上げることに合意しました。

本拠点はフラウンホーファー研究機構におけるフラウンホーファー・イノベーション・プラットフォーム（FIP）拠点の1つとして位置付けられ、複合材料に関する拠点としては日本初となります。拠点名は複合材料とそれを使用する社会の「未来」につながるテーマに取り組むことから「FIP-MIRAI@ICC」と名付けられました。拠点内では「リサイクル炭素繊維複合材料を活用した製造技術と適用技術」を研究テーマに研究開発と技術移転・事業化を目指して活動する予定です。

拠点立ち上げの意義

GX（グリーントランスフォーメーション）の取り組みが世界中で行われている中、100mを超える長尺の風力発電用ブレードや燃料電池車の水素貯蔵タンクは炭素繊維複合材料で実現が可能ですが、炭素繊維複合材料の市場が飛躍的に成長している欧米や中国に比べ、日本国内は新規開発が少なく、市場の成長がみられないのが現状です。さらに、SDGsの目標の一つでもある「つくる責任 つかう責任」が製造者・消費者双方で求められる今日では、リサイクルも含めた産業構造でなければ事業化は見込めません。令和5年度より取り組む内閣府の地方大学・地域産業創生交付金事業（プロジェクト名「CCIM(Creative Composite Ishikawa Million)」）における研究開発活動とも連動させ、リサイクル炭素繊維複合材料の研究開発・技術移転・事業化に向けたone-stop-shopの研究開発拠点として、常駐するフラウンホーファーの研究員とともに石川県内外の企業における炭素繊維複合材料事業の成長に貢献することを目指します。

JEC World 2025展への出展

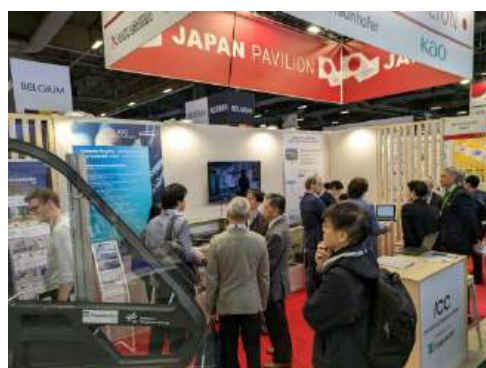
JEC World展は、毎年3月初旬にフランス・パリで開催される複合材料に関する世界最大規模の展示会です。本展示会のJapan Pavilion内において、ICC・IGCV合同ブースで両者の共同展示を行い、FIP-MIRAI@ICCの紹介とともに、両者の優れた技術についても来場者に説明しました。

また本会場では、JEC Groupの協力を得て、FIP-MIRAI@ICCの開設に関するプレス発表を行い、複合材料分野で世界的に購読者を有するJEC Composites Magazine誌、北米で強い影響力を持つComposites World誌の取材を受けました。

このほか、会場内の他ブース等を訪問し、CCIM事業に資する動向の把握・調査、ネットワーク作りを行ったことに加え、会期中は、常にICC・IGCV合同ブースも非常に盛況であり、FIP-MIRAI@ICCの活動開始アピールも含め、存在感を高めることができました。



取材を受ける両機関の各スタッフ



来場者で賑わう合同ブース

参画中の「Tech Startup HOKURIKU」が本格始動 ～スタートアップ創出を目指し研究の社会実装を加速～

国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）の大学発新産業創出基金事業の「スタートアップ・エコシステム共創プログラム」は、大学等発スタートアップの継続的な創出を支えるための人材・知・資金が循環するエコシステム形成を目的としています。

北陸地域から北陸先端科学技術大学院大学と金沢大学の2校を主幹機関とし、本学を含む大学12校と高等専門学校3校、ベンチャーキャピタル1社がプラットフォームを組み、JSTに「Tech Startup HOKURIKU」（TeSH）を提案し、採択を受けました（支援期間：令和5～9年）。

本プログラムのもと、令和6年度から大学の基礎研究と事業化の間にある”ギャップ”を埋めるため、参画大学・高専に所属する研究者に対してGAPファンドを通じた支援を行っています。本学からは、応用研究（用途仮説設計から概念実証フェーズ手前）を支援する「ステップ1」に、航空システム工学科の赤坂剛史准教授の研究課題「最大積載量50kg・飛行距離50km超のVTOL型有翼電動ドローンの事業」が採択されました。

固定翼大型ドローン開発への挑戦

赤坂准教授がGAPファンドの支援を受けて取り組む「最大積載量50kg・飛行距離50km超のVTOL型有翼電動ドローン」はまだ国内では例がありません。

2024年12月および2025年3月に、0号機（翼なし試作機）を用いた飛行実験を行い、積載量50kg超の重りを積載した機体が浮上しホバリングできることを確認しました。



大型ドローン飛行実験の様子

令和6年能登半島地震では、被災地の港が隆起したため、救援物資輸送船が接岸できないという想定外の課題が浮き彫りになりました。ドローンは充電に数時間要するほか、物資輸送に使用するには予備のバッテリーの準備も必要となります。

赤坂准教授は50kmの飛行を開発目標に設定しています。50kmの飛行距離であれば、沿岸の船から長距離を飛行して物資を運ぶことが可能となるほか、一度の充電で短距離往復が複数回できるというメリットもあります。一方でドローンを大型にすると機体自体の振動制御が課題となりますが、赤坂准教授はこの課題をクリアし、今回の50kg超の積載でも浮上・ホバリング時に特に大きな振動がなかったことが確認できました。

スタートアップ創出に向けた支援

本学では研究成果の社会実装の1つの形としてスタートアップ創出を位置づけ、大学発のスタートアップについての規程・ルール等を整備するとともに、産学連携局にコーディネーターを配置し、支援体制を強化しています。

赤坂准教授の取り組みにおいては、GAPファンド「ステップ1」での実績を更に発展させ、概念実証からスタートアップ組成までを支援する「ステップ2」への申請・採択を目指します。また、学内の有力な研究シーズを発掘し、公益財団法人石川県産業創出支援機構（ISICO）や中小企業基盤整備機構北陸本部等の学外機関とも連携しながら、研究成果の社会実装を一層進めていきます。

中小機構北陸本部と学校法人金沢工業大学との包括連携協定を締結

独立行政法人中小企業基盤整備機構（中小機構）北陸本部と本法人の間で、産学連携による社会変革とスタートアップ創出を目指した包括連携協定を令和7（2025）年2月20日（木）に締結しました。

中小機構北陸本部は、事業の自律的発展や継続を目指す中小規模の事業者・ベンチャー企業のイノベーションや地域経済の活性化を促進し、わが国経済の発展に貢献することを目的とする政策実施機関です。北陸地域の私立大学（学校法人）で、中小機構北陸本部との包括連携協定を締結したのは、本法人が初となります。

協定締結式では、中小機構北陸本部から押田誠一郎本部長、田中幸也企画調整審議役、大田原良子企業支援部長ほか関係者が、本法人からは泉屋吉郎理事長、大澤敏学長、鹿田正昭校長ほか関係者が出席しました。



協定書を手に写真に納まる泉屋理事長(左)と押田本部長(右)

押田本部長と泉屋理事長のあいさつの後、経済産業省大臣官房政策統括調整官（兼）中小企業庁政策統括調整官の西垣淳子氏からお祝いのビデオメッセージを、中部経済産業局電力・ガス事業北陸支局長の向野陽一郎氏から祝辞を賜りました。その後、両機関により協定書に署名がなされ、向野支局長もご列席いただき、写真撮影が行われました。



西垣淳子氏からの
お祝いのビデオメッセージ

協定の趣旨および今後の展望

このたびの連携協定は、本法人と中小機構北陸本部が協力し、産学連携を通じたイノベーションの創出やビジネス展開、新しい技術を有する地域牽引企業の支援を強化する取り組みなどにより、地域経済と地域産業の活性化に寄与することを目的としています。両者はこれまでにジェグテック（J-GoodTech）を活用したシーズ・ニーズのマッチングや、いしかわ大学連携インキュベータ（i-BIRD）に入居している企業と各研究室との連携を推進してきました。

こうした取り組みをさらに前進させ、研究成果の社会実装や新たな産業の創出を図ります。さらに新しいビジネスモデルを構築できるスタートアップ創出を目指すことで、大学・高専や企業内におけるイントレプレナー（組織内で新しい事業やプロジェクトを立ち上げ、イノベーションを起こす人材）や、アントレプレナー（自ら創業する起業人材）を育て、地方創生にも貢献します。

中小企業基盤整備機構 × 学校法人金沢工業大学

北陸地域企業と共に地域経済や産業の活性化を目指す

中小企業等の経営課題解決に向けた様々な支援制度
百社の強み大融合
金沢工業大学、国産高専専門学校 技術や社会の課題解決に資するシーズと学術的な知見

連携事項

- (1) 「ジェグテック（J-GoodTech）」によるニーズ・シーズのマッチング
- (2) 事業化や共同研究・開発に係る産学官連携支援
- (3) 「いしかわ大学連携インキュベータ」との連携による社会実装の推進
- (4) 新製品開発、販路開拓を目指す企業に対する伴走型専門家の支援
- (5) 産学連携によるスタートアップおよび人材育成に関する支援



国際高専が海外子女教育振興財団と協力協定を締結

国際高専は、令和6(2024)年11月19日(火)に白山麓キャンパスの会議室で、公益財団法人海外子女教育振興財団(JOES: Japan Overseas Educational Services)との協力協定を締結しました。本協定の目的は、保護者の海外赴任などで、海外で学ぶ日本人生徒並びに、既に帰国した子女の進学及びキャリア構築を支援すると共に、海外子女・帰国子女教育の振興に共に取り組むことにあります。

JOESは、渡航前の教育相談や、オリエンテーションの実施、海外子女のための通信教育や進路情報の提供、帰国子女のための英語保持教室の開催等を行っており、その活動は国からの補助金並びに企業・団体・学校からの維持会費で賄われています。海外の日本人学校・補習授業校、インターナショナルスクールの生徒を支援し、一方で海外駐在員を派遣する数多くの企業人事担当者に教育関係情報を提供しています。また、オフィスを金沢工業大学東京・虎ノ門キャンパスと同じビルの6階に構えられていることから、これまでもJOESとは良いお付き合いをさせていただいています。本協定は信頼関係を更に強固にし、以下の事業をより強力に推進することになるはずです。

- ①進学説明会など進路・キャリア選択に関わる教育機会の共同開催
- ②JOESが実施する進学説明会及び教育活動等における国際高専の学生募集活動機会の提供
- ③国際高専が実施するオープンキャンパス、サマーキャンプ、入試説明会等におけるJOES登録生の優先的受け入れ

午前11時から行われた締結式は、泉屋吉郎理事長、JOESの綿引宏行(わたびき・ひろゆき)理事長があいさつし、続いて鹿田正昭校長がスライド・動画で本校を紹介しました。綿引理事長、葭和宣(あし・かずのり)事業部長、泉屋理事長、鹿田校長の4人が協力協定書にサインを行い、互いの発展を期し、固い握手を交わしました。締結式の司会は向井 守副校長が務めました。

式終了後には、村井好博常務理事、松下臣仁国際理工学科長等がキャンパスをご案内し、見学後はカフェテリアで昼食を取りながら意見交換を行いました。世界の日本人学校や現地校、インターナショナルスクールに通う日本人への教育、さらには日系人や日本に興味を持つ若者への教育機会にまで話が広がりました。

白山麓キャンパスを後にしたJOESの皆様は、鹿田校長、向井副校長らの案内で、金沢キャンパス(4・5年生の学修環境)、ライブラリーセンター、チャレンジラボ、夢考房等を見学しました。良い連携活動を進めると共に、本校の学生募集への協力について力強い言葉をいただきました。



泉屋理事長(左から2人目)や国際高専教職員らと記念写真に納まる綿引理事長(中央)と葭事業部長(左端)



協定書を手に写真に納まる(左から)鹿田校長、泉屋理事長、綿引理事長、葭事業部長

電気技術者試験センターの国家試験を全国の教育機関で初めてオンサイト型C B T方式で実施

令和6(2024)年7月に、一般財団法人電気技術者試験センター(以下：試験センター)のCBT(Computer Based Testing)方式による第三種電気主任技術者オンサイト型試験を、連携協定に基づき全国の教育機関で初めて本学で実施しました。オンサイト型国家試験は7月5日(金)、10日(水)、21日(日)、27日(土)の4日間実施され、延べ51人の本学学生が受験しました。

本連携協定は、需要に応じて学校施設などを利用して国家試験を機動的に実施する新たな取り組みを、試験センターと本学が共同で行うものです。試験センターはオンサイト型国家試験を金沢工業大学モデルとして全国各地に展開していく考えです。

試験最終日の7月27日(土)に、試験センターから堀尾容康理事長、山崎正史専務理事、荒井正和業務部長の3人が視察のために本学を訪問しました。また、全日本電気工事業工業組合連合会の米沢寛会長と松橋幸雄常任理事のお二人も来学し、試験を視察されました。

試験開始前に、益谷記念室で大澤 敏学長、村井好博常務理事、自己開発センターの深見正所長、山本成人副所長、藤野朝之課長と懇談しました。オンサイト型国家試験の実施意義、将来の国家試験のあり方など、有意義な意見交換が行われました。



本学の出席者(左側)と益谷記念室で懇談する試験センターの出席者(右側)



試験会場の説明をする村井常務理事(右から2人目)

試験会場の視察では、村井常務理事が試験会場を設置した経緯や状況を説明しました。懇談及び試験視察の後、ライブラリーセンター(工学の曙文庫、PMC、五十嵐威暢アーカイブ)、CDIOイノベーション&デザインスタジオ、Challenge Labなどを見学されました。

石川県電気工事工業組合に感謝状贈呈

一般財団法人電気技術者試験センターのオンサイト型国家試験視察に同行された石川県電気工事工業組合(以下：工事組合)の米沢理事長に7月27日(土)大澤学長から感謝状が贈呈されました。

これは、本学の自己開発センターで開講している「第二種電気工事士技能試験対策講座」(年2回開講)で、工事組合から長年にわたって講師派遣に加えて講座内で使用する電線を寄贈いただいていることに感謝したものです。

本対策講座は、平成7(1995)年に人材開発センター(現：自己開発センター)が開設された当初から開講しているもので、工業組合には平成20(2008)年から協力いただいています。7月21日(日)に終了した上期試験まで600人を超える学生や一般社会人が受講し、毎回90%を超える合格率(全国平均は60~70%)を達成しています。



大澤学長から感謝状を受け取る米沢理事長(右)

学友会を中心とした地域貢献活動

～能登半島地震支援、イーグル隊の野々市市表彰～

文化部会、体育部会、および、委員会として活動する本学の学生団体「学友会」は、学生相互のコミュニケーションや学生の地域貢献、地域の方々との交流を目的として、地域の清掃活動や保育施設でのふれあい活動、地域の防犯活動などに取り組んでいます。学生が社会に貢献する実践の場としても機能し、地域との絆を深めるとともに、学生一人ひとりが社会の一員として責任を持ち、成長する貴重な機会となっています。

能登半島地震への災害ボランティア活動

令和6(2024)年1月1日に発生した能登半島地震は、輪島市での大規模火災や珠洲市での津波、道路の陥没やがけ崩れなど甚大な被害をもたらしました。被災地の一日も早い復興を願い、学園全体の協力のもと、学友会を中心に穴水町を拠点とした災害支援活動を実施しました。

第1回(2月26日・27日)、第2回(3月11日・12日)に続き、令和6年度は第3回(5月18日・19日)、第4回(6月22日・23日)に実施しました。公費解体制度に伴う家財搬出や分別、仮設住宅の表札作成、重量物の移動など、現地のニーズに即した作業を行いました。

参加学生は、事前説明会や教職員の指導を受け、用意されたヘルメットや災害用手袋を着用し、安全に配慮しながら活動しました。依頼者である地域住民からは、涙ながらの感謝の言葉もいただきました。また、学友会による活動は学生自身にとっても学びの機会となりました。本活動は、学園関係者や同窓会「こぶし会」、父母会「拯友会」(しょうゆうかい)の協力を得て実施されたものであり、今後も継続して復興支援を行っていく予定です。



公費解体前の家屋から家財などを搬出するボランティア参加者

地域防犯パトロール「イーグル隊」の表彰

学友会が中心となり平成14(2002)年に発足した「金沢工業大学イーグル・セーフティ・プロジェクトチーム(通称イーグル隊)」は、白山警察署や野々市市防犯協会、本学職員と連携し、扇が丘キャンパス周辺の防犯パトロールを毎月2回実施してきました。平成14年の結成以来、多年にわたり防犯パトロールや犯罪防止に関する広報啓発活動等の活動を続け、市の防犯活動に貢献したことが評価され、令和6(2024)年度野々市市表彰【地域功労表彰】を受賞しました。



栗野々市市長(中央)から表彰を受ける中野委員長(左)

11月3日、野々市市役所で執り行われた表彰状贈呈式では、学友会 学生地域活動推進委員会委員長の中野祐三さんが表彰状と記念品の贈呈を受けました。

今回の受賞は、学生の継続的な活動はもちろん、白山警察署や野々市市防犯協会、そして本学教職員の協力によって支えられてきた成果でもあります。イーグル隊の活動は、地域の安全と安心のまちづくりに今後も寄与していくことが期待されています。

KIT・ICT『災害対応力の強化』『学生募集力の強化』『修学指導強化』Daysを実施

令和6(2024)年度のゴールデンウィークの休日には含まれた平日である4月30日(火)～5月2日(木)の3日間は、授業を実施せず、コロナ禍以降に十分に時間をかけて取り組んでこられなかったことに注力する期間としました。

令和6年1月1日(月)に震度7に見舞われた能登半島大地震の発生を受け、災害発生時の本学の対応・体制について見直す機会として「**災害対応力の強化**」に取り組むこととしました。

また、令和7(2025)年度に計画している学部学科改組に向け、新たに文理探究型学部として再編した情報デザイン学部とメディア情報学部の募集の在り方を含めた「**学生募集力の強化**」を掲げました。

さらに学部入学者が多様化している現在、「障害者差別解消法」の改正により令和6年度から私立大学でも希望者に対する合理的配慮が義務化されたことへの対応と、新年度開始から約1ヵ月を経過した時点での学生のケアを目的とした「**修学指導の強化**」の3点を打ち出しました。これらに全教職員で取り組むため、「KIT・ICT『災害対応力の強化』『学生募集力の強化』『修学指導強化』Days」と銘打ち、学園を挙げたイベントとして実施しました。

< 1日目 > 4月30日(火) 災害対応力の強化

午前10時に地震が発生したと想定した避難訓練を実施しました。避難後直ちに23号館1階コミュニケーションスタジオに非常災害対策本部を設置し、村井非常災害対策本部長はじめ、各対策担当の委員が対策本部に集結しました。全員ヘルメット、スタッフベストを着用し席に着きました。そして、①総務班 ②連絡班 ③施設・消火班/物資班 ④避難・誘導班 ⑤救護班 ⑥学生対応班、それぞれの非常災害対策本部の組織及び主な担当事項や役割を説明しました。そのあと担当者から各号館の避難状況報告、意見交換を行いました。また、同時に本部長の指示で安否確認メールを発信しました。意見交換では、障害のある学生や外国籍の学生へのケア、災害本部の集合場所をアナウンスする方法の整備、地域の避難場所もあるので収容人数(トイレ問題等)も再検証する必要があるなど、多くの案件について意見を交わしました。

また、訓練用の人体模型とAEDを使用して心臓マッサージなどの救命蘇生法を学生が体験しました。



非常災害対策本部で意見交換をする対策担当の委員



訓練用人体模型で心臓マッサージを体験する学生

< 2日目 > 5月1日(水) 学生募集力の強化

2日目は学生募集研修会を開催し、会場である酒井メモリアルホールには高校・中学校を訪問する担当者が出席し、他の教職員はZoomで視聴しました。

午後からは、各学科主任が学科の特長について説明し、地方の国立大学にも負けていないという自負が学科主任の教員から感じられ、今後の学生募集活動の参考とすることができました。



各学科の特徴についての説明を受ける職員

5月1日(水)午前		
9:00~9:10	挨拶	村井法人本部長
9:10~9:50	学部学科改組	大澤学長
9:50~10:10	大学入試について ・令和5年度入試結果について ・令和6年度入学試験のポイント	青木副学長・入試部長
10:10~10:40	学生募集概要説明	丹羽入試センター次長
10:40~11:00	大学学生募集について ・令和6年度大学学生募集活動について	下津 企画広報室長

5月1日(水)午後			
13:00~13:20	挨拶		村井地区連絡委員会委員長
13:20~13:40	情報デザイン学部	経営情報学科	徳永教授
		環境デザイン創成学科	武市教授
13:40~14:00	メディア情報学部	メディア情報学科	出原教授
		心理情報デザイン学科	伊丸岡教授
14:00~14:30	情報理工学部	情報工学科	山本教授
		知能情報システム学科	
		ロボティクス学科	竹井教授
14:45~15:45	工学部	機械工学科	藤本教授
		先進機械システム工学科	加藤教授
		航空宇宙工学科	吉田教授
		電気エネルギーシステム工学科	大澤教授
		電子情報システム工学科	野口教授
15:45~16:00	バイオ・化学部	環境・応用化学科	露本教授
		生命・応用バイオ学科	袴田教授
16:00~16:50	建築学部	建築学科	下川教授
		建築デザイン学科	

< 3日目 > 5月2日(木) 修学指導の強化



講師の神藤氏

『修学指導強化』Dayの企画として「障がいのある学生の受入れと合理的配慮」に関するFD・SD研修会を、対面とオンラインのハイブリッドで開催しました。講師として関西大学 学生相談・支援センターの神藤典子(しんどう・のりこ)氏をお招きし、「障がいのある学生の受入れと合理的配慮～障がい学生支援室10年間の取組～」と題し講演いただきました。

この背景に「障がいを理由とする差別の解消の推進に関する法律」(いわゆる「障害者差別解消法」)が平成28(2016)年4月に施行され、その改正法が令和6(2024)年4月1日(月)に施行されました。改正法では「合理的配慮の提供」が私立大学でも義務化されました。本学では、これまで障がいのある学生に対し、できる限りの支援を行ってききましたが、義務化に伴い、規則の見直しや申請から合理的配慮の提供までのプロセスを整理し、明確化する準備を行ってききました。

I. 教育の取り組み

金沢工業大学（以下、本学）の教育目標は、「自ら考え行動する技術者の育成」です。この目標を達成するために授業や課外活動を通じて実社会の課題にチームで取り組み、アイデアの創出から具体化するまでのプロセスを常に意識し、自らが考える習慣を徹底的に訓練する教育を実践します。

学生は、「何のために」「何をするのか」という自覚と目的を明確に持ち、日々研鑽に努める必要があります。そのために、教職員はどれだけ学生が学び取ったか、いかに学ぶ力を伸ばせたかを重視し、学生の学びを支援するため、様々な活動に取り組んでいます。

教育目標を具現化するための学部における3つのポリシー

本学では、建学の綱領に掲げる「高邁な人間形成」、「深遠な技術革新」、「雄大な産学協同」の理念に基づき、「自ら考え行動する技術者の育成」という教育目標を定め、それを具現化するために、3つのポリシー（ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシー）を一貫性のあるものとして策定し、公表しています。

アドミッションポリシー（大学の入学者受け入れ方針）

本学は、建学の綱領に掲げる「高邁な人間形成」、「深遠な技術革新」、「雄大な産学協同」の理念に基づき「自ら考え行動する技術者」の育成を教育の目標としています。

本学は、自らが持つ資質や多様な能力を向上させようとする意欲と共に、もの・コトづくりに対する興味や科学技術への探求心と、さらには本学の行動規範である KIT-IDEALS に共感し、自らの自己実現を目指す者の入学を求めています。

求める学生像

○ 本学で学ぶ目的や意義が明確な者

1. 進学目的が明確で、新しい価値の創造に知的好奇心を持つ者
2. 理工学の知識を役立て、幅広く社会で活躍する技術者を目指す者
3. 科学技術とその応用分野に関心を持ち、もの・コトづくりに積極的にチャレンジする者

○ 本学の教育システムを積極的に活用できる者

4. 本学の教育システムの特徴や仕組みを理解し、効果的に活用することで自らの能力を高める意欲のある者
5. 他者と積極的に関わり、チームで協力して学修することに興味のある者

○ 科学技術を学び応用するために求められる基礎学力を身につけている者

6. 理数系科目の学習を好み、本学の修学のために必要な基礎学力を身につけている者
7. 社会に関心を持ち、多様な情報から自らの意見をまとめて表現するために必要な英語や国語、地理歴史、公民、情報等の基礎学力を身につけている者

カリキュラムポリシー（大学の教育課程の編成及び実施に関する方針）

学位授与方針に掲げる能力を身につけるための教育課程（修学基礎教育課程、英語教育課程、数理・データサイエンス・AI教育課程、プロジェクトデザイン基礎教育課程、専門教育課程）を以下のとおり編成します。

- ◆ 歴史観、世界観、倫理観ならびに使命感を包含した人間力を身につけるとともに、生涯にわたり学修する姿勢を育成するための修学基礎教育課程
- ◆ グローバルに活躍するためのコミュニケーション能力を修得するための英語教育課程
- ◆ 専門分野において求められる数理基礎能力を修得するための数理・データサイエンス・AI教育課程
- ◆ 社会で求められるイノベーションを効果的に実践する手法を学ぶためのプロジェクトデザイン基礎教育課程
- ◆ 専門分野における基礎理論、および高度な専門知識と技術を修得するための専門教育課程

これらの教育課程のもとで以下の教育を実施します。

- ◆ チーム学習やアクティブラーニングにより自ら学び主体的に活動する能力を育成するための初年次教育
- ◆ 修得した知識を知恵へ転換し、問題発見・問題解決能力を育成するためのプロジェクトデザイン教育
- ◆ 技術者を取巻く社会環境を理解し、技術者に求められる素養・能力を育成するためのキャリア教育
- ◆ Conceive（考える）、Design（設計する）、Implement（実行する）、Operate（運用する）を重視して国際的に通用する創造する力を身につけるための総合教育
- ◆ イノベーションを可能にする世代・分野・文化を超えた共創教育

これらの教育実践を通して得られる学修成果は、多面的な評価方法（試験、クイズ・小テスト、レポート、成果発表、作品、ポートフォリオ等）に基づき総合的に評価されます。

学科及び課程の教育課程の編成及び実施に関する方針は、大学の教育課程の編成及び実施に関する方針に従い別途定めています。

ディプロマポリシー（大学の卒業の認定に関する方針）

本学の建学綱領に掲げる「高邁な人間形成」、「深遠な技術革新」、「雄大な産学協同」の理念に基づき「自ら考え行動する技術者」となるために、豊かな教養と社会で活躍できる以下の能力を身につけ、卒業要件を満たした者に学位を授与します。

- ◆ 専門分野の知識を修得し、それらを知恵に転換できる能力
- ◆ 地域社会や産業界が持つ多様な問題を発見し、それらを解決できる能力
- ◆ 世代・分野・文化を超えた価値観を共有し、イノベーションを実現できる能力

世代・分野・文化を超えた共創教育研究の推進

「KIT リカレント教育プログラム」の夏期・春期の集中講義として「情報技術教育プログラム（14科目）」を開講

「情報技術教育プログラム」は「世代・分野・文化を超えた共創教育」の取組の一環として、平成30(2018)年度の春期に試行的に実施し、令和元(2019)年度から本格スタートしています。Society5.0 社会をリードする社会に価値を創出する人材育成を目的に、社会人が本学学生や教員と共に学び合い、先進情報技術を身に付けることができます。3コース14科目を用意し、AI、IoT、データサイエンス、情報セキュリティに関して基礎から応用まで学べます。社会人が受講しやすいよう1科目(100分×7回)を2～4日間に集中して開講しています。

1. 受講状況

夏期は4企業・1教育機関から12人(延べ24人)が受講しました。その内、単一科目は10人、履修証明プログラムは2人でした。春期は4企業・1教育機関から7人(延べ18人)が受講しました。その内、単一科目は5人、履修証明プログラムは2人でした。

令和6(2024)年度 情報技術教育プログラム 受講者数

コース	授業科目名	科目担当教員	夏期 (8~9月)	春期 (2~3月)
AIとビッグデータ	1. AI基礎	谷口進一、工藤知草	2人	—
	2. AIプログラミング入門	黒瀬 浩	1人	1人
	3. AI応用I(深層学習)	井上祐寛[非]	1人	0人
	4. AI応用II(自然言語処理)	金野武司	1人	1人
	5. ビジネスデータサイエンス	武市祥司	3人	1人
	6. データサイエンス応用	坂本真仁	1人	0人
IoTとロボティクス	7. IoT基礎	河並 崇、佐野渉二	6人	2人
	8. IoTプロトタイピング	河並 崇、佐野渉二	1人	2人
	9. IoTプログラミング入門	西川幸延	2人	1人
	10. ドローンプログラミング	鷹合大輔	1人	2人
	11. ロボティクス基礎	土居隆宏、藤木信彰	1人	2人
	12. IoT応用	西川幸延	3人	2人
ICTと情報セキュリティ	13. 情報ネットワーク基礎	向井宏明	1人	2人
	14. ネットワークセキュリティ	向井宏明	0人	2人
小計			24人	18人
合計				42人



オンラインで「AI 基礎」を受講する社会人

社会人は科目等履修生として本学学生の正課授業と一緒に受講するため、成績評価と単位修得もできます。1科目から受講可能ですが、特定6科目(6単位)の単位修得により、本学の履修証明プログラムの証明書が発行されます。



「ロボティクス基礎」の授業で、作成したロボットを動かす受講者

本プログラムを受講した社会人からは本学の学生や教員と共に学ぶことで「様々な学部の学生の考え方に触れ、刺激となった」や「新たな知識を正しく身に付けることができた」等の多くの感想がありました。また、本学学生から「社会

人から実際の業務に関する質問があり、とても参考になった」という感想があり、本プログラムが「世代・分野・文化を超えた共創教育」の実践的な取り組みとして、双方に良い影響を与えています。

「社会人共学者」が前学期・後学期の授業に参加

本学では、リカレント教育の一環として平成28(2016)年から「社会人共学者」制度に取り組んでいます。この制度は、社会で活躍する社会人が授業に参加して、学生たちに実際の社会の状況や話題提供をするなどの授業支援を行い、さらに自らも目的・目標を持ち、世代を超えて学生と共に意欲的に学んでもらう取り組みです。

この制度が発足した経緯は、大澤 敏第6代学長が就任時に「世代・分野・文化を超えた共創教育」を提唱し、その一つである「世代を超えた共創教育」の実践を目指すものです。Society5.0に向けた社会では、新しい価値やイノベーションを創出できる人材が必要とされることから、教育の場において、若者と社会人が世代を超えて交流することで、お互いに刺激し合って新たな交流や学び合いを深めることを目的として始めました。

社会人共学者は、単に社会人が学びを深めるだけでなく「授業を支援する」という立場から、各担当教員が授業内容に合わせて以下のような役割を依頼しています。

1. グループディスカッションへの参加
2. 学生の発表等への講評
3. 科目と社会・企業との関連性の紹介
4. 社会人によるプレゼン・講話、自社の課題の説明
5. その他、社会人の意欲的な学習姿勢による授業の活性化等

前学期は9分野25科目で募集し、社会人共学者として24人が参加しました。後学期は10分野22科目で募集し、社会人共学者として15人が参加しました。前学期・後学期ともに県外からの参加もありました。



「建築情報デザイン」で意見交換する参加者

主な実施内容

- ①「建築情報デザイン」〔前学期/建築学科/3年/下川雄一教授、藤井健史講師〕
BIM(Building Information Modeling)に取り組んでいる企業から技術の紹介と意見交換を行いました。
- ②「ポジティブ心理学特論」(前学期/臨床心理学専攻/1年/塩谷 亨教授)
オンラインで学生とのディスカッションに参加し、活躍されているNPO等での経験知を学生らに伝えてもらえました。
- ③「情報通信システム」(後学期/電気電子工学科/2年/横谷哲也教授)
学ぶ意欲・目的のある社会人が教室の前列にて意欲的な学習姿勢を学生たちに示し、最終週に授業に関する感想を述べて意見交換を行いました。



「健康・医療心理学」でディスカッションをする参加者

- ④「健康・医療心理学」(後学期/心理科学科/2年/伏島あゆみ准教授)
企業内の健康管理に関するディスカッションに参加しました。企業経験を基に意見を述べ、学生発表に対してコメントをいただきました。今回のアンケート結果から「①学生は社会人と共に学ぶことで学習意欲が高まったと感じた」「②学生は将来の進路、これからの学修等について考える機会となった」「③学生、社会人双方に新たな視点や気づきを得ることができた」など、学生と社会人共学者双方に良い影響がありました。社会人共学者の参加によって学生の学習態度や意欲を向上させ、実社会での経験談を聞くことができるなど授業支援の効果が高い取組となっています。

クラスター研究室の成果報告会を開催

「クラスター研究室成果報告会 2024」を2月17日(月)にチャレンジラボで開催しました。平成29(2017)年度から活動を開始し、今回で8回目となります。本報告会は、クラスター研究室が進める社会実装型研究の成果をステークホルダーへ発表し、フィードバックを受けることで新たな価値の創出を目指すものです。今年は学内外から23人が参加し、研究の進捗報告と今後の展望について活発な議論が交わされました。

今回は「Smart Inclusion」から2グループ、「Clean Green」から3グループの発表が行われました。

「Smart Inclusion」は、健常者も障がい者も楽しめるチェアスキーの設計と開発を目指しているテーマです。主にチェアスキーシミュレータのリアリティ向上を目指して、ハード面では滑走時の体感に近づける本体機構の開発が、ソフト面ではよりリアルな視聴覚刺激の再現が研究されています。本学客員教授でありパラリンピアン野島 弘氏から、実際に体験した感想として「チェアスキーの板に乗っているような感覚に近づいた。足の高さを調整できるとより実用的になる」とコメントをいただきました。その他にも試乗時の体感、現場での取り扱い方、VR映像の品質など細かなフィードバックを発表者に伝えている様子から、社会実装に対する期待の高さがうかがえました。

「Clean Green」は、環境に優しい未来の洗濯・洗浄技術を追究し、人口動態、働き方や生活環境の変化を敏感に捉え、新たな社会生活を支えるインフラとしての「洗う・乾かす」技術提案を目指すテーマです。主に業務用洗濯水の効率的な浄化方法に関する研究が進められており、センシングデバイス開発、抗菌剤開発、プラズマ殺菌検証の三つのアプローチが検討されていま



プレゼンテーションのデモンストレーションを見る参加者

【日時】2025年2月17日(月) 13:00~17:00
【場所】Challenge Lab (26号館)
【プログラム】

13:00 Session 1 Smart Inclusion

- 機械工学科 杉本研究室
「VR型チェアスキーシミュレータのリアリティ向上のための設計」
- ロボティクス学科 鈴木研究室
「臨場感あるVR型チェアスキーシミュレータの開発」

13:25 実演とディスカッション

14:00 Session 2 Clean Green

- 電気電子工学科 池永研究室
「業務用乾燥機向け湿度センサ薄膜材料の開発」
- 応用化学科 大澤(敏)・谷田研究室
「天然系抗菌剤を用いた排水浄化技術の開発」
- 電気電機工学科 大澤(直)研究室
「エジェクタ内放電装置の開発とそれによるエネルギー効率の向上」

15:45 Session 3 チャレンジラボ取り組み紹介(教育DX)

- チャレンジラボ学生スタッフ
「Challenge Lab 学生スタッフの取り組みとコンテンツ紹介」

17:00 閉会



野島氏と課題解決について議論する学生

す。センシングデバイスでは、洗濯槽内の環境測定デバイスの安定化や処理方法に関する手法の導入とそれらの実験結果が、抗菌剤開発では洗剤が衣服と排水の両方に作用する洗濯成分の検討評価が、プラズマ殺菌技術では流量調整機構の変更検討や殺菌効果の評価結果が示され、ステークホルダーらは研究の方向性と継続的な実施を確認しました。

続いて、チャレンジラボの学生スタッフから1年間の取り組み紹介が行われました。チャレンジラボは、クラスター研究室の活動拠点として、教育DX推進部署として、ものづくり環境の提供と技術サポートを業務としています。学生スタッフは、身近な問題解決事例としてコンテンツ制作を行っており、1年に一度の本報告会で取り組み実績を紹介しています。今回は、新たに導入されたApple Vision Proの機能や魅力、XR機器を活用した「イマーシブセラピーVR」「オルゴールMR」「認知症MR」「MRプレゼンテーション」などのコンテンツと解決する課題を紹介しました。また、自由に体験できるXR機器の展示スペースも設け、参加者はXR技術に触れながら機器の魅力を体感しました。特に、紹介したMRプレゼンテーションシステムは、MR空間に教材を表示することで教育効果を高

めるコンテンツであり、参加者は「どの教材をどれだけ触っていたか、どこを見ていたかなどのデータが取れば、より効果的な教材開発に活かせる」と関心を示しました。

本報告会を通じて、クラスター研究室の研究成果が着実に進展していることが実感できました。特に、ステークホルダーとの意見交換を通じて、研究の実用化に向けた課題がより明確になった点が大きな成果です。今後も継続的に研究成果を共有し、社会実装へ向けた議論を深めていくことが期待されます。

クラスター研究室とは

クラスター研究室は、学生が学科や研究室を越えて集まり、卒業研究や修士研究の一環として社会性のある問題解決に取り組む、分野を超えた共創教育を実践する金沢工業大学の新しい形の研究室です。産業界から持ち込まれる様々な課題に対して、分野横断的な知見から物事の本質を探究し、新しい価値の創造に挑戦しています。

全国パーキンソン病友の会石川県支部と本学クラスター研究室の共創により福祉用具「みんなで楽しくフィットネス！」を開発

全国パーキンソン病友の会石川県支部と金沢工業大学クラスター研究室の共創により福祉用具「みんなで楽しくフィットネス！」を開発しました。

本用具は、インクルーシブデザインの考えを意識しながら、ユーザとエンジニアが概念設計から完成品まで、共に作りあげてきたことで、このシステムを必要とする人たちにとって使いやすいものになっていることが評価され、第26回石川県バリアフリー社会推進賞 福祉用具部門（企業部門）で最優秀賞を受賞しました。

椅子に座った状態でも、立った状態でも、自宅で気軽に楽しく続けられるフィットネスゲームが欲しいという要望があり、パーキンソン病友の会石川県支部とクラスター研究室が協力し、パーキンソン病の疾患を抱える皆さんの声を聞きながら開発を進めました。



ゲームをプレイする様子

開発されたアプリゲームは、VRヘッドセットを装着し、パソコンの画面上に表示される指示にしたがって、内容や難易度を設定し上肢の運動が行えるものです。

パーキンソン病の症状がある人たちは転倒のリスクがあるため、外出を控える方がいます。そのような人たちに対して、自宅でも気軽に運動ができるよう、クラスター研究室では本ゲームシステムを貸与できるような仕組みを作る予定です。

学部プロジェクトデザイン教育の推進

プロジェクトデザインII 市役所テーマ提案報告会(野々市市・金沢市)

本学学生が2年次に履修する必修科目のプロジェクトデザインIIでは、実社会で他者が抱える問題に対して、チーム活動を通して、その解決アイデアを提案しました。例年、野々市市役所と金沢市役所から具体的な実社会の問題を市役所テーマとして提供いただいていた、令和6(2024)年度は野々市市役所から3テーマ、金沢市役所から5テーマを示していただきました。5学科(機械工学科、情報工学科、メディア情報学科、経営情報学科、建築学科)と英語クラスの学生が、市役所テーマの問題解決に取り組みました。



担当者と意見交換をする学生=野々市市役所

例年、市役所テーマの実施に当たり、学生と市役所の担当者が交流するイベントを開催しています。4月に市役所テーマの詳細について学生が質問する質疑会を、6月に学生がチーム活動の進捗を報告する相談会を開催しました。8月1日(木)に、ののいちカミーノ(10:00~11:00)と金沢市役所(13:30~14:30)で開催された市役所テーマに対する解決アイデアの提案報告会(以下:報告会)の様子を紹介します。

プロジェクトデザインIIの授業では、現状調査やニーズ調査、既存策の調査を経て本質的な問題点を発見し、さらに「ブレインストーミング」や「なぜなぜ分析」により解決アイデアを創出します。学生たちは提案したアイデアを最終的にポスターとしてまとめて、野々市市と金沢市へ提出しました。市役所テーマに取り組んだ全152チームの中から、野々市市テーマについて9チーム、金沢市テーマについて15チームが報告会に選出されました(表1)。

解決アイデアを説明する10分間の発表では、印刷した資料に加えてプレゼンテーション用の



担当者にアイデアを報告する学生=金沢市役所

(表1)2024年度の市役所テーマと選出チーム一覧

市役所	市役所テーマ	報告テーマ	学科	
野々市市	令和7年度国勢調査にむけて(企画財政課)	金沢工業大学の学生の国勢調査回答率向上に向けて	メディア情報学科	
		若者視点から国勢調査に回答しやすくするための提案	メディア情報学科	
	災害時にも安全な道路空間(土木課)	令和7年度国勢調査に向けて	英語クラス	
		道路センサでつなく(災害情報網)	メディア情報学科	
金沢市	歳だけドスマホを身近に(生涯学習課・野々市市公民館連合会)	災害時の安全な避難ルート	機械工学科	
		道路冠水時の交通の改善	機械工学科	
	高齢者に必要とされるシステムづくり	情報工学科		
	講習会の参加意欲を向上させるためには	メディア情報学科		
	知識が今まで以上に身につくスマホ教室に	メディア情報学科		
金沢市	食品ロスを削減するために(ゼロカーボンシティ推進課)	食べ残しの防止をするためには	情報工学科	
		食品廃棄を未然に防ぐには	情報工学科	
	空き家について考えてみませんか(建築指導課 空き家活用室)	若い世代の食品ロスを減らすためには	メディア情報学科	
		建築学生を介したリノベーション活動の提案	建築学科	
	観光によるまちづくり(観光政策課)	空き家で地域を活性化せよう!	建築学科	
		空き家活用プロジェクト:新たな観光スポットへ	メディア情報学科	
		SNSなどを利用して新しい観光地を見つけ呼び込む	情報工学科	
	野々市市	みんなで考え、みんなで取り組む、まちづくり(都市計画課)	SNSを利用したPR	メディア情報学科
			ノベルティを活用した観光客の分散	メディア情報学科
		地域コミュニティの再編	建築学科	
高齢化が進む町の新しい提案 そここにいる全員がいつのまにか参加しているまちづくり		建築学科		
アプリでまちづくり-認知度の向上を通して-		建築学科		
ホームタウンチームを応援しよう(スポーツ振興課)	ホームタウンチームの人気向上に向けて	建築学科		
	ツエーグン金沢でスポーツ振興をしよう!~ツエーグン金沢を対象とした新しい集客の提案~	建築学科		
	ホームタウンチームを応援しよう	メディア情報学科		

動画を準備したチーム(メディア情報学科)もあり、独自の工夫が見られました。

英語クラスのチームは、野々市市の国勢調査回答率向上に向けて、住民と調査員の年齢差に焦点を当てた対策を提案しました。機械工学科のチームは、使い勝手のよいシャベルの普及により側溝の整備不足を改善して、野々市市の冠水対策に貢献する提案をしました。野々市市役所の担当者からは、前者について「調査員の年齢が回答率に影響を与える可能性については検討されてこなかったため、素晴らしい視点だ」との言葉をいただき、後者については「シンプルだが使ってみたいと思える良いアイデアだ」と評価をいただきました。

情報工学科のチームは、金沢市の食品ロスの削減を目指して、さまざまな情報を一つのWebサイトに集約する食品ロス対策掲示板を提案しました。建築学科のチームは、金沢市繁華街への魅力的なごみ箱を備えた待ち合わせ場所の設置を通して、住民のまちづくりへの参加を促す仕組みを提案しました。金沢市の担当者には、前者の提案について「現在の金沢市にはこのようにまとまっ

た Web サイトがないため参考にしたい」と評価いただき、後者の提案については「若い世代の取り組みを図る発想だ」と興味を持っていただきました。

発表のあとの質疑応答では、解決アイデアの実現性や実効性についてなど率直な意見交換が行われました。市役所の方々から直接フィードバックをいただき、学生は実社会の問題と向き合うときに必要となる視点を学ぶ良い機会を得ました。学生が取り組むテーマを選択した理由についての質問もあり、若い世代の考え方や着眼点が関心を惹きました。

全体的に和やかな雰囲気の中で報告会は進み、市役所の担当者の方々から各学科の特色を活かした提案アイデアを評価する声や期待の言葉を多くいただきました。学生たちの提案アイデアや報告会での議論が、今後、野々市市と金沢市の市政に少しでも役立つことを期待します。報告会終了後の学生たちは達成感を感じさせる笑みを浮かべていました。大学キャンパスの外で実社会の方々とは交流する機会を持った経験は、これからの大学生活にポジティブな影響を与えるに違いありません。

新入生が参加する「人間と自然」を白山麓キャンパスで実施

「人間と自然」は、昭和 43(1968)年から穴水湾自然学苑で開始し、本学園の教育の根幹である「高邁な人間形成」に資する教育を脈々と紡いできました。「人間と自然」創設当時は、革命思想の影響を受けた学生による大学紛争の嵐が吹き荒れていた時代でした。このような情勢下で①日本人として自覚を深める教育②勤労奉仕③教員と学生が胸襟を開いて理解し合う団体生活と共同活動を行う教育の必要性から「学生自らが人間形成の重要性に気づき、これを修養するためのプログラムを整え、組織的に取り組める道場」を目指し、穴水湾自然学苑での「人間と自然」が開始されました。

その後 50 年以上、穴水湾自然学苑で 2 泊 3 日の研修として実施してきましたが、穴水湾自然学苑を閉苑したため、令和 5(2023)年度から、場所を白山麓キャンパスに移し、1 年次に 1 泊 2 日で実施しています。

令和 6(2024)年度の「人間と自然」は 4 月 16 日(火)から情報工学科を皮切りに、全 25 回実施しました。各回とも、修学アドバイザーの教員と白山麓セミナー教育支援委員(以下:支援委員)の計 3 人が同行し、白山麓キャンパス運営室のスタッフと協力して実施しました。

白山麓キャンパス到着後、オープニングセッションを行い、修学アドバイザーのあいさつに続き、クラス代表の学生から「人間と自然」に臨む意気込みが述べられました。オリエンテーションでは、白山麓キャンパス運営室から 1 泊 2 日で生活する上での諸注意を伝えました。

「人間と自然」の概要と目的のセクションでは、修学アドバイザー進行のもと、動画を視聴しました。動画内では、佐藤 進学生部長から、①普段の学生生活と異なる環境のもと、自然や人、地域を理解し科学技術との関わり合いについて深く考えること②様々な体験、班活動を通して自己の考えに気づくと共に、多様な考え方、感じ方があるということを理解してほしい旨が説明されました。続いて、平泉隆房教授が白山にまつわる歴史と文化について紹介しました。

オリエンテーションの後、学生は 6 人程度の班に分かれ、「KIT 白山麓ロゲイニング」を行いました。白山麓に点在する史跡等のチェックポイントを徒歩で巡り、設定された点数を加算するルール

で実施しました。チェックポイントへ立ち寄った証として、学生が建造物等をスマートフォンで撮影し、白山麓キャンパスに戻ってきた際に支援委員が確認しました。ロゲイニングの目的は、白山麓の地域文化を知ること、励まし合って完歩することでクラスメイト同士の絆を深めることです。いかに多くのポイントを巡って高得点を狙うか、地図を確認しながら話し合っってルートを検討し、臨みました。学生は普段経験できない白山麓地域を堪能しました。

ロゲイニング終了後、班毎に2日目に発表するプレゼンテーション資料を作成しました。班毎で、ロゲイニング中に、地域の自然、人、動植物、史跡・歴史、建造物、環境・地形などについて観察した内容や散策地域の魅力についての紹介・PR、地域活性化のためのアイデア等、午後10時30分まで話し合い、プレゼンテーションの資料を作成しました。

また、隣接する天然温泉「比咩の湯」の利用については、前年度同様に、午後8時から午後10時までの2時間を「人間と自然」での貸し切りにしていただきました。学生はゆっくりと温泉に浸かり、初日の疲れを癒しました。

研修2日目は、朝の集いを実施し、学生の司会のもと、国歌、校歌斉唱、ラジオ体操を行いました。担当の班が1日目の感想や反省について所感を述べました。学生室の清掃、朝食、学生室の点検の終了後に前日作成したプレゼンテーション発表を行いました。プレゼンテーションでは、白山麓地域の課題解決につながるアイデア等を含んだ内容が発表されました。

プレゼンテーション終了後は、動画の中で、研究支援推進部連携推進課 松井康浩課長が地方創生研究所での社会実装型研究について紹介し、今後の自分のキャリアを積み重ねていく上でこの経験を大切にしてほしい。と学生にメッセージを



AEDの使い方を真剣に聞く学生

贈りました。

昼食後、令和6年度からの新たな取組となる「救命救急講習」を行いました。大地震などの災害が起きた際、救命救急の必要性が高まることから、「人間と自然」に取り入れ、学生と教職員が講習を受けることになりました。

参加した学生並びに教職員に対して白山野々市広域消防本部から、普通救命講習I修了証が付与されます。救命救急講習は、安全衛生委員会室山口博文氏の指導のもと、座学と実技の講習(3時間)が行われました。座学では、山口氏が救命救急の基本となる知識について動画を交えながら説明しました。また、実技では、参加した学生と教職員全員が心肺蘇生やAEDの使い方について学びました。全体で学生1,413人(過年度生含む)、教職員76人、合計1,489人が救命救急講習を受講し、講習終了後に修了証を付与しました。

講習終了後、クロージングセッションが行われ、修学アドバイザーから1日目のロゲイニングで最も得点が高かった班と2日目のプレゼンテーション最優秀発表班へ表彰状と景品が授与された後、修学アドバイザーと学生代表があいさつしました。その後、扇が丘キャンパスに帰着し、「人



最優秀発表班に選ばれ表彰される学生

間と自然」全日程が終了しました。

「人間と自然」の参加学生のアンケート結果によると、約9割の学生から「大変有意義だった」又は「有意義だった」との回答がありました。

1日目に行われたロゲイニングは天候に恵まれ、全てのクラスにおいて大きなケガや緊急対応もなく無事に実施することができました。

新入生の女子学生を対象とした 特別講演会を開催

アドミッション・キャリア教育センターでは、本学に入学した女子学生を対象に、女子学生同士の交流を深めながらこれから待ち受ける様々なライフイベントと向き合い、自分が将来どうなりたかについて考え将来を描くためのイベントを新たに企画し、89人の学生が参加しました。

女子学生のためのキャンパスライフサポート「キャリアデザイン編」第1回を4月5日(金)5時限に開催し、環境土木工学科の片桐由希子准教授が講演しました。

はじめに青木 隆副学長が、本学からも参加実績のある「トヨタ女性技術者育成プログラム」の「リケジョの未来キャンプ」での女子学生と女性技術者との交流会の様子を紹介し、「女性だから男性だから」「理系だから、文系だから」などという判断理由を越えて、自分の力を発揮し社会に貢献しうるために将来を考え、それぞれのポテンシャルを大きく育てほしいと激励し、特別講演会をスタートしました。

「未来を創造するための学び方～異分野融合と多様性のマネジメントに向けて～」と題した片桐准教授の講演では、専門のランドスケープ計画や都市・地域計画等、地域環境デザインによる課題解決を中心とした活動に至った経緯を、学生時代の研究活動やアルバイト等を振り返りながら紹介いただきました。多岐にわたる研究活動や様々な取り組みで得られた経験から、分野にとらわれずに横断的に広い視野で課題をとらえていく重要性と異分野とのコラボレーションの面白さ、そしてそれらを実現するための専門知識や基礎力の重要性について語りました。

また、大学生活の重要なポイントとして、問題意識を持つこと「なぜ」を追求する心構えと、友

人や仲間とは単に意見を並べるだけではなく活発に議論し意見の足し算や掛け算によって、さらに考えを深めていってほしい。分野融合できるようにするには、自身の専門性を高めることと、経験値を上げることが大切であり、興味を持ったことには臆せず飛び込んでいき、楽しく充実した学生生活を送ってほしいとのメッセージが送られました。

参加学生からはこれからの未来にワクワクした様子がうかがえる感想が多く寄せられました。

令和6(2024)年度の新入生で女子学生の割合は、14.8%となっています。男子学生が多いキャンパスで、雰囲気圧倒された女子学生もいましたが、それぞれが性別や学びの分野にとらわれることなく自分らしく伸び伸びと活動し、働く女性としてのキャリアデザインを考え、輝く未来に向かって邁進してもらいたいです。



講演会終了後片桐准教授と希望に満ちた笑顔で記念撮影に納まる学生たち

新入生歓迎会を5年ぶりに開催

令和6(2024)年度にKIT指定学生アパート・寮に入居した新入生約530人及び大家さん約80人が参加し、4月13日(土)午後2時30分から21号館1階ラテラで「新入生歓迎会」が開催されました。歓迎会は2部構成で進められ1部は入居先の大家さんと新入生との交流、2部は出身県別に分かれて新入生同士で交流しました。



参加者で賑わう会場

本企画は、入学して間もない新入生に少しでも早く友人を作ってもらい、有意義な学生生活を送ってもらいたいという思いから、平成25(2013)年から行っています。



新入生歓迎会で交流する新入生

コロナ禍で実施できない時期はバーチャル空間で開催したこともありましたが、対面での歓迎会としては5年ぶり8回目となりました。

また、この歓迎会に先駆け、4月10日(水)に、新入生女子会を実施し、43人が参加しました。自己紹介から始まり同じ学問分野の先輩学生から授業や生活全般について多岐にわたるアドバイスを受けていました。

短い時間でしたが、新入生にとって楽しい時間となったようでした。



女子会で交流する新入生

新入生リーダーシップアワード生証授与式

令和6(2024)年度新入生のリーダーシップアワード生証授与式を4月1日(月)に執り行いました。授与式には一部の父母等関係者も出席しました。

本学では、入学にあたって高い目的意識と勉学意欲があり、学業成績が優秀な者に特別奨学生として「リーダーシップアワード生」の称号を付与しています。特別奨学生には、スカラーシップフェローとスカラーシップメンバーの2種類があり、それぞれに応じた奨学金を給付します。

令和6年度の1年次 特別奨学生は130人でした。特別奨学生には、今後、授業等の正課の活動とKITオナーズプログラムなどの課外活動に積極的に取り組み、本学の教育目標である「自ら考え行動する技術者」の素養を備えたリーダーへと育つことが期待されます。

授与式では、大澤学長が特別奨学生にエールを送った後、各学部の代表学生に壇上でリーダーシップアワード生証を授与しました。そして、副学長、学生部長、各学部長が出席者一人ひとりにアワード生証を手渡しました。

修学支援対策としての特別三者面談を実施

修学に関して問題を抱える学生に対し、父母等との特別三者面談を5月11日(土)に実施しました。今回の特別面談の趣旨は、修学に関して問題を抱える学生に対し、父母等と連携しながら卒業へ導くため、これまでの修学状況や卒業までの見通し、さらに今学期の様子などについて、父母等と情報共有する機会を設けることです。各学科や1年次修学アドバイザーが選出した対象学生の父母等に対し、案内を郵送し、54組の学生と父母等が参加しました。

はじめに佐藤 進学生部長から、特別面談の趣旨の説明と、履修条件や卒業まで見通しなどの全体説明を行いました。その後、順番に個別ブースで個別面談を行いました。各学科・課程に協力を依頼し、主に特別面談の対象となる学生の修学アドバイザーが面談を担当しました。1組あたり約30分の面談時間を設定し、学生一人ひとりに寄り添った丁寧な面談を行いました。

なお、当日の特別面談に参加できなかった父母等のうち、17組は別日に面談を実施し、9組はオンラインによる個別面談を実施し、合計80組の面談を実施しました。



学生と父母に全体説明を行う佐藤学生部長

前年度より実施時期を早め、少しでも問題をクリアにした状態で前学期に臨めるようにしました。今回の特別面談を実施し、修学に関して問題を抱える学生の現状を父母等に理解いただく貴重な機会になりました。学生の支援は、父母等と連携が不可欠と考えており、今後も父母等と情報を共有しながら、学生の支援を行っていきます。



VIVE focus3でVRコンテンツを体験する参加者

チャレンジラボで「XR体験イベント」を開催

XR体験イベントを4月24日(水)、25日(木)の両日、チャレンジラボ1階ラウンジで開催し、本学学生と教職員に対してXR機器を中心としたデジタル機器や、学生スタッフが制作したデジタルコンテンツを披露しました。新入生の学ぶ意欲を向上させるために、テクノロジーに触れ、デジタル技術を活用したものづくりに興味や関心を持ってほしいとの思いで、学生スタッフと共に企画しました。

同イベントでは、自由に体験できるXR機器を展示し、学生スタッフが参加者一人ひとりに使い方やノウハウなどを説明しました。参加者の中には、XRコンテンツの制作経験者もあり、学生スタッフと制作の話題で盛り上がる様子が見受けられました。



学生スタッフが制作したアプリをハンドトラッキングで操作する参加者

【イベント概要】

イベント名：XR体験イベント

日時：4/24(水) 10:00～18:30

4/25(木) 9:00～18:30

展示機器：VIVE focus 3 / Magic Leap 1 / HoloLens 2 / THETA Z1 / MatterPort Pro 2 / HANDYSCAN 307

2日間で67人(内、学生55人、教職員12人)が来場し、参加者の皆さんにデジタル機器やデジタルコンテンツの魅力を紹介できました。一方、XR機器の存在や機器貸出が可能であることを知らなかった学生もいたことから、今後全学生に向けて学生ポータルやホームページなどを通して情報を発信していきます。学生の潜在的な能力を引き出し、学修意欲を向上させることを目的に、広報活動や体験会を継続的に実施します。

このようにチャレンジラボは、Edu-Techや教育DX推進の一環として、イベントや講習会等を企画運営し、学生や教職員へのXR機器の利用を促進しています。学生が新しいテクノロジーに触れ、クリエイティブな活動、新たなデザインや価値の創出にチャレンジしてくれることを期待します。

KIT オナーズプログラム及び課外活動の充実と実施

本学では、「自ら考え行動する技術者」に向けて自ら目標を達成し、それを達成するために活動する自己目標達成プログラムとして「KIT オナーズプログラム」を定め、「学科プロジェクト」、「夢考房プロジェクト」、「部活動（学友会）」などの課外活動の充実に努めています。

学科プロジェクト

全学科対象プロジェクト

Science Project for Children
 マルチメディア考房プロジェクト
 数理考房・数検にチャレンジ！プロジェクト
 数理考房・理工学基礎プロジェクト
 物理プロジェクト
 教育DX プロジェクト
 SDGs Global Youth Innovators
 みどりいろプロジェクト
 Toiro プロジェクト (Total instruction program re-organizing multiple subjects)
 こどもの成長を見守る「おもちゃ」開発プロジェクト
 農業支援ロボット開発プロジェクト
 フードクリエイション（ハチバンプロジェクト）
 WAVE プロジェクト
 Bus Stop プロジェクト ～市民サポートは僕にまかせて～
 地域連携による企画力養成プログラム
 学内のグローバル化検討プロジェクト
 The Eagle on the Hilltop
 Future Generation Project
 KIT Community Garden
 教師としての実践力向上プログラム

学科別プロジェクト

医工連携に基づいた人間にやさしい医療機械の創製
 ロボットエンジニア育成プロジェクト(夢考房 Junior)
 電気現象探究会
 プログラミング道場
 情報セキュリティ・スキルアッププロジェクト
 IoT プロジェクト
 防災・減災プロジェクト (SoRA)
 感性トレーニングプロジェクト
 CirKit プロジェクト
 地方創生・商店街活性化・DK art café プロジェクト
 金沢マラソン“おもてなし”プロジェクト
 起業部
 マーケティング調査による商店活性化プロジェクト
 サイコロプロジェクト
 心理科学技術部
 Cube (キューブ)
 景観研究会 ～風景からの地域活性化～
 Meq (Magnitude earthquake) プロジェクト
 金澤月見光路
 香りプロジェクト
 ねばーるプロジェクトバイオ産業への納豆菌の応用
 Chem Tube
 未来の高峰譲吉博士は君だ！発酵産業活性化プロジェクト
 ツエーゲン金沢 J1 昇格プロジェクト
 Smart Inclusion プロジェクト

夢考房プロジェクト

データサイエンス／エコラン／人力飛行機／ロボット
 義手研究開発／建築デザイン／メカニカルサポート
 フォーミュラカー／小型無人飛行機
 組込みソフトウェア／人工衛星開発／RoboCup@Home

部活動（学友会）

専門委員会

学友会役員会／工大祭実行委員会
 交通安全対策専門委員会／広報委員会
 アルバム編集委員会／学生健康委員会
 学生地域活動推進委員会

体育部会

アイスホッケー部／空手道部／弓道部
 競技スキー部／剣道部／硬式庭球部／硬式野球部
 ゴルフ部／サッカー部／山岳部／自動車部／柔道部
 少林寺拳法部／水泳部／正伝長尾流流剣術部
 ソフトテニス部／卓球部／男子バスケットボール部
 女子バスケットボール部／バトミントン部
 バレーボール部／ハンドボール部／ラグビー部
 陸上競技部

文化部会

アマチュア無線部／囲碁・将棋部
 ギターアンサンブル部／軽音楽部／室内管弦楽団
 写真部／吹奏楽部／電子計算機研究会／天文部
 放送研究会／漫画研究会

令和6年度 オナーズプログラム 導入講座を開催

令和6(2024)年度オナーズプログラム導入講座を5月31日(金)に開催し、新入生のリーダーシップアワード生130人の内122人が参加しました。

本講座は、新入生のリーダーシップアワード生を対象とし、自分の価値観、大学生活での目標や抱負を意識することで自らのキャリアデザイン力の基盤構築を目的としており、アドミッション・キャリア教育センター所長の青木 隆副学長が「学生生活を充実したものにするために」として講話をしました。

希望実現のための五つのキーワード「視野を広く」「Passion(情熱)」「人を知る」

「Diligence(勤勉さ)」「自分を褒める」をもとに、リーダーシップアワード生に身に付けてほしいことや考えてほしいことを述べました。

「二面的思考から多面的思考への転換の重要性について」、「全体を俯瞰する視点を持つことが、自らの希望が正しく実現に向かっていることを確認する指針となること」、「挑戦の際に必要なことは、目標の設定、その道筋について、更には目標達成までのエネルギーを維持することが大切であること」、「4年後の『理想の自分の状態』を想像してほしい。』『自分を正しく褒める方法』などを伝え、エールを贈りました。

最後に、大学生のうちに理解してほしいこととして「社会は、生い立ちや環境から身に付いた各々の人がそれぞれ持つ偏った価値観や性格で動かされている。これがわからない人がリーダーになるとその組織は創造的にはならない。まずは自分を磨くことで仲間の輪が増え、後輩が皆さんのために汗をかいてくれるということが自然と生まれてくる。広い視野を持ち『人はそれぞれ背景があること』『本当の意味での正しさ』を理解したうえで、理工学の分野を極めていってほしい」と講話を締めくくりました。



講話を行う青木副学長

学友会 防犯・交通安全推進活動を実施

野々市市文化会館フォルテで「令和6年度のいち防犯・交通安全活動開始式」が4月5日(金)午後6時から開催され、学友会から15人が参加しました。

各防犯・交通安全推進団体の連絡強化と会員の防犯・交通安全意識を高めることを目的とし、野々市市が主催しました。



活動宣言をする北山委員長

最初に栗 貴章野々市市長からあいさつがありました。次に参加者を代表して学友会交通安全対策専門委員会の北山総一委員長が「犯罪や交通事故を未然に防ぎ、安全で安心な街づくりを推進するため、パトロールや該当指導の活動を実施していく」と活動宣言をしました。

【りんりんマナーUPキャンペーン】

野々市市は「自転車マナー日本一」を目指し、平成14(2002)年から「自転車りんりんマナーUPキャンペーン」を行っており、学友会は野々市市交通安全協会と協力をして活動をしています。出発式が4月15日(月)午前7時30分に本学で行われました。出発式には野々市市、白山警察署、野々市市交通安全協会、学友会交



りんりんマナーUPキャンペーンの様子

通安全対策専門委員会から関係者 30 人が出席しました。

石川県白山警察署交通第一課 企画係長 酒井 満警部補から「自転車マナー日本一」を合言葉に今年度も自転車事故防止活動にご協力をお願いいたします。」との激励の言葉を述べられました。

出発後は、本学前交差点及び高橋町交差点で本学学生、近隣の高校生、中学生の登校にあわせ立て看板やのぼり旗を活用しながら、ヘルメット着用を含む自転車のマナー向上を呼びかけ、自転車道走行時のルールについて指導しました。街頭指導は 8 時 30 分頃まで行われました。

【イーグル・セーフティー・プロジェクト・チーム】

学友会を中心とする「金沢工業大学イーグル・セーフティー・プロジェクト・チーム（通称イーグル隊）」による令和 6 年度防犯パトロール出発式を 4 月 26 日（金）午後 7 時から行い、学友会の学生を中心に約 80 人が参加しました。

はじめに野々市市防犯協会の千田 努氏が日頃の活動に労いの言葉を述べ、あいさつされました。そのあと来賓として迎えた白山警察署 竹本邦夫署長から、野々市地区では自転車盗難件数が増加傾向である状況が伝えられました。日頃の防犯パトロールの活動に対し感謝の言葉がありました。続いて新井真二大学事務局次長があいさつをしました。イーグル隊を代表し第 57 期学友会 学生地域活動推進委員会の中野祐三委員長が「地域の安全と安心のまちづくりに努め、学生の防犯意識の啓蒙活動に取り組んでいきます」と宣言し、午後 7 時 30 分過ぎに出発しました。

その後、2 班に分かれ野々市市防犯協会の会員と共に大学周辺の既定コースを約 30 分間パトロールし、流れ解散となりました。



大学周辺をパトロールするイーグル隊

学生企画、映像コンテスト「Hello KIT」

学生ステーションは、学生がイベント企画をカタチにするためのサポートをしています。企画書の作成、大学への行事申請、告知など、準備はもちろんイベント当日まで、職員と学生スタッフが支援します。

令和 6（2024）年度に映像コンテスト「Hello KIT」を実施しました。本学の魅力を、高校生に向けて紹介する動画を学内で募集しました。令和 5（2023）年度にNHK大学放送コンテストの映像CM部門で 2 位になった学生スタッフが映像制作やコンテストに挑むことで得られるものを多くの学生と共有したいという想いから立案しました。

学生による学生のための映像コンテストという初めてのイベントは、メディア情報学科の出原立子教授をはじめ、拯友会、AV室、企画広報室など、多くの方々の協力を得て動き始めました。7 月 16 日（火）に事前説明会を開催し、7 月 22 日（月）からエントリーを開始。7 月 23 日（火）には、動画づくり初心者のためのサポートプログラムも実施しました。企画者は、やりたいことを実現できた嬉しさで、いきいきと活動しています。その姿は、コンテストの参加者たちを刺激したことでしょう。



事前説明会に参加する学生

キャリア教育の推進

「KIT コーオプ教育プログラム」 21 社に 30 人の学生が参加

「KIT コーオプ教育プログラム」は、学生が企業の実際の業務に従事しながら、企業が持つ最先端の技術について実践的に学び、社会や顧客への貢献と課題解決を習得できる、本学独自の産学協同型正課プログラムです。一般的なインターンシップが、企業により策定された“職場体験”に短期間で参加するのに対し、コーオプ教育では給与をいただきながら、長期間実際の業務に従事します。学びの場を学外に移し、実社会の答えのない課題や問題解決に取り組むことで、理論と実践の双方を効率的に学べる「答えのない教育プログラム」となっています。令和元(2019)年に導入、令和2(2020)年にスタートし、今年で5年目を迎え、令和6(2024)年度はこれまでの最多となる、21社に30人の学生が参加しました。



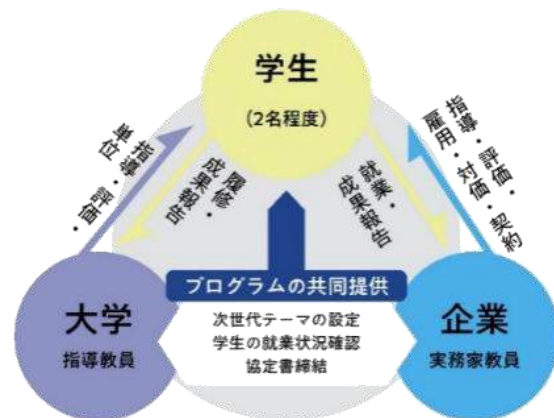
参加企業で実際の業務に取り組む学生

プログラムに参加する学生には、事前学習として「寄附講座への参加」または「プロジェクトテーマ(事前課題)の実施」を参加条件とし、それぞれ「寄附講座型」「プロジェクトテーマ型」としています。寄附講座型では、大学と企業で事前に講義内容を協議した各企業の担当者による全7~8回(計700~800分)の特別講義を開講し、実施テーマに沿った最新技術に関する知識の習得・確認をします。この寄附講座は「生涯学習特別講義」として単位認定しており、次年度以降のコーオプ教育に参加を希望する学生も受講ができ、社会における最先端の技術を学べる場として、また企業自体への理解を深める場として広く参加を呼び

掛けています。一方、プロジェクトテーマ(事前課題)型では、事前説明会への参加やレポートの作成、面接・面談などにより、実施テーマに関する知識の習得・確認をしています。その他にも、プログラムに関連したインターンシップへの参加なども事前課題とすることができます。受け入れ企業には、これらの事前学習を踏まえて参加学生を選抜していただいています。プログラム開始前の事前学習が主な目的ですが、参加意欲の向上や就業意識の改善といった、プログラム全体の教育的効果の向上にも繋がっています。

プロジェクトテーマ型の中でも、企業紹介や就業テーマについて学生ポータルや事前説明会などで周知し広く参加学生を募る「公募型」の割合が増加してきています。就業テーマに関連した共同研究などをベースにした「研究型」とは異なり、学科や専門分野を横断して参加できることや事前の面談や説明会を通して受け入れ企業の業務内容について知ることができることがメリットとなっています。より多くの学生が参加できるよう、企業には学生の休み期間中の就業をお願いし、シフト勤務や在宅勤務なども対応いただいています。

また、プログラム終了後には、多くの企業が「成果報告会」を実施しています。参加学生は、主な業務内容とその成果、またプログラムを通して学んだことや自分自身の成長などを中心に発表し、企業からも実務家教員を中心に実施しての感想や社内的効果、参加学生の成長などを発表いただきました。学生が得た成果を発表するための場ですが、企業にとっても大学にとっても大きな収穫を得られる場になっています。



コーオプ教育の仕組み

「インターンシップガイダンス（兼・就職活動準備ガイダンス）」を開催

インターンシップガイダンス(兼・就職活動準備ガイダンス)を4月15日(月)、16日(火)の2日間で学部1～3年次、修士1年次を対象に、6号館多目的ホールで開催しました。令和6(2024)年度は2日間で計840人の学生が参加し、前年の637人から大幅に増える結果となりました。

冒頭に、徳永光晴進路部長から「昨今の就職活動は年々早期化しており、夏のインターンシップが就職活動のスタートとなっているといっても過言ではなく、ぜひ今回参加した全員がインターンシップに参加してほしいと思います。その上で重要になるのは、どの会社のインターンシップに参加するかであり、業界研究が必要になってくるだろうし、並行して自分を売り込むための自己分析も必要になります。インターンシップへの参加が内定獲得につながるケースもあるので、このガイダンスをきっかけにぜひインターンシップに参加してほしい」と学生に向けてメッセージを贈りました。

まずは、株式会社リクルートから「最新の就職活動状況とインターンシップ」をテーマに講演をいただきました。講演では、「最新の求人倍率は1.71倍であり、学生1人あたり1社以上の求人がある」と現状を伝えつつ「油断せずに就職活動の準備はしっかり行う必要があり、そのためにもインターンシップに参加することが重要になる。知らない企業を目指すことはできないので、この時期はぜひ選択肢を広げるよう業界研究や色々なイベントに参加しましょう」と学生に向けて説明しました。

続いて、株式会社マイナビから「インターンシップの参加の流れと選考について」をテーマに講演をいただきました。講演では、インターンシップの探し方や選び方、さらにインターンシップでの選考について、具体的にナビサイトを利用しながら学生に説明し「納得いく就職活動のために、4月の今だからこそ、いつ何をすべきか知ること、他大学の学生と差をつけましょう」と学生に伝えました。

例年実施している本ガイダンスですが、今回新たな試みとして、現役学生によるパネルディスカッション「インターンシップ体験談」を実施しました。過去にインターンシップへの参加経験のある学部4年次、修士2年次がパネラーとして登壇

しました。パネルディスカッションでは、登壇者に事前にアンケートを取り、当日会場のスクリーンに設問ごとの回答結果を表示し進行しました。主な設問としては「インターンシップへの参加目的と動機」「企業選びの決め手」「参加して良かった点」等、実際に経験したインターンシップの体験談を参加学生に向けて伝えました。

最後に、進路開発センター二飯田一貴次長が「本学の就職活動状況と夏休みの有意義な過ごし方」をテーマに講演を行いました。講演では「リモートワークの急速な普及により、働き方にも変化が生じ、対面とオンラインを効果的に両立する時代となった。就職活動で学ぶことは、必ず社会で役に立つ」と伝えました。また「昨年度の学部内定率推移」を説明し、インターンシップに参加した学生が早くに内定を得ていること等、学生にとって有益な情報を提供しました。最後に学生に向けて、「夏休みが終わる前までにすべきこと」として、以下の内容を伝えました。

＜夏休みが終わる前までにすべきこと＞

1. インターンシップに参加する

- ・興味のある業界・企業を知る。
- ・参加目的を明確にする。
- ・選考有のインターンシップにも挑戦する。
- ・しっかりとエントリーシートを書く。
- ・大学院進学の可能性を考える。

2. 学内イベントに参加する

- ・現在、参加している活動を、しっかりと続ける。
- ・情報をチェックし、興味のある活動に参加する。

3. 得た経験を PR できるように整理する

- ・夏休み中に得た経験や、過去の経験を整理する。



今後のインターンシップ参加に向けて説明を聞く学生

「KIT 業界研究セミナー」「KIT インターンシップフェス 2024」を開催

「KIT インターンシップ業界研究 WEEK」と題し、インターンシップ参加に向けた2週間のイベントを開催しました。イベントの皮切りとして、業界を代表する企業が登壇し、企業同士のパネルディスカッションや、学生からの質問に答える「KIT 業界研究セミナー」を5月9日(木)から5月17日(金)に、12号館イノベーションホールで開催しました。各日3社、計21社(内9社がオンライン)の企業をお呼びし、7日間で延べ433人の学生が参加しました。本セミナーでは、業界動向や業界マップ・業界の魅力などを講演いただいた後、座談会を開催しました。学生が質問しやすい環境を作るため、オンライン質問ツールを用い、学生が知りたい情報を企業に直接答えていただくことができました。



企業の方の話を真剣に聞く学生[業界研究セミナー]

2週間の締めくくりとして、夏期休暇期間中にインターンシップを実施する企業から、直接インターンシップについての説明を聞くことができる「KIT インターンシップフェス 2024」を令和6(2024)年5月18日(土)に開催しました。今回は6号館多目的ホールを会場とし、企業は対面またはオンラインどちらかを選択し参加し、学生は全員対面参加としました。午前の部・午後の部に分けて実施し、計96社(内9社がオンライン)の企業が参加し、延べ579人の学生が参加しました。

「KIT インターンシップフェス」は、キャリア教育の一環として、学生がインターンシップに参加し、さまざまな業界の知識を深めることを目的に実施しています。「KIT サマーインターンシップ」に賛同いただいている企業が、その内容についての詳細説明を各回20分間、計5ターム行いました。学生は各企業のブースを自由に移動することが可能で、午前の部・午後の部で5社ずつ、最大

10社の説明を聞くことができます。今年度はインターンシップだけでなく、コーオププログラムについても紹介いただく場としました。コーオププログラムに賛同いただいている企業のうち、公募を行っている7社に、本イベントでコーオププログラムについて紹介いただきました。

今回は、より多くの企業のインターンシップを学生に紹介するため、参加企業を増やして実施しました。パーティションや配置を工夫することで、ブース数を増やすことに成功しました。参加企業が増えたことで、参加学生も増え、当日は会場の活気が感じられました。新型コロナウイルス感染症が5類へ移行したことに伴い、今回は対面での参加企業が増加しました。参加企業にオンラインでの参加形式を選択肢として残した点も、遠方の企業にとって、時間や場所の制約がなく好評でした。オンライン参加企業のブースには360度カメラ・マイクを設置し、画面越しではありますが説明を聞くことができると同時に、学生からも質問などができる双方向のコミュニケーションを可能としました。

参加学生からは「多くの企業の話を知ることができ、インターンシップ選びの参考になった」という声があり、満足度の高いイベントになったと実感しました。参加企業からは「熱心な学生に会う事ができ、大変貴重な時間でした」「多くの学生さんが参加しており、また真剣に話を聞いている方が多い印象でした」などの感想をいただきました。

また、前回と同様、参加学生がどこの企業の説明を聞けば良いか分からない際などに訪れることができる「相談コーナー」を会場に2か所設置しました。相談コーナーでは、キャリア・コンサルタントの職員が常駐し、学科ごとのオススメ企業や業界内容・事業内容を紹介しつつ各企業のブースに学生を誘導しました。各タームの合間や途中参加のタイミングで多くの学生が訪問し利用する姿が見られました。



立ち見の学生が出るほど賑わうブース[インターンシップフェス]

2024年度夏季SDGs インターンシッププログラム

令和6(2024)年度夏季SDGs インターンシッププログラム(ソーシャルマッチ株主催)に1人の学生が参加し、カンボジア、プノンペンにおいて日本の他大学からの参加学生たちとチームを組み、現地企業の課題に対する解決策を提案するソーシャルスタディを行いました。

参加学生は、オンラインでの事前・事後学習を含むプログラムのすべてに参加し、令和6(2024)年度後学期に「インターンシップ実習(2単位)」が認定され、「オナーズプログラム」の持続的自己成長のための活動ポイント2ポイントが認定されました。

2024年度夏季は、カンボジアへの渡航型の全2プログラムがあり、本学からの参加学生は教育問題に取り組むプログラムを選択しました。インターン先はカンボジアのNGO、ISF(アイエスエフ)※で、プログラム中に取り組む課題は「寄付を集めるための団体のパンフレットを製作せよ」というものでした。他の日本人学生たちとチームを組みアイデアを出し合い、中間発表後のフィードバックの後にISF代表に対して発表を行い、最優秀グループの案が採用されました。



現地の少年たちと交流する参加学生

本プログラムは、参加のための語学要件等もなく、ソーシャルマッチ株式会社の手厚い通訳サポートもあるため、語学力の向上を目指す他のプログラムとは異なる経験ができるという特長があります。今回参加した学生からは「活動を通して、言語がなくてもコミュニケーションがとれるということを学びました。ISFの子どもたちと触れ合ったときに英語が喋れなくても一緒に遊んだ

り、ダンスを踊ったりすることで自然と仲良くなることができて、自然に笑顔を見せてくれるようになった」という感想をいただきました。

※ISF：カンボジアの貧困層の子どもたちに無償で授業を開講しているNGO団体。

「KIT 人材開発セミナー2024」を開催

産業界と本学との親交を深め、情報を交換する場として、KIT 人材開発セミナーを平成6(1994)年から開催しています。令和6(2024)年度は、金沢会場を9月10日(火)・11日(水)の2日間、大阪会場18日(水)、東京会場19日(木)の順に3都市で4回開催しました。

全体の参加企業数と参加人数は811社、1,232人と、昨年を上回る企業・人数でした。また、セミナー開始までの時間を利用し、学業・研究・課外活動などに意欲的に取り組む学生を紹介したビデオを上映しました。

はじめに、会場ごとに山口敦史副学長または廣瀬康夫副学長から「昨年に引き続き対面で開催できたこと、学生が成長できる教育システムとして社会実装型教育やDX等の取り組みを行ってきたことを踏まえて、本学の特徴やこれからの方針について理解いただき、企業の皆様との関係を更に強固なものとしていきたい」と開会のあいさつがありました。

第1部の講演会では、大澤敏学長が「社会実装型総合大学へ～成長分野(デジタル・グリーン)をリードする情報に強い人財育成～」と題して、社会実装型教育・研究を通して実現させるために、社会人と学生・教員が世代・分野・文化を超えて同じフィールドで学び合う教育プログラムや、本学が取り組んでいるコーオプ教育・リカレント教育、6学部17学科への改組等について説明しました。続いて、新たな試みとして教員から学科の特徴や、学生が4年間の学びの中でどのように成長し人材となっているかについて紹介し、この後の情報交換へと繋げるための時間を設けました。



本学の取り組みについて講話する大澤学長(東京会場)

会場を移して行われた第2部の情報交換会では、徳永光晴進路部長からあいさつを兼ねて、令和6年の就職活動状況と、インターンシップに参

加した学生を採用する企業が更に増加していると説明しました。

交流会会場では学科ごとのコーナーを設け、教員が参加者と名刺交換や内定の御礼、令和7(2025)年度採用に関する情報交換を行いました。学科の紹介を行ったことで、参加者は複数の学科と情報交換を行っており、閉会時間まで列が途切れることがなく大盛況となりました。

また、KIT コーオプ教育、産学連携・共同研究、リカレント教育、インターンシップについても参加者と教職員が熱く語り合い、会場が熱気に包まれた情報交換会となりました。



情報交換会で企業の方々と名刺交換する教員

「就職活動ガイダンス」を開催

「就職活動ガイダンス」を、10月7日(月)、8日(火)の2日間で学部1～3年次、修士1年次を対象に6号館多目的ホールで開催しました。就職活動を行う上で、具体的な準備を促すことを目的として毎年同時期に開催しており、令和6(2024)年度は2日間で計153人の学生が参加しました。

初めに、徳永光晴進路部長が「これから皆さんの人生にとって非常に重要な半年が始まります。まだ就職活動のスタートを切れていない人もいるかもしれませんが、準備の仕方を間違っははいけません。時間は掛かるかもしれませんが、まずは早めに動き出し、正確な情報収集を行い、時には企業を比較することなども重要になってきます。もう一つは、どうしても会社名ばかりが気になるかもしれませんが、就職後の職種という点を考えることも重要です。最近はジョブ型採用も少しずつ見られるようになってきているので、もし職種を重要視するのであれば、大学院への進学もぜひ検討してもらいたいです。みなさんの就職活動が上手くいくように祈っています。頑張ってください」と激励のメッセージを贈りました。

次に、進路開発センター二飯田一貴次長から、現在の本学の就職状況を学生に伝え、令和6年度の就職内定率は9月の時点で85.9%と、前年と同水準で学生が内定を得ていることや、今後の採用スケジュールの流れ、これから就職活動のためにまず何を実施するべきかなどを学生に伝えました。



激励のメッセージを贈る
徳永進路部長



就職状況について説明する
二飯田次長

今回の就職活動ガイダンスで、特に参加学生の関心を引くのは、就職活動を終えたばかりの現役学生によるパネルディスカッション「こうして私は進路を決定しました」です。7日に工学部から6人、8日に工学部以外から7人の計13人(学部4年次9人、修士2年次4人)がパネラーとして

登壇しました。

パネルディスカッションでは、登壇内定者に事前にアンケートを取り、当日会場のスクリーンに内定者が回答した結果を設問ごとに表示し進行しました。主な設問としては「内定者が行った自己分析・業界研究の方法」「どのように企業を選んだか」「就職活動で最も苦勞したこと」など、内定者が実際に経験した就職活動体験談を参加学生に向けて伝えました。パネルディスカッションの最後には、後輩の参加学生に向けて熱いエールが贈られ、参加学生は就職活動への意識を更に高めていました。



パネルディスカッションで体験談を話す学生

内定までにやるべきことを半日で体験できる「就活の日」を開催

「就活の日」を、11月30日(土)午前中に23号館1階で開催しました。本イベントは、自己分析講座・業界研究講座などを通して、就職活動に必要な知識を身につけるだけでなく、模擬面接、履歴書やエントリーシートの作成・添削など、内定獲得までに必要なことを一度に体験できるもので、今回が3回目の開催となりました。

令和元(2019)年度入学生まで必須科目「人間と自然セミナーⅢ」として、穴水湾自然学苑で模擬面接・履歴書作成など就職活動に必要なことを学ぶ機会がありましたが、令和2(2020)年度から「人間と自然セミナーⅢ」が廃止となりました。そこで、就職活動を控える学生に、就職活動について学ぶ機会を提供することを目的に、進路開発センターの学生スタッフが「就活の日」を立案しました。企画からパンフレット作成、当日運営までを学生スタッフが担いました。前回までの実施内容を踏まえ、今回は新たにグループワークディスカッションコーナーを追加、また各コーナーの内容を見直すなど、様々な改善に取り組みました。また、本イベントは職員の就職指導力の維持・向上も目的としており、当日は面接官を務めていただくなど、各部署から多数の方にご協力をいただきました。



「内定者履歴書閲覧・懇談コーナー」で
内定者の説明を聴く参加者

今回は「内定者履歴書閲覧・懇談コーナー」の内定者を紹介するパンフレットを新たに制作し、より参加学生が自分の関心にあった内定者とスムーズに懇談できるようにしたことで、開始直後から多くの参加者で賑わいました。前回低調だった模擬面接コーナーについても、タイムスケジュールを見直し、イベント後半に実施することで、

まず履歴書を作成してから面接に挑戦するなどの流れを作ることができ、参加者を増やすことができました。新たに設置した、グループディスカッションコーナーでは、学生から要望のあったグループディスカッション試験の練習の場として、イベント後半に開催しました。1年次を含む6人の参加があり、2チームに分けて実施しました。参加学生からは「普段なかなか練習する機会がないので参考になった」「それぞれの役割の注意点が分かった」「実際やってみると想像以上に難しかった」との声がありました。結果としてイベント全体で約50人の学生の参加があり、参加学生の満足度も高いものとなりました。



グループディスカッションの練習をする参加者

「KIT ジョブフェス 2025」を開催

「KIT ジョブフェス 2025」(合同企業説明会)を12月4日(水)午後と7日(土)午前の2日間、6号館多目的ホールで開催しました。

近年の就職活動早期化で採用活動が活発化し、既に就職先が決まっている学生も少なくなく、学生の参加意識が低い懸念がありました。2日間で延べ319人の学生が参加しました。

就職活動の不透明感に加え、県内外の上場・大手・優良企業の出展があったこと、参加企業を研究するための資料を事前に配布し、企業研究の意識を高めたことで、学生の参加意欲に繋がったのではないかと思慮しています。

また、前回同様に企業が対面参加とオンライン参加を自由に選択することができるハイフレックス方式とし、学生は全員対面参加としました。

オンライン参加企業のブースには360度カメラ・マイクなどを設置し、画面越しですが、説明が聞けるのと同時に学生からも質問ができる双方向のコミュニケーションを可能とし、企業の出席方式に係わらず、会場で企業ブースに訪問することで、全ての企業の説明を聞くことができる仕組みとしました。



メモを取りながら説明を聴く学生たち

った企業の研究につなげることができて良かった」「職種や業界の研究につなげることができて良かった」などの意見がありました。

企業からは「一生懸命メモを取りながら聞いている姿を拝見し、熱心に就職活動を行っている学生が多いと実感しました」「熱心にお話を聞いていただき、質問もしていたため意欲のある学生が多くいらっしゃる印象でした」「学生さんは、入社後に何ができるかといった観点を強く持っていると感じました」「オンラインでも参加できるようにしていただき大変感謝しています」「しっかりしてコミュニケーション能力の高い方が多く、ぜひ弊社に来ていただきたい方ばかりでした」「皆さん熱心に聞いていただき話に熱が入りました」などのご意見をいただきました。

対面開催としたことで、企業・学生の反響が大きかった一方、都市部など遠方の企業からは、時間や場所の制約がなく、参加のしやすいオンラインでの参加方法を選択肢として残した点も好評でした。

夏のインターンシップの段階から就職を意識した業界研究、自己分析及び企業選びなどが始まっており、就職活動の早期化が続いています。



企業担当者の説明に耳を傾ける学生たち

「KIT ジョブフェス 2025」は、多くの企業を知る場として、2日間とも違う企業が出展しました。パーティションの配置を工夫することでブース数を調整し、1回の参加企業を増やして実施しました。各回説明時間を25分間とし、これを4ターム実施しました。学生は、真剣に企業担当者の話を聞くと同時にメモを取り、事前に企業研究を行い積極的に質問したりする姿が多く見られました。

学生からは「就職活動への意欲向上につながった」「対面での会社説明会が体験できてよかった」「人事部の方と話せたのが良かった」「知らなか

「KIT・ICT ステークホルダー交流会 2024」を開催

意欲ある学生が、自らの成長ストーリーを、社会人を中心としたステークホルダーに向けて発信する「KIT・ICT ステークホルダー交流会 2024」が2月20日(木)に6号館多目的ホールで開催され、企業、保護者、教職員、本学学生が参加しました。

各学科、各センターや国際高専から推薦された、学科2年次～大学院博士前期課程1年次の35人(当初36人の予定でしたが、当日体調不良により1人欠席)と、高専の学生3人の計38人の学生が参加しました。教職員がメンターとなって、学生の自己分析、振り返り、発表ストーリー作成、発表スライドやポスターの確認など支援をしました。事前にメンターと何度もストーリーの見直しや、発表練習を行い、より効果的なプレゼンテーションを作り上げました。

発表は、対面&オンラインのハイブリッド形式で運営されました。また、申し込みサイトで前年度の様子をダイジェスト動画で紹介しています。

●学生プレゼンテーション

13:00～16:10 ※途中休憩あり

代表学生による自己成長ストーリーのプレゼンテーションを行いました。学生1人あたり発表時間5分、フィードバックコメント記入3分としました。約280人(対面約170人、オンライン約110人)が参加しました。

●ポスターセッション(学生との個別交流会)

16:15～17:30 ※対面参加者のみ

ポスター、展示による学生個人の活動の紹介や意見交換、名刺交換を行いました。対面参加者、約170人が参加しました。



堂々とプレゼンテーションする学生

今回から、進路開発センターの学生スタッフが事前準備、受付、誘導、司会など当日運営を担当しました。学生スタッフの自主的な運営方式は多くの参加者から好評をいただきました。

参加者からのアンケートでは「学生の運営が素晴らしい。本来であれば自身に取り組んでいる研究内容にも触れたいところだと思うが、あくまでも学生自身の想いを中心にしたプレゼンに徹しているところが、非常に好感が持てる。プレゼンを聴き学生に興味を持ち、その後、個別交流会で直接ディスカッションするフェーズに移行できるプログラムも秀逸だと感じた」「弊社職種以外の分野の学生さんでも活躍できると感じられ、学部によらず採用活動を行い続けたいと改めて感じました」「こんな仕組みがあったら早いタイミングから学生さんが企業との接点を持つことができ、やりたいことも明確になり学びに身が入りそうだと感じました。皆さん堂々とプレゼンをされていて、学生さんにどんな指導をされているのが気になりました」「学生の価値観や御校のコーオプ教育の成果を知るための非常に良い機会となりました。企業が提供する教育・研修制度との乖離を生まないために、良い学びの場となり感謝しています」「スムーズな進行で、オンライン参加でも楽しむことができました。学生さんひとり一人にフィードバックをできる仕組みもいいですね。初回だったのでオンライン参加をさせていただきましたが、次回はリアル参加させていただきたいと感じました」など、アンケートを通してたくさんコメントをいただきました。



ポスターセッションにて自身の活動について紹介する学生

「2024 SRI's Introduction to Innovation Workshop」を開催

SRI International 認定ワークショップ「2024 SRI's Introduction to Innovation Workshop (I2I Workshop)」を2月27日(木)～3月7日(金)の期間で、大学院生、学部生、越日工業大学(VJIT)、ホーチミン市経済金融大学(UEF)の学生を対象に実施しました。スタンフォード大学(SRI インターナショナル)のイノベーション創出のノウハウを学ぶもので、参加することで修了証が授与されます。SRI から具体的なファシリテーション手法の実技指導を受けた18人のSRI I2I 認定ファシリテータが計6コースを担当し、実施しました。また、2日間コースだけでなく、もっと時間をかけて議論したいという声に応じて、3日間のコースも用意しました。

参加者は、自分自身の研究内容や実現化したいアイデアを1分間で、かつ口頭のみで伝える、SRI インターナショナルの提唱するプレゼン手法「エレベーターピッチ」の準備を事前課題として取り組み、一人ずつ順番に発表しました。学科や学年が異なる参加者全員が、自分のイノベーションのアイデアを発表した後、参加者による投票で、上位3～4位を選出し、そのアイデアを発表した学生をリーダーとして3～4チームを結成しました。その後は、チーム単位での活動となり、価値創造フォーラムという名称の発表を、各チームが3回ずつ実施しました。価値創造フォーラムは、チームによるプレゼンテーションと講師や他チームによるフィードバックで構成され、回を重ねるごとにプレゼンテーションの内容を見直していくSRI インターナショナルの手法です。その最大の特徴は、聴講者は顧客の立場でフィードバックコメントし、発表者は一切、応答せずにメモを取ることにあります。

本ワークショップは例年、夏期と春期で年2回実施しており、今回のワークショップは昨年3月と同様に本学の学生は対面での実施とし、VJIT・UEFとはオンラインで接続し開催しました。

参加者一人一人がアイデアを発表するエレベーターピッチにおいては、データ分析やAIを活用したアイデアが多く、過去のワークショップと比べて変化を感じられる場面でもありました。また、普段接する機会の少ない他学科の学生とチームを組み、議論していく中でお互いに刺激を受け、アイデアがブラッシュアップされることが体験

でき、学びにつながっているように感じられました。



コース終了後に記念写真に納まる参加者たち

ハイフレックスで実施したEコース・Fコースについては、前回同様にZoom及びGoogle スライドを使用して実施しました。またワークショップ終了後も交流を続けたいという前回参加者の声を考慮し、令和6(2024)年度はチャットツールを運営では準備せず、参加者それぞれのコミュニケーションツールを使用してもらいました。このワークショップだけでなく新たなコミュニケーションの輪を広げるきっかけにもなりました。また、グループワークの時間を通常より増やすことで、より深いコミュニケーションをとることができ、議論が深まった様子でした。事前にVJIT学生と本学の学生・教員による顔合わせを行ったことも円滑な運営、コミュニケーションにつながりました。本学の学生にとっても、VJIT・UEFの学生にとってもワークショップの内容だけでなく、国際交流の面でも非常に有意義なワークショップになりました。

また、前回と同様に、3日間コースを設けることで参加した学生からは、「じっくり議論ができて良かった」「納得がいくまで内容を詰められた」「フィードバックの時間が長くいろんな視点からの意見を知ることができた」等の感想が寄せられ、満足度の向上が伺えました。



Eコース・Fコースをハイフレックス形式で実施

II. 研究の取り組み

本学園は「深遠な技術革新」及び「雄大な産学協同」を建学綱領に掲げ、社会課題の解決を目指して地域社会や産業界のニーズとのマッチングを図りながら、様々な産学官連携活動に取り組んでいます。

学術研究助成・公的研究プロジェクトの推進

国の研究プロジェクトの採択状況

令和6(2024)年度の採択実績件数として、政府系機関研究は、戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)、JST共創の場形成支援事業、JST A-STEP事業、NICT革新的情報通信技術事業等の36件、科学研究費補助金は62件、その他助成金は66件でした。

NEDO「長距離物資輸送用無人航空機技術の開発・実証」に参画

NEDO(国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構)では、経済安全保障を強化・推進する観点から支援対象とすべき、先端的な重要技術の研究開発を進める「経済安全保障重要技術育成プログラム」の一環で、「長距離物資輸送用無人航空機技術の開発・実証」の研究開発に着手します。

当事業に金沢工業大学からは革新複合材料研究開発センターと航空システム工学科の赤坂剛史准教授の研究室が参画することとなりました。

本事業では、30~50kg程度の物資を最大1000km程度輸送できる、垂直離着陸可能な無人航空機技術の開発を目指します。この性能要件を満たすために、水素、SAFといった代替燃料で運用可能なエンジンとモータによるハイブリッド動力システム、高出力モータ、軽量構造技術などの要素技術を開発し、これら要素技術を統合した試験機で地上試験・飛行試験や将来的な安全認証取得を見据えた試験を実施します。

本事業の成果により、離島間や洋上インフラへの物資輸送、送電線・パイプラインといった広域インフラ設備の点検、海上や山岳地域における要救助者の捜索、災害時の被害状況調査などで無人航空機が活躍する社会の実現を目指します。

「大学の新技术、研究活動への奨励金」等の助成事業に18件が採択

令和6(2024)年度の公益財団法人澁谷学術文化スポーツ振興財団による助成事業「大学の新技术、研究活動への奨励金」「高校と高専の産業教育への助成金」「文化活動への助成金」に応募した課題について、厳正な審査が行われた結果、18件(総額4,406万円)が採択されました。金沢工科大学園における採択件数としては過去最高の採択件数及び助成総額となります。

採択者

◆大学の新技术、研究活動への奨励金

高井勇輝講師(数理・データサイエンス・AI教育課程)
坂本重彦教授(機械工学科)
中村真人教授(機械工学科)
福留功二講師(機械工学科)
廣光永兆教授(航空システム工学科)
森合秀樹教授(航空システム工学科)
村尾俊幸教授(ロボティクス学科)
河野昭彦教授(電気電子工学科)
松井くにお教授(情報工学科)
須田達教授(建築学科)
小田忍教授(応用バイオ学科)
竹俣一也教授(教材開発支援センター)
南戸秀仁教授(高信頼理工学研究センター)

◆高校と高専の産業教育への助成金

小間徹也教授(国際高専・国際理工学科)
藤島悟志教授(国際高専・国際理工学科)

◆文化活動への助成金

藤井清美教授(英語教育課程)
松林賢司教授(経営情報学科)
竹内申一教授(建築学科)

同財団は、大学における学術研究の充実並びに高校及び高専における産業教育の振興を図るほか、文化活動やスポーツ活動に対する顕彰・助成を行うことを目的としています。昭和61(1986)年の設立より本学園からも多くの先生方が応募しており、本事業による助成を受けて積極的に研究活動を展開しています。

応用バイオ学科の平田教授の研究が第38回「北國がん基金」助成対象に選定

6月21日に第38回北國がん基金の助成対象の発表があり、「研究活動助成部門」で応用バイオ学科の平田宏聡教授の「細胞間引張力の人為操作による表皮がん細胞の増殖抑制・分化誘導法の開拓と分子機序の解明」が選ばれました。

公益財団法人「北國がん基金」は医学関係者の要望を受け昭和61(1986)年に創設されました。基礎研究、臨床研究、その他がん研究のあらゆる分野で、業績等の優れた石川県内の研究者、医療従事者に助成しています。

第38回は県内の大学、病院、関係団体から研究活動部門、啓発活動部門に計22件の推薦・応募があり、12件が選ばれました。

平田宏聡教授の採択研究課題では、表皮がん細胞の増殖抑制と分化誘導を効果的に実現する細胞力学操作法の確立に取り組みます。また、力学操作が増殖抑制と表皮分化を引き起こす分子機序の解明を進めます。これらの取り組みにより、「力」を介した全く新しいがん予防/治療法の創出を目指します。

応用化学科の大嶋教授が(公財)大澤科学技術振興財団から研究助成

応用化学科の大嶋俊一教授の研究(研究テーマ:「高骨伝導能と抗菌性を兼ね備えた人工足場材料の開発を指向したフッ素添加 Diamond-Like Carbon を用いた表面改質技術の解明」)が、公益財団法人大澤科学技術振興財団の令和6(2024)年度研究開発助成に採択されました。

同財団は金属及びその他新材料に関する、切削、研削等の機械加工の分野並びにこれらの基礎となる理工学の諸分野を対象に研究開発助成や国際交流活動への助成を行っており、本学ではこれまでに機械工学科の先生方の研究が採択されています。

大嶋教授が行う本採択テーマは、金沢医科大学の先生方との共同研究による医工連携分野のテーマであり、金属等の表面改質技術の実用化を指向する内容となっています。骨異常や骨損傷などの修復には人工足場材を用いた治療が一般化していますが、骨伝導能の低さが問題となっており、併せて感染症予防の観点から抗菌性も必要とされています。そこで、フッ素を添加した Diamond-Like Carbon (F-DLC) による表面改質技術に着目し、F-DLC を用いた表面改質技術の解明を目指します。これにより従来の表面改質手法では不可能であった抗菌性と骨伝導能を同時に付与する表面改質技術の実用化へと繋がることが期待されます。

機械工学科の福留講師が(公財)TAKEUCHI 育英奨学会から研究助成

機械工学科の福留功二講師の研究(研究テーマ:「油冷却モータの熱設計システム構築に向けた粗視化モデルの開発」)に対して、公益財団法人 TAKEUCHI 育英奨学会から研究助成金が贈呈されることとなり、8月9日に長野県上田市で贈呈式が開催されました。

同財団は、本学が「連携・協働に関する協定」を締結している長野県坂城町で平成27(2015)年に設立され、これまでの10年間で4人の本学教員が助成金に採択されています。

今回の助成対象となった研究では、電磁モータの高性能化と小型化を実現するために、油冷却システムの導入に必要な熱設計システムの構築を行うものです。昨今の電気自動車(EV)や新幹線などに欠かせない高性能で小型なモータを開発するため、空冷や水冷とは異なり直接油をモータ内のコイルに吹き付けることで冷却するモータの開発を目指します。少量の油で必要十分な冷却効果を得るなど、システム最適化検討も重要であることから、油冷却システムのコンピュータシミュレーションによる熱流動解析を行い、最適なモータ設計を得るシステムの構築を行います。

研究シーズ・研究成果の発信および産学連携マッチングの促進

国際電気標準会議（IEC）ワーキンググループ委員が直流電力融通システムを視察し意見交換

金沢工業大学（以下、本学）とNTTアノードエナジー株式会社が共同で構築し、令和5（2023）年11月から本格運用を開始している扇が丘キャンパス内の直流電力融通システムは、キャンパス内に太陽光発電設備と蓄電池を設置し、北校地、南校地にそれぞれ直流1500V、直流380Vの自営線網を構築して両校地間の電力融通を行いながら、直流のまま効率的にエネルギーを運用するシステムであり、カーボンニュートラルの実現やエネルギーレジリエンス強化の観点からも国内外から高い注目を集めています。

このたび、電気及び電子技術分野の国際規格の作成を行う国際標準化機関である国際電気標準会議（International Electrotechnical Commission：IEC）のメンバーが5月30日

（木）に本学を訪れ、直流電力融通システムの設備等を視察したうえで、関係者と意見交換を行いました。

今回来訪したのは、IECの中で電力供給システムに関わる規格を扱う第8技術委員会の下にあるWGの委員で、座長のXiaodong Yuan氏を含む海外委員7名と日本委員3名、およびオブザーバー2名の合計12名が出席しました。

視察および意見交換では、直流電力融通システムにおける技術力の高さや先進性について高く評価されるとともに、本成果を国際的に発信し、理解を深めていただく好機となりました。なお、令和7（2025）年度のIECのテクニカルレポートIEC-63282-101に、この直流電力融通システムが我が国初の本格的システムとして事例掲載される予定です。



意見交換する泉井所長（右から3人目）と
IECワーキンググループ委員

先端材料創製技術研究所が「MEX 金沢2024」に出展

石川県産業展示館3号館・4号館で、5月16日（木）から18日（土）に開催されたMEX金沢2024（第60回機械工業見本市）に、先端材料創製技術研究所が出展を行いました。

MEX金沢は、金属工作・加工機械及びその関連製品並びに電機・電子関連機器等の流通促進と技術交流を図り、産業と貿易の振興発展に寄与することを目的として、（一社）石川県鉄工機電協会が主催する北陸で最大規模の展示会です。

主催者発表によると、1日目は9,489人、2日目は15,571人、3日目は11,214人で、3日間の合計は36,274人の参加者であった。2日目と3日目は前年を超える来場者数となり、非常に盛況な展示会となりました。

また出展企業の地元就職に繋がるようにと、鉄鋼機電協会から近隣の高校にも働きかけがあったこともあり、普段より多くの高校生がバスツアーで訪れました。

本学からは「先端材料創製技術研究所（創製研）」の展示を行い、主に学生が中心となり、企業の方や本学の卒業生、高校生など多くの来場者に展示内容の説明を行いました。展示では、各研究室の紹介に加え、オープンキャンパスでも紹介しているデジタルツインシステムを稼働させ、扇が丘キャンパスのチャレンジラボとMEX会場を通信で繋いだデモも実施しました。また、令和7（2025）年度の学部学科改組の内容についても紹介し、高校生にはオープンキャンパスへの参加を促すことができました。今後もこうした機会を活用しながら学生募集にもつながる本学の成果発信を進めていきます。



来場者に展示内容を説明する学生ら

3研究室が「大学見本市 2024～イノベーション・ジャパン」に出展

東京ビッグサイトで8月22日(木)、23日(金)の両日「大学見本市 2024～イノベーション・ジャパン」が開催されました。本学からは電気電子工学科の深沢徹教授、メディア情報学科の松下裕教授、応用化学科の露本伊佐男教授の各研究室が出展を行いました。

今回で21回目の開催となる「大学見本市～イノベーション・ジャパン」は、全国の大学や公的研究機関などから創出された研究成果の社会還元・技術移転を促進すること、及び、実用化に向けた産学連携などのマッチング支援を実施することを目的として、国立研究開発法人科学技術振興機構(JST)によって毎年開催されているイベントです。全国の132の大学などから「カーボンニュートラル・環境」「健康・医療」「食料・農林水産」「情報通信」「インフラ・安全・社会基盤」の五つの分野別に281件の研究成果が出展されていて、2日間の入場者登録数は、1日目5,606人、2日目5,395人、合計11,001人(主催者発表)でした。

深沢研究室は「小型アンテナ実装技術」というテーマで出展し、金属上でも動作する小型アンテナの展示と持参した測定器を使って受信状態を観測する実演を行いました。松下研究室は「AIを用いて文字拡大できる視線操作型Web提示システム」というテーマで出展し、視線のみでPCを操作できるシステムの実演を行いました。露本研究室は「木材・木質材料・紙を不燃化する最新技術」というテーマで出展し、実際に不燃材を含浸させた木材と燃焼させた時のデモ動画の展示を行いました。深沢教授と松下教授は会場内のショートプレゼンにも参加したほか、各ブースとも多くの来場者に研究内容の説明を行い、今後の共同研究等の発展も期待できる貴重な場となりました。



来場者に展示内容を説明する学生ら

中沢研究室が「Japan Robot Week 2024」に出展

東京ビッグサイトで9月18日(水)から9月20日(金)の3日間にわたって開催された「Japan Robot Week 2024」に、本学から工学部情報工学科の中沢実研究室が出展しました。

Japan Robot Weekは、世界最大級のロボットトレードショー「国際ロボット展」の翌年に開催するロボット専門展示会として隔年で開催され、今回で第7回目を迎えます。公式サイトでの発表によると3日間の来場者数の合計は43,271人でした。

中沢研究室では「3次元物体認識と都市3Dモデルを組み合わせた交差点の3D空間化の提案」「UWBの位置推定によるAR描画情報の取得の自動化」「UWB通信を用いたロボットの自己位置推定の提案」「遠距離恋愛支援システム」の4テーマの展示を行いました。本内容はIT系大手メディアのWEB記事と日刊工業新聞の記事に取り上げられるなどの成果があり、また共同研究を進めている台湾のSTARBIT社をはじめとする多くの企業や政府系研究機関の訪問を受け、展示会中に議論が交わされるなど、今後の発展に繋がる貴重な機会となりました。



来場者で賑わうブース

航空システム工学研究所が「2024 国際航空宇宙展」に出展

東京ビッグサイトで10月16日(水)から19日(土)に開催された「2024 国際航空宇宙展」のアカデミックゾーンに、本学の航空システム工学研究所が出展しました。本学としては8年ぶりの出展です。

同展示会は航空分野・宇宙分野の国内最大の展示会であり、来場者数は主催者発表によると37,168人でした。

ブースでは、①先尾翼型ジェットエンジン搭載ドローン、②マルチロータタイプ大型ドローン、③自動車運転シミュレータを用いた空飛ぶクルマの運転シミュレーションを展示し、来場者に研究成果の全体像や活動を紹介することができました。



来場者で賑わうブース

特に最終日は一般公開デーであったため、家族連れの来場者がブースに立ち寄りシミュレータを体験するなど、幅広い方々に航空工学を学べる大学として本学への興味関心を高める機会となりました。また航空機メーカーや航空事業会社との情報交換の場として、共同研究等に繋がる話も多数いただくなど、貴重な場とすることができました。

先進的な学術研究や社会実装型の研究開発

脳由来神経栄養因子 BDNF の産生障害と自閉症との関係を解明し新たな自閉症診断マーカーを提唱

本学の応用バイオ学科の小島正己教授と、清華大学（中国）、首都医科大学附属北京天壇病院（中国）、富山大学、藤田医科大学、前橋工科大学などによる共同研究チームは、脳由来神経栄養因子 BDNF (Brain-derived neurotrophic factor) の産生障害と自閉症の関係を解明し、新たな自閉症診断マーカーを提唱しました。

神経栄養因子 BDNF は、神経細胞の成長、生存、神経伝達の亢進などの生理作用をその受容体 TrkB を介して行う脳の成長因子として注目されています。小島教授は BDNF と脳の健康および疾患の関係を解明を目指しており、本研究ではその BDNF の産生が非効率となったモデルマウスが ASD (Autism Spectrum Disorder 自閉スペクトラム症) 様の表現型を示すこと、神経伝達とその構造に異常があることを見出しました。この BDNF の産生不全を自閉症の解明と治療および診断の技術開発につなげることは重要であるため、小島教授は清華大学、首都医科大学附属北京天壇病院の臨床研究チームとの共同研究を行いました。その結果、血漿中の BDNF 濃度が ASD (Autism Spectrum Disorder 自閉スペクトラム症) のバイオマーカーとして機能する可能性が見出され、

ASD の疾患進行のモニタリングや治療薬の有効性に関する科学的評価につながる極めて重要な臨床データの発表に至りました。

当研究成果は Nature Publishing Group が発行する精神医学系科学誌「Molecular Psychiatry」(モレキュラ サイキアトリー) のオンライン版に令和 6 (2024) 年 5 月 18 日に掲載されました。

[学術誌名]

Molecular Psychiatry

[タイトル]

Inhibiting proBDNF to mature BDNF conversion leads to ASD-like phenotypes in vivo

[著者]

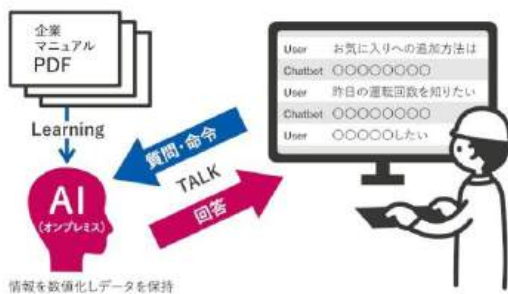
Feng Yang, He You, Toshiyuki Mizui, Yasuyuki Ishikawa, Keizo Takao, Tsuyoshi Miyakawa, Xiaofei Li, Ting Bai, Kun Xia, Lingling Zhang, Dizhou Pang, Yiran Xu, Changlian Zhu, Masami Kojima & Bai Lu

本研究は神経栄養因子 BDNF の産生低下が自閉症の病因において中心的役割を果たすことを提唱したもので、本発見は、ASD の診断と治療を前進させる新たな方向性を示しています。そして本疾患の進行をモニタリングし、薬剤の有効性を評価するためのバイオマーカー研究への進展が期待されます。

別川製作所との共同研究により製造現場の課題解決に向けたスマートファクトリー化を推進

本学の情報工学科の松井くにお研究室、坂本真仁研究室と株式会社別川製作所（石川県白山市）との共同研究により、製造現場の課題解決に向けて、「スマートファクトリーに適応した生成 AI による自由対話システムの開発」と「スマホを活用したスマート検針サービス化の技術開発」に取り組みました。

「スマートファクトリーに適応した生成 AI による自由対話システムの開発」では、「ChatGPT」でも使用されている LLM（大規模言語モデル）技術を採用しました。作業者がブラウザ上で入力した質問や命令に対し、生成 AI が自然な対話形式で応答することで、作業者はその場で迅速に課題を解決することができます。



システム概要図（スマートファクトリーに適応した生成AIによる自由対話システムの開発）

「スマホを活用したスマート検針サービス化の技術開発」では、スマホのカメラで撮影したアナログメーターの画像をサーバーにアップロードし、画像からメーターの識別と数値をデジタル化するスマート検針技術の開発に取り組みました。このスマート検針技術を用いることで、作業者の手間を簡略化し、データの入力ミスを防ぐことができます。



システム概要図（スマホを活用したスマート検針サービス化の技術開発）

この共同研究の成果は、将来的に別川製作所が独自に構築検証する Creer プラットフォームで展開することを予定しています。

また、情報工学科の中沢実研究室と株式会社別川製作所との共同研究では、同じく製造現場の課題解決に向けて、「UWB（超広帯域無線通信規格）、LiDAR（Light Detection and Ranging）、超音波の3センサーを組み合わせて走行する自律ロボットの開発」と「AR グラスとUWB を組み合わせ完全ハンズフリーで素早く情報を取得できる新発想のロケーション AR システム」に取り組みました。

「自律ロボットの開発」では、ロボットが自律走行をする上で必要な自己位置情報の取得に UWB 通信を活用することを提案しました。ロボットの車体に UWB タグを搭載し、対象空間に一定間隔で固定した UWB アンカーとの相互通信で走行可能性をロボットが判断します。そのロボットが走行したルート情報を基に、対象空間の周辺状況を示す「環境地図」を自動生成する技術や、障害物にもロボットが柔軟に対応できるセンサー技術を組み合わせたセンサーフュージョンを実装し、リアルタイムで工場内の環境状況を把握しつつ、目的や指示に準じてルートを選択し、障害物を回避して自走できる自律ロボットを開発しました。

「ロケーション AR システム」では、UWB による位置情報と AR グラスを装着した時の角度情報から、必要なデジタル情報を自動的に取得する方法を考案しました。AR アプリでは環境地図上の利用者の座標を推定し、取得された視線ベクトルと利用者の推定座標から、視線の先に機械があるかどうか判定します。その上で、機械の情報を AR グラス上に描画する仕組みを作り上げました。



工場内での実証実験の様子

この共同研究の成果は、今後の巡視や点検、情報収集をはじめ、スマートファクトリー化に向けた幅広いシーンでの実用化に期待が高まる研究成果となりました。

地域幸福度(Well-Being)指標の活用を促す「コレクティブ・インパクトゲーム」を製品化

金沢工業大学 SDGs 推進センターは、一般社団法人スマートシティ・インスティテュート、東京海上日動火災保険株式会社、株式会社 LODU と共同で、「コレクティブ・インパクトゲーム」を製品化しました。

「コレクティブ・インパクトゲーム」は、日本政府が推進するデジタル田園都市国家構想における地域幸福度 (Well-Being) 指標として活用されている LWC 指標 (Liveable Well-being City 指標) を用いて、街の強みや弱みを特定し、企業・自治体・市民・教育機関が連携しながら、ウェルビーイングな街の実現を目指すゲームです。

ポスト SDGs においてもウェルビーイングは中核の概念となり得ると注目されており、また国レベル、地域レベルの成長戦略や政策等においても経済成長のみならずウェルビーイングという視点を重視したビジョンが打ち出されるようになっていきます。

このゲームの活用により、多様なステークホルダーがお互いの立場を理解しながら win-win-win の状況を実現するための重要なポイントを学ぶことができます。



製品化された「コレクティブ・インパクトゲーム」

今後、金沢工業大学、一般社団法人スマートシティ・インスティテュート、東京海上日動火災保険株式会社、株式会社 LODU の4者が協力し、「コレクティブ・インパクトゲーム」の普及に向け、ワークショップや研修等を実施するとともに、製品版を活用して共に普及活動を行う認定ファシリテーターの育成にも取り組む予定です。

産官学連携で開発した AI による林業支援システムが金沢市と能登森林組合で利用開始

金沢工業大学が株式会社エイブルコンピュータ (石川県金沢市) と石川県農林総合研究センター、石川県森林組合連合会との産官学連携で開発した AI による林業支援システムについて、金沢市と能登森林組合での利用が開始されました。

本システムは、農研機構生研支援センターイノベーション創出強化研究推進事業の支援を受け開発されたもので、林内で撮影した 360° カメラ画像をアップロードすると、撮影された場所の周囲に材積がどれくらいあるのか、原木等級の割合はいくらかを AI によって推定します。



AI による樹種の自動判定と色分け表示の様子

金沢市では、本システムを市営造林事業での立木評価に利用することを、能登森林組合では、材積の推定方法のスクリーニングに利用することを、それぞれ予定しています。

顕著な研究成果の受賞等

森本教授の研究グループが精密工学会の高城賞を受賞

本学の機械工学科の森本喜隆教授の研究グループが、公益社団法人精密工学会の高城賞を受賞しました。

高城賞は、精密工学分野で独創性に優れ、工業的価値が高いと認められる論文で、その内容が産業界主体で実施されたものを対象に、公益社団法人精密工学会が贈賞する賞で、毎年2件選出されます。

受賞対象となった論文は『精密工学会誌』90巻8号に掲載された「回転軌跡可変主軸の研究」で、森本教授を含む5名による共同研究の成果です。

「回転軌跡可変主軸の研究」では、電気自動車の普及や内燃機関のさらなる高効率化が求められていることを背景に、EVのモータケースやエンジンのシリンダの円筒形状の加工時の歪みを見越した非円形加工を高速で実現するため、特殊モータであるベアリングレスモータを用いて工具先端の回転速度と半径方向の位置を制御できる機構を備えた工作機械主軸を開発しました。

当研究が実用化すれば、エンジンが熱効率45%以上を達成するキーファクターとなり得るほか、EVモータにおけるコギング現象の回避ができ、乗り心地の改善や運動性能の向上に寄与できます。

将来的には、EVモータや内燃機関の内筒形状を高精度に創生する世界初の高機能主軸の開発とそれを用いた加工技術の確立に挑みます。

藤田准教授が令和6年日本AEM学会賞「技術賞」を受賞

本学の電気電子工学科の藤田萩乃准教授が、日本AEM学会の「技術賞」を受賞しました。日本AEM学会は、電磁力と電磁現象の解析及び応用に関し、国際共同研究をはじめ数々の事業、国際交流を行っている学会です。本会では高いレベルとして認められる研究成果に「技術賞」を授与しています。

受賞対象となった研究成果はマイクロ波加熱装置に関するものです。楕円型のチャンバの二つの焦点の一方にモノポールアンテナを設置しマイクロ波を放射すると、もう一方の焦点位置に設置した非加熱物を高効率で加熱することができますが、非加熱物の物性や形状によってはチャンバ内の場が乱れ反射波が生じてしまうことから、インピーダンスを整合できる調整機構を開発しました。これによりチャンバ内の反射波をキャンセルし、シミュレーション上では99.97%のマイクロ波を非加熱物に吸収させることができます。

本装置は食品用途だけでなく、幅広い分野での活用が想定され、早期の市場投入が期待されています。



授与された表彰状と受賞メダル

NTT 社会情報研究所が平准教授との共同研究の成果としてホワイトペーパーおよび実践映像を公開

本学の基礎教育部教職課程の平真由子准教授と NTT 社会情報研究所が進めている、ウェルビーイングの学びに関する共同研究の成果について、NTT 社会情報研究所がホワイトペーパーとして令和 6 (2024) 年 6 月に公開しました。

「ウェルビーイング」とは、それぞれの人の「よく生きるあり方、よい状態」を意味するもので、特に教育の分野では重要なテーマとなっています。このたび公開されたホワイトペーパーでは、「ウェルビーイング・コンピテンシー (Well-being Competency)」を提案し、その学びの場での実践方法を併せて紹介しています。

また、10 月には、NTT 社会情報研究所が学校教育の現場へのウェルビーイングの取り入れ方を提案する実践映像「教室におけるウェルビーイングの学び」を平准教授監修のもとで企画・制作し、公開しました。

今後は、児童生徒や教師が、ウェルビーイングに学ぶことのできるフレームワークやツール、それを支えるデジタル技術の研究開発を続けていきます。



実践映像「教室におけるウェルビーイングの学び」

金沢ゆかりの建築家・和田順頭を取り上げた武田さんの卒業論文が「日本建築学会優秀卒業論文賞」を受賞

建築学部の武田拓磨さん (令和 6 (2024) 年 3 月卒業) (指導教員: 勝原基貴講師) の卒業論文「建築資料にみる建築家・和田順頭の建築活動に関する研究」が、2024 年 (第 35 回) 「日本建築学会優秀卒業論文賞」を受賞しました。

授賞式では、日本建築学会の竹内徹会長より武田さんに賞牌と賞状が授与されました。

「日本建築学会優秀卒業論文賞」は、全国の大学から応募のあった当該年度の学部卒業論文を対象に優れた論文 (環境、計画、構造系より最大計 15 件) を表彰するもので、卒業論文を執筆した建築学生にとって、最高賞・最難関の賞として知られています。

このたびの受賞は平成 2 (1990) 年の同賞設置以降、学部卒業論文部門・修士論文部門を通じて、本学で初となる快挙です。

武田さんは、金沢出身の建築家・和田順頭に着目し、金沢工業大学建築アーカイヴス研究所が所蔵する和田順頭の建築資料を用いて研究を行いました。建築資料を 1 点、1 点、丁寧に整理、分析し、文献資料の網羅的な蒐集やご遺族への聞き込みの実施など、多角的な視点から和田の実像に迫り、彼の建築観とその生涯とを詳細に明らかにした点が、研究方法を含めて高く評価されました。



授与された賞牌と賞状

なお、武田さんの研究成果をもとに構成された企画展「金沢ゆかりの建築家「和田順頭」—大正・昭和の金沢を彩った近代建築」が 9 月 28 日 (土) から 10 月 3 日 (木) まで金沢市役所第二本庁舎 1 階エントランスホールで開催されました。

岡田研究室に留学中のフェルナンデスさんが国際会議において「Gold Award」を受賞

大学院工学研究科バイオ・化学専攻岡田研究室に留学中のフェルナンデスさんが、令和6(2024)年12月14日から15日にかけて茨城県大洗町で開催されたThe 16th International Workshop on Ionizing Radiation Monitoringにおいて「Gold Award」を受賞しました。

同賞は上記国際会議における24件の若手研究者や学生を対象とした発表の中から、最も優秀であると認められた1件の発表に対して送られるものです。

ブラジル・サンパウロ大学から留学中のフェルナンデスさんは、微量の銀(Ag)イオンを添加したナトリウムホウ酸塩(Na₂B₄O₇)ガラスに着目し、この材料がラジオフォトルミネッセンス(RPL)特性を持つ事を明らかにしました。

RPLとは放射線を照射する事によりその物質が蛍光特性を持つようになる現象を指し、個人被ばく線量計に应用されています。世の中で認知されRPL特性を示す材料は多くなく、新たな応用添加に向けた材料探索が求められているなか、フェルナンデスさんは新しい材料の発見に成功しました。さらに、放射線測定を目的とした性能評価をおこない、繰り返し利用を可能とするための条件を明らかにしました。

同会議では、「New PL Material: Silver doped Sodium Borate Glass」と題して上記研究内容について発表を行い、高く評価されたものです。



発表するフェルナンデスさん

フェルナンデスさんの在籍するサンパウロ大学の研究チームでは、アマゾン川流域における地層の年代を放射線測定技術により測定することに取り組んでおり、本研究で得られた知見の応用展開が今後期待されます。

III. グローバル化への取り組み

本学園では、短期留学プログラムや長期（交換）留学プログラムなど、多彩なプログラムを設けています。留学プログラムの対象として、ロチェスター工科大学（アメリカ）（以下：RIT）、レスター大学（イギリス）、ローズ・ハルマン工科大学（アメリカ）、Hamm-Lippstadt University of Applied Science（ドイツ）（以下：HSHL）、École de technologie supérieure（カナダ）、メルボルン大学（オーストラリア）など多数の海外提携校があります。これらのプログラムでは日本とは異なる生活習慣、文化、歴史、風物などを学び、異文化を体験することにより、「国際人」としての素養を磨くことができます。今後のグローバルイノベーター養成に向けて、取り組みを進めました。

海外協定校及び関係機関との着実な交流実績の積み重ね

海外協定校である Lanka Nippon BizTech Institute（スリランカ）から3人の3年次編入生が入学

金沢工業大学（以下、本学）は、スリランカの Lanka Nippon BizTech Institute（以下、LNBTI）と令和元（2019）年11月11日（月）に覚書を締結し、両校間の学術連携の他、LNBTI における3年間の教育課程（日本では短期大学扱い）を卒業する学生の進学先の一つとして工学部情報工学科における学生の受け入れを目指してきました。

この度、令和6（2024）年3月にLNBTI を卒業した3人の学生が工学部情報工学科3年次に初めて編入学しました。日本語での授業科目の履修に困難はあったようですが、本学での学びが楽しいとも言っており、真摯に学修に取り組んでいます。3人共に日本語スキルには課題が残るため、英語教育課程の藤井清美教授と井ノ口悦子准教授のご協力により日本語教育科目も履修しており、更なる成長を目指しています。

LNBTI は令和4（2022）年6月に4年制大学へと移行しているため、今後は本学大学院への進学者の獲得を目指しています。情報工学を軸に学ぶLNBTI 学生の主な進学先候補は情報工学専攻となりますが、ロボティクスなどの分野を目指す学生も現れる可能性があります。日本人学生と留学生が共に学び、良い相乗効果を生み出してくれることを願っています。

LNBTI のアーナンダ・クマラ学長からも、LNBTI で育成する優秀な学生を厳選し、本学への進学を推奨し強く押し進める旨のビジョンが示されています。クマラ学長は、グローバル人材育成、国際開発、開発経済学、技術移転、国

際労働移動、アジア研究などを専門分野とするスリランカ出身の教授であり、鈴鹿国際大学学部長、同大学長補佐、東京工業大学特任教授を経て、名城大学外国語学部の開設を担い、同学部の初代学部長に就任、令和5（2023）年からLNBTI 学長に就任されました。経歴からも分かるように、日本での生活も長く、日本の大学にも精通されています。また、本学の数名の教員も所属するグローバル人材育成教育学会の会長も務めておられ、本学の教育と研究に対する非常に身近な理解者でもあります。



記念写真に納まる編入学生

LNBTI について

平成28（2016）年に開学した、南アジアでは初めての現地政府により承認された日系の私立高等教育機関。開学当初は短期大学でしたが、令和4年6月に4年制大学として承認されました。ICT系の学士を取得できる三つのコースを有し、現在は約200人の学生が学んでいます。

「交換留学(デュアルディグリー・専門)」「トビタテ」「ヴルカヌス」参加学生による帰国報告会を開催

令和5(2023)年度に各種プログラムにおいて4ヵ月以上留学した学生4人の帰国報告会を5月29日(水)に開催しました。今回の報告では、本学として初めて外部奨学金を得てポーランドで就業体験をした学生や、本学5人目のトビタテ生としてカナダで研究活動を行った学生もあり、留学中の活動に加えてその申請から審査、合格に至るまでの経緯なども語られました。報告会には、教職員を含む22人が参加しました。

交換留学プログラムで、現地学生と共に専門科目を履修する留学に挑戦した学生からは、プレゼン中心の授業に戸惑いながらも友人を巻き込んでの自主練習を重ね高成績を収めたこと、努力が実を結んだことなどが報告されました。RHITには留学前から親交のあった学生や日本人教員もあり、そうした方々から受けた厚い支援への感謝も述べられました。RHITでは、かねてより興味があった医学系の科目を履修することができ、今後の研究活動の方向性を決定づける学びがあったと報告されました。続いて発表した学生は、アメリカからオンラインでの参加となりました。令和6(2024)年5月にデュアルディグリープログラムを終了し、OPT制度*を活用してアメリカに残り、現地企業での研修の機会を模索しています。今回2回目のRIT滞在ということもあり、落ち着いた留学生活を送る中でも「研究」を軸とし、修了後の進路も見据え、学外とのネットワークを広げている旨が語られました。専門科目を履修する交換留学プログラムは、その高い語学要件から応募者が限られる状況が続いていますが、2人の発表に刺激を受け、挑戦する学生が増えることを期待しています。

コロナ禍を経て2023年より第2ステージとして再開したトビタテ!留学JAPANには、本学から1名の学生が参加しました。航空機材料のリサイクルをテーマに、高倍率を見事突破しトビタテの切符を手に入れました。しかし、留学中は「友達ができない」「研究以外で聞ける人がいない」など、様々な困難に直面したようです。それを打破するために、興味の薄かった日本のアニメやJPOPを猛勉強し、現地のアニメ同好会に飛び込み友達を作ったとのことで、現状に不満を抱えるだけでなく、それを受け入れ、自分が

変わり自らの居場所を確保できたことは、留学の枠を超えたかけがえのない経験でしたと振り返りました。また、1万人を超えるトビタテコミュニティの一員になることで、その縦の繋がりから自らフィールドワークを行う場所を見つけるなど、「主体的に動く」を具現化させた学生の行動は、報告を聴く学生に多くの刺激を与えました。

4ヵ月間のポーランド語学学習と7ヵ月間の企業研修を行うため1年間休学した参加学生には、「休学することへの躊躇いはなかったのか」という質問が投げかけられました。これに対し、「海外インターンシップは貴重な経験であり、前向きな休学はむしろ就職活動にプラスに働く」ときっぱりと答えました。実際にヴルカヌスに参加した学生の8割近くが現地企業から内定をもらっていたようです。半年以上の留学を目指す学生にとって、休学による卒業や修了の遅れや就職活動は大きな懸念材料です。今回報告した学生の経験に裏付けられた言葉に勇気をもらった学生は多かったに違いありません。

4人が発表した後も、参加学生からの質問が止むことはありませんでした。最後に、4人全員から「自分の興味に正直に、現状を受入れる覚悟と行動を起こす勇気を持ってほしい」と、これから留学を目指す学生にエールを送りました。「海外で働きたい」「奨学金で留学したい」という希望を持っている学生は多く、今回の彼らの発表がそうした学生へ何かしらのヒントを与えるものになったことを期待しています。



帰国報告会で発表を行った学生たち

*OPT制度: Optional Practical Trainingの略で、学生ビザ(F-1)で就学している学生が専攻した分野と関連のある職種で企業研修を行います。STEM分野でアメリカの大学院を修了した学生は、最長3年間アメリカに滞在することができます。

令和6年度金沢工業大学 夏季日本語教育プログラム (KIT-JLP 2024) を開催

本学の夏季日本語教育プログラム(以下:JLP)が、6月10日(月)~7月20日(土)の期間開催されました。JLPは米英3校との協定に基づき、本学学生(以下、KIT生)を派遣することと交換に、留学生を6週間受け入れ、日本語並びに日本文化教育を実施するものです。令和6(2024)年度は、以下の海外協定校3校から計21人が参加しました。

- ・ 米国ローズ・ハルマン工科大学(RHIT) 3人
- ・ 米国ロチェスター工科大学(RIT) 10人
- ・ 英国レスター大学(UoL) 8人



記念写真に納まる留学生

日本語教育プログラムの授業には、英語教育課程の藤井清美教授、ライト・ブレント准教授、井ノ口悦子准教授の3人が担当しました。

■授業内容

日本語クラスは学生のレベル別に4クラス開講し、初級クラスでは、日本語かるたを用いた平仮名の学習や基本文型や基本的な語彙を用いてインタビューを行うなど、座学によらない授業形態としました。また、中級・中上級レベルのクラスでは、仮名漢字を用いた読み書き技能を習熟させ、総合的な日本語コミュニケーション能力向上を目指す授業を実施しました。昨年度より開講クラスが多くなったことで、本プログラム参加留学生(以下、JLP生)一人一人の習熟度に合わせて授業を実施することができました。

日本文化クラスは内容を2つに分けて実施しました。1つは「Japan Community Project」と題し、KIT生とチームで地域社会が抱える課題を発見・解決するPBL型授業です。本学英语科目のイングリッシュセミナーと合体させる形で実施

したため、当該科目を履修するKIT生にとっては同世代の留学生と協働する大変良い機会となりました。留学生からは「KIT生と協力してプロジェクトに取り組むことができて良かった」などの感想が寄せられ、双方が母語と第二言語を駆使し協働作業を成し遂げた様子が窺えました。

もう1つは「Essential Japan」と題し、全4回の特別講師による講演を聴く場を設けました。トピックは①金沢在住の元RHIT教授のScott Clark氏による日本文化入門②日本で働くということに関するトークイベント③日本の宗教④本学 建築学部 竹内申一教授による金沢の建築文化、と多岐にわたりました。

留学生からは「文化の多様な側面に対する興味深い見識を深めることができた」や「日本の異なる文化や歴史的な側面に関して学ぶことができて良かった」などの感想が寄せられました。



最終発表を行う留学生

また、本プログラム期間中に、JLP生とKIT生が交流する場の提供を目的として、3つの国際交流イベントを企画し実施しました。

■国際交流イベント

6月15日(土):スカベンジャーハント

スカベンジャーハントは、異文化交流を通じた留学生のコミュニティ形成、そしてKIT生を含む参加学生の Intercultural Competence(異文化能力)を養う目的のもと行われました。スカベンジャーハントとは、学生たちが出されたお題を頼りに扇が丘キャンパスと金沢市内を探索するものです。お題は日本語と英語で書かれているため、KIT生13人とJLP生20人が2つの言語を話し、交流を楽しむ様子が見られました。扇が丘キャンパスでの探索ではKIT生も知らない場所に訪れ、金沢市内では観光地を回るなど充実した一日を過ごしました。

6月22日(土):加賀伝統工芸村ゆのくにの森

小松市にある加賀伝統工芸村ゆのくにの森で、

石川県内外の様々な工芸体験を行うことを目的として、JLP 生 21 人他計 40 人が参加しました。現地では、オリジナルのモザイクキャンドルの制作や輪島塗の沈金体験で箸を創作するなどして、KIT 生・JLP 生ともにものづくりに勤しみました。広い園内を散策しながら KIT 生が伝統工芸のお土産について説明したり、古民家で囲炉裏を囲んで抹茶や和菓子をいただいたりして、日本の文化を学び、楽しむ姿がみられました。

6月29日(土)：白川郷フィールドトリップ

世界遺産に認定されている白川郷独特の合掌造りの建物を見学し、日本の文化や歴史に触れることを目的として、JLP 生 22 人他計 44 人が参加しました。現地到着後、学生たちは荻町城跡展望台へ訪れ、眺望を楽しみ、眼下に広がる荻町合掌造り集落を背景に記念撮影を行いました。また、その後の自由行動中では、KIT 生と JLP 生がいくつかのグループに分かれ、白川郷の集落を練り歩く姿が見受けられました。



交流イベントを楽しむ参加学生

英語でのスピーチコンテスト 「English Speech Showcase」を開催

多様なトピックについて英語でスピーチを行う英語教育課程主催の「English Speech Showcase」を、7月31日(水)に23号館基礎英語教育センターで開催しました。毎学期行われる恒例行事となって以降、今回が5回目の開催となりました。英語学習に打ち込んでいる学生や伝えたいメッセージがある学生が申し込み、今回は6人の学生が「私が伝えたいこと」というテーマでスピーチを行いました。一番優秀なスピーチに4人の英語教員の審査員が「Best Overall (最優秀)賞」を、最も強いメッセージ性のあるスピーチに「Best Message (最優秀メッセージ)賞」を、独創性があり枠にはまらないスピーチに「Outside-the-box (型破り)賞」を授与します。これら3賞に選ばれた学生には、年間を通して英語の学習活動に積極的に参加した学生に授与される「Enterprise in English Award」も与えられます。

Outside-the-box(型破り)賞に選ばれたのは、大好きな卵の魅力について熱弁した学生のスピーチでした。審査員からは「トピックがユニークでとても心が温くなるスピーチだった」と評価いただきました。

Best Overall (最優秀)賞に選ばれたのは、高校時代に家族とバングラデシュに駐在していた経験について語った学生のスピーチでした。審査員からは「異文化での生活が与えた影響や自分がマイノリティとなった経験を通して他人に共感できるようになったことなど、私自身も日本社会でのマイノリティとして共感した」と、若い時に異文化に触れることの重要性を強調し、評価をいただきました。



スピーチ終了後に記念写真に納まる教員と学生

第11回・第12回イギリス英語研修 (協定校派遣型)を実施

平成29(2017)年から本学の協定校であるレスター大学(イギリス、レスター市)で行っている英語研修を、夏期プログラム(第11回)が2024年8月3日(土)~25日(日)の期間に、春期プログラム(第12回)が令和7(2025)年1月31日(金)~3月2日(日)の期間に開講され、夏期には3人の学生が、春期には4人の学生がそれぞれ参加しました。

本研修を修了した学部生には、英語教育課程の授業科目「インテンシブイングリッシュ」2単位を認定し、また対象者には「KIT オナーズプログラム」の自己成長ポイント/持続的自己成長のための活動ポイントを付与しました。また本研修参加学生に対して、本学園同窓会こぼし会より学生国際交流支援金を支給しました。

第11回の研修では、レスター大学附属英語学校 English Language Teaching Unit(以下:ELTU)で英語学習に励みました。

ELTUでは下記3つのプログラムが開講され、参加学生はその中から自分の語学力や興味に合ったものを選択しました。どのプログラムも英国の歴史や文化を学ぶことができますが、各プログラムの特徴は下記の通りです。

Leicester Discovery

課外活動に、より重点が置かれています。

English for Humanities

文学的要素が高い授業内容を行います。

English for Business

ビジネス関連の幅広いテーマを取り上げます。



プログラムに参加した学生(第11回)

特に、「English for Business」は今回初めて開講されるプログラムであり、ビジネス専攻またはビジネスに興味のある学生が対象であり、本学からは1人の学生が参加しました。

第12回の研修では、ELTU主催の English and British Culture Programme (EBCP) に参加しました。学生は当プログラムで日常英会話だけでなく、英語でのプレゼンテーションスキルを磨く講義なども受講し、アカデミック英語についての学びを深めました。また、ロンドンやオックスフォードへ赴く課外活動が用意されており、学生たちは現地での異文化体験を通して、食・スポーツ・文学・歴史といった英国文化を肌で感じることができました。



レスター大学の先生と写真に納まる学生(第12回)

海外協定校 2 校との協定書、覚書を更新 Lanka Nippon BizTech Institute、 École De Technologie Supérieure

本学の海外協定校であるスリランカの Lanka Nippon BizTech Institute (以下:LNBTI) との協定書、及び、カナダの École De Technologie Supérieure (以下:ETS) との覚書をそれぞれ更新しました。

LNBTI は短期大学であり、本学への編入学生の斡旋等で連携してきました。令和 4 (2022) 年 6 月に LNBTI が 4 年制に移行したことを受け、今後は本学大学院への進学者の斡旋に向けた連携に切り替える調整を行い、令和 6 (2024) 年 7 月付として、短期大学から大学への大学名の変更に伴う協定の更新を行いました。

LNBTI との交流

南アジアでは初めての現地政府により承認され、平成 28 (2016) 年に開学した日系の私立高等教育機関です。開学当初は短期大学でしたが、令和 4 年 6 月に 4 年制大学として承認されました。同大の親会社である株式会社メタテクノ(神奈川県)が組込ソフトウェア開発に強みをもっていることから、特に IoT やロボティクスといった分野の他、日本の品質マネジメントについても力を入れています。また、IT エンジニアとして日本で活躍できる人材を育成するというコンセプトから、IT 分野の専門知識だけでなく日本語と日本のビジネス習慣なども身に付けられるカリキュラムが設計されており、高度な IT ナレッジの修得のほか、日本語や日本文化を学ぶことができる高等教育機関として、スリランカ国内で注目を集めています。

本学と LNBTI 両校間の学術連携のほか、LNBTI における 3 年間の教育課程(日本では短期大学扱い)を卒業する学生の進学先の一つとして工学部情報工学科における学生の編入学を目指してきました。コロナ禍など想定外の困難もありましたが、令和 6 (2024) 年 3 月に LNBTI を卒業した 3 人の学生が工学部情報工学科 3 年次に初めて編入学しました。3 名共に真摯に学修に取り組んでいて、情報工学科の関係教員や日本語教育を提供いただいている教員の手厚い指導を受け成長を続けています。今後は本学大学院への進学者の獲得を目指し継続的に連携します。

ETS と締結している覚書では、5 年間の契約期日を迎えるにあたり、令和 6 年 9 月付として、新たな 5 年間の覚書として更新を行いました。

ETS との交流

州立の大学として昭和 49 (1974) 年に設立され、ケベック大学の傘下であり、ラボセッションと実習を多く取り入れ、応用工学と技術を専門とし実用的かつ革新的なアプローチでエンジニア及び研究者を養成する大学です。カナダにおける工学部、または工学系大学の上位にランキングされています。ETS はケベック州のエンジニア育成に貢献していて、工学の学士号取得数はカナダで 2 番目にランクしました。経済産業界において様々な規模の企業と独自の協力関係を結んでいて、特に企業のための研究活動を共同で行うことでケベック州の他の大学より際立っています。大学院生には工学の複数の分野で修士号と博士号を提供するとともに、大学院専門分野のための学位や、社会人教育のための学位を提供しています。

本学では、令和元 (2019) 年から研究連携に基づく学生の交換留学やリサーチインターンシップのレベルでの交流から開始しました。ETS の学生 1 人を航空システム工学科の研究生として受け入れた実績はありますが、初めの 5 年間のほとんどはコロナ禍もあり、具体的な交流を実施できませんでした。今後学生の派遣・受入を目指しています。現在も航空システム工学科にて研究室レベルでの共同研究がなされていて、互いの学生の派遣についても相談がなされています。

覚書の締結は、学生の交流、共同研究、その他の学術協力など、さまざまな面で両大学の関係を強化することを目的としており、互いの教育と研究の質を向上させ、異文化理解を促進することが期待されています。

越日工業大学で PD イノベーションを視察

提携校である越日工業大学(ベトナム、以下：VJIT)で、8月4日(日)から3日間、高大接続に関する連携協定校である京都工学院高校のSSHベトナム研修が実施されました。今回のプログラムを担当するVJITのNGUYEN XUAN HUNG氏は、かつて本学の教員として基礎英語教育課程と基礎実技教育課程に在籍し、プロジェクトデザインを担当していました。帰国後にプロジェクトデザイン教育をVJITに広めた縁もあり、今回の研修が実現しました。また、研修内容は本学のPD教育をVJITがカスタマイズした科目「PDイノベーション」を基にしている、本学プロジェクトデザイン基礎教育課程から金井 亮教授、西田義人講師、坂井仁美講師の3人が、実施されている研修の視察を行いました。

8月4日(日)のセレモニーから始まり、8月6日(火)までPDイノベーションを視察、8月7日(水)にはVJITと同じくホーチミン市工業大学(ベトナム、以下：HUTECH)に属するベトナム経済金融大学(ベトナム、以下：UEF)を訪問し、意見交換を行いました。

今回の研修を受講した学生、生徒は京都工学院高校から9人、VJITから5人、UEFから6人が参加し、PDイノベーションでは3校混成による1チーム5人のグループ活動となりました。また、3校共に通常講義は母国語で実施されますが、この研修は全て英語で実施されることもあり、UEFから各チーム1人の教員が専属ファシリテータとして参加しました。

1日目は、現状調査やニーズ分析など、本学のPD教育を基にした研修が行われました。課題シートなどは高校生向きにアレンジされており、随所に工夫が感じられました。また、海外研修ならではの要素になりますが、実際にVJIT、UEFの学生と共に現地調査に赴き、インタビューを実施するなど、社会を意識することが必要となる内容となっていました。今回のメインテーマはSocial Innovation Projectと題し、VJIT正門前の屋台群に伴う課題を扱うため、異国の文化を体験しながら課題に取り組む良い体験となりました。また、PDイノベーションにはSRIの要素も取り入れられ、検討したアイデアのブラッシュアップのフェーズとして、SRIの付加価値を向上させる活動であるEXPERT TALKが組み込まれて

いました。今回の研修では対象を教員とし、VJITとUEFの教員だけでなく、視察した本学の教員も加わりました。

2日目は、提案したアイデアをポスターにまとめ、口頭発表を行いました。ポスターは手描きで作成したため、予定されていたより少々時間が掛かったものの、各チーム共に完成させ、日本とベトナムの学生・生徒が協力して口頭発表を行うことができました。

3日目は、UEFで実際に開講されているPD科目を見学し、VJIT、UEF、本学の教員で意見交換を行いました。ここではPDのプロセスを学び、アイデアを重視する一方で、社会実装が困難であることや生成系AIへどのように対応するかなどが課題として挙げられました。また、PDイノベーションの科目設計の背景や、新たに開講されたPD科目の紹介など、互いに有意義なディスカッションを行うことができました。



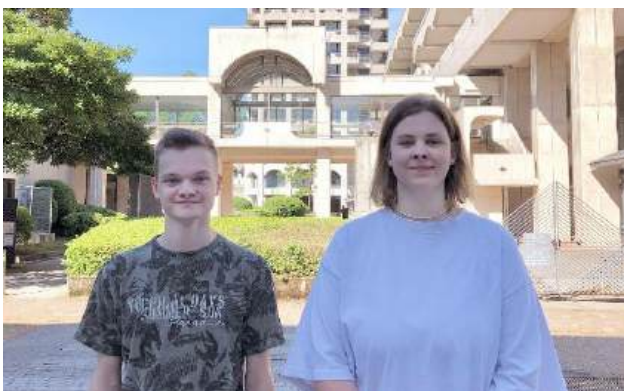
意見交換後に笑顔で写真に納まる KIT、VJIT、UEF の教員

ドイツ協定校 Hamm-Lippstadt University of Applied Sciences から 外国人インターンシップ生 2 人を受入

本学(以下:KIT)は、協定校であるドイツの Hamm-Lippstadt University of Applied Sciences(以下:HSHL)との交換留学プログラムとして、HSHL の学生を外国人インターンシップ生(以下、留学生)として1学期間研究室で受け入れるプログラムを実施しています。

プログラムの2年目に入り、令和6(2024)年度後学期には、2人の留学生をメディア情報学科の出原立子研究室で受け入れ、研究室活動や本学の学生(以下、KIT生)との交流を開始しています。初めの1週間は、学外で行われた調査やイベントにも参加したり、金澤月見光路のコンテンツ制作に一部参加したりと、充実した環境で意欲的な活動を開始することができました。1学期間の限られた期間ではありますが、HSHLの学生の学びと成長を期待すると同時に、研究室の更なる活性化や、共に学び活動するKIT生にとって有意義な経験に繋がることを願っています。

本交換留学はKITとHSHL間の協定によるもので、KIT生はHSHLにおける専門科目(英語対応可能な分野はまだ限定的)を1学期間履修することが可能です。HSHLの学生の受け入れにあたっては、学生の専門分野や興味に基づき、都度対象となる研究室の教員とマッチングをはかり調整を行っています。



学内で記念写真に納まる留学生

また、国際交流を目的として「ドイツ留学生との交流会」と「HSHL サマースクール 2024 帰国報告会」が10月30日(水)に合同開催されました。上記出原研究室の留学生と、本年7月に16日間に亘り開催されたHSHL サマープログラム2024に

参加したKIT生1人による発表が行われました。イベントにはKIT生20人以上が参加し、発表前のアイスブレイカーでは、留学生との交流を楽しむ光景が見受けられました。

ドイツ留学生との交流会

まず初めに留学生とKIT生の緊張をほぐし、親しみやすい雰囲気を作るため、アイスブレイカーが行われました。これは、学生が当日配布されたリストをもとに、該当する人物を会場内で探す形式のアクティビティです。リストには交流のきっかけとなる質問が記載されており、学生は相手と質問する中で自然な会話を楽しんでいました。

次に、2人の留学生によるドイツ文化やHSHLの大学紹介が行われました。発表からは現地の食事、祝日、歴史的建造物といったその国の豊かな地域性や、文化の影響が色濃く反映されていることが伺えました。また、あるドイツの街並みに日本の人気アニメが多大な影響を受けており、日本とドイツの意外な関係性に学生たちは驚いた様子でした。他にも、留学生からKITとHSHL間で行われている交換留学プログラムについての説明がありました。現在、2人はメディア情報学科の出原研究室で積極的に研究活動を行っており、金澤月見光路をはじめとする様々なプロジェクトに参加し、有意義な留学生活を送っていることを話しました。



KIT生の前で文化紹介をする留学生

HSHL サマースクール 2024 帰国報告会

令和6年度のHSHL サマースクール The Business of German Engineeringに参加した学生が帰国報告を行いました。本プログラムで参加学生は、実践に即した工学分野の講義や中小企業への訪問を通し、高い技能を持った職人の技に触れることで今日の技術発展をより深く学ぶ

ことができました。参加学生からは、本学の交換留学制度を利用して令和4(2022)年度に英国レスター大学で6カ月間語学を学んだ経験を十分に発揮し、様々な国から参加する学生と活発な議論を行い、国によって必要とされる技術や価値観の違いなどを知り、知見が広がったと報告がありました。



帰国報告をする参加学生

発表後は、ドイツの国や文化に関する質疑応答が行われました。学生からの「簡単なドイツ語を教えてほしい」という質問に対して答えた際、日本語にはない発音があり、戸惑いながらも発音する学生の姿が印象的でした。閉会後も、留学生とKIT生が自由に話し合う場面が多く見られ、今後も継続してこのようなイベントを企画し、共通体験を通じた交流の場を提供していきます。

タイ文化を広く学び体験するプログラム「TNI サマープログラム 2024」を開催

タイのバンコク市に位置する泰日工業大学 Thai-Nichi Institute of Technology(以下：TNI)とは、平成22(2010)年に協定を締結して以来、学生交換を主とした交流を続けています。本プログラムは、TNIが協定を結ぶ複数の日本の大学から学生を募り、約10日間に亘り現地学生との交流をはじめ体験学習を通してタイの文化や歴史に触れることができるものです。令和6(2024)年度は、8月26日(月)から9月3日(火)の9日間に亘って開催され、本学からは学生1人が参加しました。



研修の一環で訪れた寺院の前で写真に納まる参加学生

プログラム終了後及び帰国後には、本学園同窓会こぶし会より学生国際交流支援金として参加学生に経費の約3割に相当するご支援をいただきました。また「オナーズプログラム」持続的自己成長のための活動ポイント1ポイントが付与されました。

参加学生は当初より高い目的意識をもって臨み、プログラムを通して様々な活動に取り組みました。入門タイ語の学習にはじまり、現在までのタイと日本の両国の友好と歴史を学び、TNI学生が日本語に取り組む授業にも参加しました。また、マングローブの植林活動を通して環境問題への理解を深め、その他エメラルド寺院・ワットポーへの訪問やタイ伝統衣装の着付けなど様々な体験を通じてタイ文化を広く学びました。

TNI サマープログラムは夏休みに開催される短期間のプログラムですが、多様な文化体験を通して学生の多岐に亘る興味・関心が深まります。また、TNI 学生のバディや日本の他大学からの参加学生との交流もできることから、幅広い人脈を得ることで、学生の価値観や視野を広げることができる機会となっています。

イギリスの協定校 University of Leicester から 2 人が来学

University of Leicester(イギリス、以下: UoL)から2人が9月30日(月)に来学し、同大と実施している交換留学並びに英語研修プログラムに関する打ち合わせを行いました。

UoL とは、令和元(2019)年に学生交換に関する協定を締結して以来、活発な学生交換を継続しています。夏と春の3～4週間のイギリス英語研修や語学(あるいは要件を満たせば専門)を6カ月学ぶことができる交換プログラムを実施しています。一方、受け入れでは、毎年夏に6週間開催する「日本語教育プログラム(Japanese Language Program、以下: JLP)や1学期間を超えて化学分野を専門に学ぶ学生を受け入れるプログラムなど、多様なプログラムを展開しています。

今回の訪問では、協定の更新に際し、今後の手続の簡略化を見据え、語学と専門に分かれている協定書の統合化や、受け入れ・派遣人数の均衡を目指すための認識を再確認しました。また、令和7(2025)年度から既存のJLP(6週間)に加え、同大学の日本語初心者のみを対象にした4週間のJLPを立ち上げる計画をしており、当該プログラムについても詳細なすり合わせをすることができました。今後のスピーディーな展開が期待できる大変有益な機会となりました。

その他、次期開催のイギリス英語研修に関する打ち合わせも行い、プログラム概要の共有や今後の広報活動について話し合いました。今春開講のプログラムもこれまで同様に、コミュニケーション英語のスキルアップを目指しながら、フィールドトリップ等の課外活動を通して英国文化も学ぶことができるという充実した研修内容となっています。これまでの研修に参加した学生の満足度も非常に高く、レスター大学の同年代の学生と語学や文化面での交流ができることから、今後もより多くの学生に向けて、本プログラムの周知に取り組んでいきます。

また、UoL への6カ月の留学の渡英を1週間後に控えた学生2人が昼食に同席し、レスターでの生活を始めるにあたって学業や現地での生活に関する様々な質問をしました。「買い物はどこでできる?」「寝具はある?」「到着日(日曜日)の緊急連絡先は?」など、渡航を直前に控えている不安について、レスター大学の現地ス

タッフから直接アドバイスをもらう機会を得られたことは非常に有意義であったようです。

今後も両大学の学生間交流の促進を行うことは勿論のこと、教職員間での連携を密に行うことで、研修期間前後のサポート体制の充実や学生ニーズを把握したうえでのプログラムの提供など、留学プログラム全体の質の向上を目指していきます。



渡英を控えた学生や留学支援課職員と写真に納まるUoL担当者

シンガポール理工学院との交流 「第 32 回マイルプログラム」を開催

第 32 回マイルプログラムが、令和 6 (2024) 年 12 月 17 日(火)から 12 月 23 日(月)の 6 泊 7 日の日程で開催されました。

MILE (Mobile Intensive Learning Experience) Programme (以下：マイルプログラム)は、平成元 (1989) 年から始まったシンガポール理工学院との交流プログラムで、今回で 32 回目を迎えました。国際高等専門学校 (以下、国際高専) の前身の金沢工業高等専門学校では、修学旅行でシンガポール理工学院を訪問する代わりに、シンガポールからの学生をホームステイで受け入れることでお互いの親睦を深めていた歴史があります。コロナ禍で交流ができなかった時期もありましたが、昨年度から再開され、今年度も 10 人の学生及び 2 人の引率者が来校しました。



白川郷で記念写真に納まるシンガポール理工学院の学生たち

前半は KIT 国際交流会館で宿泊しながら、主に本学の学生と交流を深め、後半は白山麓キャンパスに移動し、国際高専の学生と生活を共にしました。主な活動内容は、以下の通りです。

12 月 17 日(火)：泉屋理事長・大澤学長・鹿田校長表敬訪問

益谷記念室で泉屋吉郎理事長及び大澤 敏学長にあいさつの後、引率者 Mr. Wong Jian Chang から泉屋理事長が平成 19 (2007) 年にシンガポール理工学院で植樹した木が立派に成長している写真をご提示いただき、両校の親睦の歴史を改めて感じる機会となりました。国際高専校長を訪問の際には、鹿田正昭校長からシンガポールの学生に対して雪に関する質問がされました。今までに雪を見たことがない学生がほとんどで、プログラム中に経験できることを切望していま

した。

12 月 18 日(水)：金沢市内観光及び文化体験

兼六園を散策し、日本の伝統的な庭園で冬ならではの美しさを堪能しました。その後、時雨亭で抹茶を体験し、古来の建物の中で抹茶と和菓子を嗜みながら、風光明媚な庭園を味わいました。お昼を挟んで石川県観光物産館に移動し、加賀八幡起き上がり手描き体験を行いました。各々が好きなキャラクターや文字を絵付けし、オリジナルの記念人形を作成しました。個性溢れる逸品が続出し、良い記念品になったとの声も聞こえてきました。

12 月 19 日(木)：チャレンジラボ体験・日本語教室及び日本食体験

チャレンジラボで VR や 3D プリンターなどの最新技術を体験し、シンガポールの学生は革新的な技術に触れ、多くの質問をしていました。本学の学生スタッフも英語で説明を行い、国際的な視野を広げる貴重な機会となりました。学生たちは異なる文化や技術に対する理解を深め、将来のグローバルな活躍に向けた貴重な経験を積むことができました。

また、国際高専で日本語科目を担当する筒井昌子講師の指導のもと、日本語での自己紹介や数字の教え方、名前を日本語で書く授業を体験しました。後半は書道を行い、書き方の基礎から「永」の字を書き、さらに様々な文字にも挑戦しました。中国系の学生は漢字に慣れているため、留めや払いまで巧みにこなしていました。

夕方には、本学の学生と共にグループで日本食を作り、共に食事をしました。今回はおにぎり、焼き鳥、きんぴらごぼう、キノコのマカロニサラダ、みそ汁を調理しました。言語の壁を越えて協力し合い、完成した料理は一層美味しく感じられ、素晴らしい交流の場となりました。

12 月 20 日(金)：白川郷へのフィールドトリップ

日本の文化や歴史を肌で感じることを目的として、世界遺産である白川郷へ訪問し、伝統のある合掌造りの建物を見学しました。幸いにも天候に恵まれ、現地に到着後は荻町城跡展望台まで登り、雪景色の眺望を眼下にしながら、タイムスリップしたような感覚を味わいました。白銀の世界が広がる中、シンガポールの学生は初めての雪に触れ、幼い子どものようにはしゃ

ぐ姿が微笑ましく映りました。

12月21日(土)：金沢市内へのグループ観光

国際高専の学生とグループを作り、金沢市内へ繰り出し、英語での会話を楽しみながら、ショッピングや食事を満喫しました。シンガポールの学生は日本の学生の嗜好を知り、一緒に体験することで親睦を深めました。異文化交流を通じて新たな視点を得ることができ、友情を育む貴重な時間になりました。

12月22日(日)：ヒノキ細工体験

石川県の伝統工芸品であるヒノキ細工のコースター作りを体験しました。講師の指導のもと、国際高専の学生と共に日本語を英語に訳しながら、作品作りに取り組みました。繊細な編み方を繰り返し出来上がった作品を愛おしそうに見ている姿が印象的でした。

12月23日(月)：白山比咩神社訪問

帰路に就く前に、白山比咩神社を訪れました。境内に足を踏み入れると、白銀の中、静寂に包まれた神社の雰囲気が一層神秘的に感じられました。シンガポールの学生は日本独特の参拝の仕方で、各々の将来や家族の幸せを祈っていました。中には絵馬に家族円満をお願いする学生も見られました。



自分で作った日本食を楽しむ学生たち

経営情報学科とスィーパトゥム大学 (タイ王国)の学生がオンラインで交流

経営情報学科の学生とタイ王国のスィーパトゥム大学(以下：SPU)の日本語ビジネスコミュニケーション学科の学生が、11月29日(金)午後3時から午後5時までオンラインで交流しました。

経営情報学科からは武市祥司研究室、徳永雄一研究室、齋藤正史研究室、平本督太郎研究室、石原正彦研究室、狩野剛研究室から大学院生3人、学部4年次4人、学部3年次1人の計8人が参加し、日本の社会問題にも触れつつ、それぞれが取り組むテーマについて発表しました。また、SPUからは3年生の5人が参加し、同国の教育事情について日本語でのプレゼンテーションがあり「寺院学校」のような制度的な仕組みや「教育格差」について紹介されました。学生たちは日本とタイの仕組みの違いや共通する面について互いの理解を深めました。

今回の交流会は、コーオペ教育等で連携しているWACE(World Association for Co-operative and Work Integrated Education)の繋がりから、泉屋利吉財務部次長を通じてSPU側から学生交流の提案があり、武市教授と徳永教授が中心となって実施されました。

SPUの学生は、日本語でのコミュニケーションに苦勞する場面もありましたが、経営情報学科の学生たちの積極的な取り組みと親しみ深い学生交流で、日本や日本語、そして経営情報学科に対する興味も深まったと確信しています。グループディスカッションなどでも、お互いに一生懸命理解し合おうとし、交流する学生たちの姿が印象的でした。



スィーパトゥム大学の学生と
オンラインで交流する経営情報学科の学生たち

IV. 学習環境の整備

令和6(2024)年度は2つの演習室を統合する大規模な情報演習環境の整備を実施しました。また、ペットボトル等の使い捨て、SDGs や環境への問題意識の醸成、日頃の水分補給や熱中症対策のために学内2か所にウォーターサーバーを設置するなど学生の健康促進のため学内環境の整備を実施しました。

CAD 演習室とメディア系演習室を統合した新演習室稼働

本学では、6号館141室のメディア系演習室と24号館501室、507室のCAD演習室に導入していたハードウェアの保守期限が間近に迫っていることから、令和6(2024)年度に演習室システム更新の準備を進めていました。

更新にあたり重要視したのは、更なる学生サービスの向上と、演習室の効率的な運用ができるシステムの導入です。これらを同時に実現するため、仮想化技術を採用し、メディア系演習室とCAD演習室を統合して1つの演習室システムとしました。24号館501室と507室の2教室を統合仮想演習室とし、席数は教務課と相談の上、501室は110人、507室は100人としました。

統合仮想演習室の構築については、エフサステクノロジーズ㈱と㈱金沢総合研究所及び情報処理サービスセンターの3者でプロジェクトを立ち上げ、令和6年12月からスタートしました。さまざまな課題を解決しながら構築を進め、令和7(2025)年度の授業に間に合わせる事ができました。

従来からの演習室と大きく異なる点は仮想化技術を用いていることですが、仮想化技術を用いることで以下のようなサービスを今後提供できると考えています。



統合仮想演習室の授業風景

①場所の制約がなく演習室の環境を利用できる

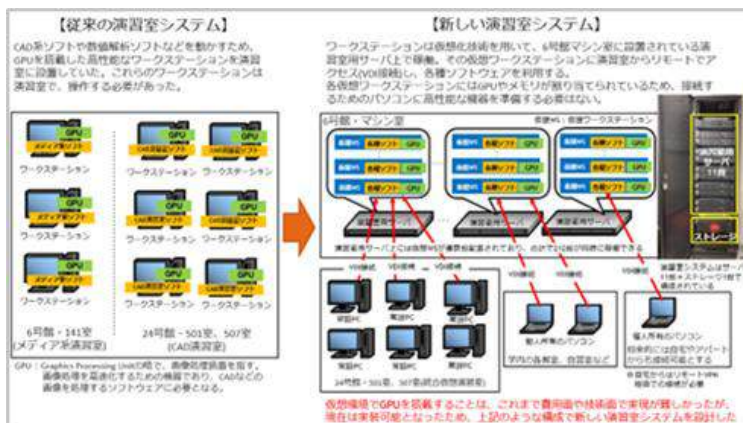
演習室以外の教室からでも自分のPCと学内ネットワークに接続できる環境があれば演習室システムの高性能なワークステーションを利用できるようになります。将来的には自宅やアパートからでも利用可能な環境を提供したいと考えています。

②演習室システムの利用時間を柔軟に設定できる

これまでの演習室ではセキュリティや建物の入館の制限で、一定時間で退出する必要があり、課題の締め切りなどで遅くまで演習室を利用したくてもできませんでした。統合仮想演習室では、演習室にいなくても仮想ワークステーションが利用できるため、建物の入館の制限に縛られることなく利用できるようになります。

③仮想演習室のリソースを集約し、高性能なワークステーション環境を提供できる

夏休み中など授業のない期間に限られますが、演習室の仮想ワークステーションのリソースを集約して、1台の高性能なワークステーションを作成し、それを期間限定で利用することも可能です。



新旧演習室システムのイメージ

今回の統合仮想演習室のような、仮想ワークステーションが同時に200台以上稼働できる大規模な演習室システムを導入している大学は全国でも少なく、課外活動や研究で大量のリソースを必要とする学生にとって、利便性の高い環境を整備できたと考えています。

「学ステ通信」がスタートひそかに人気 ひとこと掲示板

学生ステーションでは、学生スタッフが主体となって、学生をサポートするための様々な活動をしています。その一つが、23号館1階の廊下に設置されている「ひとこと掲示板」。コロナ禍で人との交流ができなくなったとき、学生が一人で不安を抱えこまないようにと企画し設置しました。

「ひとことシート」に書き込まれるのは、恋愛相談やアパートの騒音問題、時には「右手の親指とお喋りできるようになりたい」という禅問答のようなものまであります。それら一つひとつに、学生スタッフが丁寧に回答し、投稿者からの信頼を集めています。大学の見学などにお越しになった方々にご紹介しても、大変好評をいただいています。

今年の4月は、新入生からの不安が多く書き込まれました。「ちゃんと単位が取れるか？」

「新しい友達ができるか？」学生ステーションでは、投稿者に「寄り添う」姿勢を大切に回答しています。また、ユーモアのセンスを試される質問にも全力で返すことで、掲示板を気軽に投稿できる、楽しい交流の場にしようとしています。大勢の参加者が集まるイベントのような華やかさはありませんが、学生たちが本音で交流できる「ひとこと掲示板」。学生ステーションでは、引き続き、学生による学生のためのサポートに力を入れていきます。



「ひとことシート」を掲示する学生スタッフ

自動販売機の飲料水値引きを期間限定で 提供・ウォーターサーバーの導入

◇自動販売機 飲料水値引き

熱中症対策として令和5(2023)年度に実施した自動販売機 飲料水値引きを、令和6(2024)年度も8月1日(木)～10月31日(木)の期間、下記の自動販売機で500mlペットボトルの「水」「麦茶」「スポーツドリンク」を対象として、特別価格の100円で販売しました。この取組について学生健康保険互助会が費用を一部負担、暑さが増す厳しい時期に学生が健康で学び続けられるよう、適切な水分補給を促します。

<実施場所>

(扇が丘キャンパス)

- ・7号館1階自習室横
- ・11号館テニスコート横
- ・15号館1階(南校地駐車場側)
- ・20号館体育館
- ・41号館夢考房

(八束穂リサーチキャンパス)

- ・62号館レストラン/売店ENERGY

◇ウォーターサーバーの導入

ペットボトル等の使い捨て、SDGsや環境への問題意識の醸成、日頃の水分補給や熱中症対策のために、下記2ヵ所に8月30日(金)から「ウォーターサーバー」を扇が丘キャンパスに設置しました。利用者は水筒などマイボトルを持参し、冷水、温水の給水が行えます。

「ペットボトル飲料を買う機会が減り、経済的に助かっている。学内に設置されてとてもうれしい」などの声があがりました。

休み時間にはマイボトルを手にウォーターサーバー付近に集まって談笑する学生・教職員の姿が、新たな日常の光景になりそうです。

<設置箇所>

- ・23号館1階 学生ステーション前
- ・12号館1階 SDGs推進センター内



ウォーターサーバーを利用する学生

「朝食を食べて、やる気と元気UP」 100円朝食を定期で実施

◇拯友会による取り組み

拯友会(父母等で組織する会)とガクシヨクが共同企画する『朝食を食べて、やる気と元気UP』100円朝食を5月20日(月)から5月24日(金)までの5日間実施しました。

この企画は、授業の課題やレポートなどが多くなる前学期5週から6週目：5月20日(月)から5月24日(金)にかけて、扇が丘キャンパスの21号館食堂ラテラで、通常は300円で提供される朝食を拯友会助成にて学生にはワンコイン100円で提供するものです。

普段、朝食を食べない学生も多いことから「朝食を食べて規則正しく、健康的に」また、朝食を食べて「やる気と元気UP」をスローガンに期間中は午前8時から午前10時までの時間に提供しました。通常では、一日約30食程度とのことであるが、期間中は一日300人超の利用があり、5日間で1,368人に100円朝食を提供しました。

また、後学期も授業の課題やレポートなどが多くなる授業週6週から7週目の11月11日(月)から11月15日(金)まで100円朝食を実施し、5日間で1,559人に100円朝食を提供しました。

学生のみなさんには、朝食を食べて健康で元気に、課題や自学自習に取り組んでもらえればと考えています。

拯友会では、キャンパス内の賑わい創出や楽しいキャンパス・学生生活を送ることができるよう、また、学生の健康的な学生生活の支援や充実に取り組むたいと考えています。



朝食を食べる学生で賑わう食堂

◇学生健康保険互助会による取り組み

学期末に向けて学生の課題やレポートなどが多くなる前学期の12週から13週目：7月8日(月)～11日(木)にかけて、食堂ラテラで、午前8時～10時の時間帯に朝食を通常300円のところ100円で提供する「100円朝食」を実施しました。

学生に「しっかり朝食」をとって、課題や自学自習に取り組んでもらうことを目的に、本学学生健康保険互助会が企画し、費用を一部負担しました。

利用した学生からは「普段は起床が遅く、おにぎり1個のみの軽く急いだ朝食となっていたが、この企画のおかげで友人達と楽しく、しっかり朝食をとることができている」などの感想がありました。4日間で1,056人に100円朝食を提供しました。

また、後学期も学期開始に合わせて、9月30日(月)から10月4日(金)の期間中「100円朝食」を実施しました。

100円朝食は、しっかり朝食を摂って、正しい生活リズムを作り、学修意欲の持続・向上を目的として学生健康保険互助会が企画し、費用を一部負担しました。

物価高が続く中で、学生の経済的な負担の軽減につなげると共に、これまで通学時間が1時間以上かかる遠方に住んでいて、自宅で朝食を食べることができなかった学生が、登校後に朝食を食べる姿もみられました。5日間で1,294人に100円朝食を提供しました。



100円朝食のポスター

キッチンカーフェスや拯友会が学生応援企画を開催

大学父母等で組織する会(以下:拯友会)は、キャンパス内の賑わいを創出すると共に、学生間のコミュニケーションや交流を促進するため、KITサービスセンターの協力を経て「交通安全祭り&キッチンカーフェス」を10月28日(月)から10月30日(水)まで21号館前と8号館前庭で開催しました。

この企画は、交通安全に対する学生の意識向上と11月1日(金)からの道路交通法改正に伴い「自転車のスマホながら運転」「自転車の酒気帯び運転」などが罰則強化されることの周知を目的に実施するもので、学生には交通安全についてゲームなどを通して学び、考える機会に繋がりたいと考えています。

「交通安全祭り」では、自動車学校の協力を得て、教習車の展示のほか、交通安全の知識をより高めるためのクイズチャレンジや、ゲームで学ぶ交通安全、心肺蘇生体験などを準備しました。これらのクイズや体験を通じて、楽しく交通安全について学ぶと共に、参加してくれた学生には、同時開催のキッチンカーフェスで利用できるサービス券を1枚進呈しました。

キッチンカーフェスでは、様々な工夫を凝らしたキッチンカーが集合し、お店の方は学生との交流を楽しみながら飲み物やハンバーガーなどを提供して、キャンパス内に彩りと、学生が楽しく談笑する微笑ましい風景を見ることができました。



大勢の学生たちで賑わうキッチンカー

V. 社会貢献への取り組み

本学園では、地域との連携を尊重し、各自治体や地域企業の皆様との社会貢献活動や、小中高等学校や放送大学、各学会、協会等との連携活動に取り組んでいます。

包括協定を結ぶ金沢市、野々市市、白山市、小松市、加賀市、珠洲市とは、教育研究に関する連携活動を実施しています。県内他大学等との連携においては、大学コンソーシアム石川の一員として様々な活動に参画しています。また、こうした活動を通じて、Society 5.0 社会に向けた人材育成と地方創生を目指すとともに、SDGs の推進や、能登半島地震等からの復興にも貢献します。

多様なステークホルダーとの連携と社会貢献

北菱電興株式会社との包括連携協定を締結

北菱電興株式会社と本学は「産学連携による社会へと開かれた人材育成の実現」を目指した包括連携協定を令和6(2024)年5月20日(月)に締結しました。本学が地域に根差した企業と人材育成を掲げる包括的な連携協定を締結するのは初となります。

協定締結式では、本学から大澤 敏学長、山口敦史副学長、鈴木亮一学長補佐、河合宏之教授他、関係者が出席し、北菱電興からは小倉一郎代表取締役社長、小倉憲二専務取締役、端野義明常務取締役、村本一生常務取締役、酒元一幸取締役が出席しました。小倉社長と大澤学長のあいさつに続き、両名によって協定書に署名がなされ、その後北菱電興の酒元取締役及び本学の鈴木学長補佐がこれまでの両者による取り組みや今後の展望について説明しました。



協定書を手に写真に納まる
大澤学長(左)と小倉社長(右)

Society5.0 に向けた絶対的な人手不足や人材不足が喫緊の課題として指摘される中、企業内や大学内などの組織内での人材育成をさらに発展させ、これからは自組織内に留まらない地域社会全体でのより効果的な人材育成が求められています。

そこで、北菱電興自身がロールモデルとなり、本学との取り組みで得られた成果を他の企業を含む社会へと広げることで、自社にとどまらない“知の往還”とオープン型の”開かれた人材育成”の実現を目指します。

他方、本学においては、これからの成長分野である DX・GX・SX を牽引するイノベーション人材の育成を産学連携による社会実装型教育研究により実現していくことができます。また、本学の強みである、学生が自身の夢をキャンパスライフの中で見つけ実現させるための様々な産学連携の取組みを活かし、将来的には地域社会における将来を担う人材育成の「ハブ」になることを見据え、北菱電興と総力を合わせて取り組みます。

韓国大学総長代表団が本学園に来訪し 意見交換 ～韓国の地方創生に向けて 日本の好事例として高く評価～

韓国の大学総長らの代表団が、令和7(2025)年1月15日(水)から16日(木)にかけて、本学園の実績を評価した文部科学省からの紹介を通じ、「Japan RISE Business Best Practices Benchmarking President 's Training」プログラムの一環として本学園を来訪し、関係者と意見交換を行いました。

韓国では、少子高齢化、都会への人口や産業の集中化が深刻な問題となっています。そこで韓国の教育部(日本の文部科学省に相当)は「RISE」という地方創生を目指した国家事業を今後計画しており、韓国内の主要大学の総長が日本の事例を学ぶため、今回の日本への視察が企画されました。

意見交換では、本学側から建学の理念に基づく本学の哲学と独自の取り組みについて紹介し、学生の成長に関する定量化や評価尺度、地域産業との連携、若者の地方への定着率などに関する質疑応答が交わされました。また現地視察では、地域企業との連携による地元の雇用創出や社会実装プロジェクトの事例が紹介され、視察団のキム・ヨンド会長からは、『地方に新たな活力を吹き込む』という意味の『再生』を実現するための様々なプロジェクトに感銘を受けたとの言葉をいただき、日本における好事例として本学園の存在を十分に伝えることができました。



結びのあいさつを述べるキム・ヨンド会長

令和5年度も年間17回の学内献血を実施し、年間779人の学生石川県赤十字血液センターから感謝状

金沢工業大学（以下、本学）学友会では、昭和48(1973)年から毎年石川県赤十字血液センターと協力し学内献血を実施しています。平成15(2003)年度からは「学内献血年間1,000人達成」の協力目標を掲げ、令和元(2019)年度まで17年連続で目標を達成しました。

令和5年度も年間17回の学内献血を実施し、年間779人の学生・教職員が献血しました。また石川県内の献血ルームに学生や教職員106人が来訪し、石川県の輸血治療を支えました。

その取り組みが石川県赤十字血液センターから評価され、中尾眞二所長から感謝状が贈呈されました。



表彰状と記念品を持ち記念写真に納まる学友会の元田さん（前列左から2番目）と村上さん（前列左端）

贈呈式では、中尾所長から「献血推進活動50年と長きにわたる金沢工業大学学友会様のご尽力と年間17回の学内献血を実施させていただいたこと、各献血ルームにも積極的にご協力いただいたことなど、改めて感謝を申し上げます」と、感謝の言葉をいただきました。

地域の特徴を理解する「金沢・野々市・白山探索フリープラン」を作成

本学では、金沢MaaSコンソーシアム（※）・金沢市・野々市市・白山市と連携して、学生が鉄道・バスを利用し、3市の街中を歩きながら地域の特徴を理解する「金沢・野々市・白山探索フリープラン」を作成しました。

※金沢MaaSコンソーシアム

令和3年、金沢市、交通事業者らを中心に、シームレスかつ自由に移動できる次世代交通サービスの実現を目指し設立されました。鉄道・バスの新たな利用手段の企画として、デジタル乗車券を活用したデジタル交通サービス「のりまっし金沢」を運営しています。

本コンソーシアムが運営する「のりまっし金沢」では、北陸鉄道の石川線・バス等乗継円滑化実験として、令和5(2023)年度より「石川線-金沢まちなかマル得きっぷ」、「石川線・IR西金半額きっぷ」を販売しています。本学では、本実験への協力と合わせて、県外出身者が7割を占める本学の学生が3市の地域の特徴を理解するきっかけになるよう「金沢工業大学 金沢・野々市・白山探索フリープラン」を作成しました。

本プランの活用により、鉄道・バスを利用して各市の観光スポットを自由に探索し、地域の特徴を肌で感じながら、地域について理解を深めることが期待できます。



株式会社ハチバンの社員と本学学生によるアイデアソンを開催

本学のフードクリエイション(ハチバンプロジェクト)と株式会社ハチバンとの協力により6月22日(土)に、「10年後(2034年)株式会社ハチバンの和食部門の東南アジアFCビジネス大成功の物語を創出せよ!」というテーマでアイデアソンを開催しました。

今回のアイデアソンには36人のプロジェクト参加学生とハチバンの令和6(2024)年度新入社員7人が参加し、テーマにそって東南アジアのフランチャイズビジネスについてのアイデアを出し合いました。

アイデアソンでは、まずASEAN10カ国の中で興味のある国を3つ深掘りし、その後各人が国を1つ選択して国ごとにチームを編成しました。自分たちの選んだ国で「課題」を乗り越えて「理想の姿」を実現するまでの道のりをバックキャストで描き、2034年のニュース記事として発表することをゴールに議論を交わしました。アイドルなどのインフルエンサーから話題が広がるという内容や、屋台文化に合わせた弁当の販売、現地で人気の格闘技と絡めるなど様々な視点からの記事が紹介されました。



プレゼンテーションの様子

今後もハチバンとの協力体制のもと、「食」に関心を持つ学生が活躍できる場を創出します。

「金澤月見光路 2024」を開催

本学の月見光路プロジェクトが、10月11日(金)から13日(日)の3日間にわたり、金沢市広坂しいのき迎賓館で「金澤月見光路 2024」を開催しました。今年は、建築学科 川崎寧史研究室、土田義郎研究室、西村督研究室とメディア情報学科 出原立子研究室、高野佐代子研究室の学生たちに加え、下級生など総勢約120人の学生が参加しました。

平成16(2004)年から継続的に実施され親しまれてきた月見光路は、学生が学科の領域や学年を超えて連携し、金沢市中心市街地の活性化を目指すプロジェクトとして活動しています。企画から制作までの全てを学生が行い、授業で学んだことを活用しながら新しいアイデアを創出します。

今回のテーマは「星に想いをよせて」とし、造形デザインや最先端のメディアテクノロジーを楽しんでいただくと共に、能登半島地震にも想いを寄せ、来場者の方々の様々な想いを繋ぎながら一緒に会場を造ることを考えました。

新たな試みとして、始めにメンバーは五十嵐威暢アーカイブのワークショップに参加しました。ものの見方や感じたままに話すことを体験し、これからの制作活動の良いウォーミングアップとなりました。その後企画・制作を進め、合同ゼミやオープンゼミを開催するなどして研究室同士のコミュニケーションなども深め、表現したいことの実現のための試行錯誤を繰り返しながら開催を迎えました。



ライトアップされたオブジェの数々



長蛇の列となったワークショップ

開催期間中は天候に恵まれ、会場のしいのき迎賓館には多くの人が行き交い、初日は高校生の来場も多くみられました。その後、ライトアップが開始されるとオブジェが見えなくなるほどの人が集まったほか、ワークショップには開始直後から長い行列ができるなど大盛況でした。期間中は海外の方や、連携協定の調印式に参列した静岡県立掛川工業高校の先生方も来場し、幅広い方々から好評を博しました。学生自身が創り上げる社会実装型のプロジェクトの一つとしての好例となっています。

石川県内の企業社員と学生による「産学連携ワークショップ」を開催

ものづくりを担う石川県内の企業と、本学学生との産学連携ワークショップを、令和7(2025)年1月30日と31日に開催しました。

1月30日は石川樹脂工業株式会社、31日は大同工業株式会社の社員をそれぞれ迎え、ロボティクス学科の鈴木亮一教授のコーディネートのもと、各企業が有する具体的な課題に対して、企業社員と学生が率直な意見を出し合いながら活発な議論を行いました。

石川樹脂工業は、食器ブランド「ARAS」(エイラス)の企画・開発・マーケティングも手掛けつつ、サイゼリヤやスターバックスの店内用タンブラーといった日用品から、新幹線やトンネルの工業製品の製造まで行っている加賀市のものづくり企業です。ワークショップのテーマとして「地域×ものづくり×先端技術! ?未来のものづくりの可能性を考える」を掲げ、3人の社員と8人の学生が製品の制作過程について聞いた後、関連課題について幅広く話し合い、課題解決に向けた手法やアイデアについて議論しました。

大同工業は、オートバイや自動車の部品、産業機械用のローラーチェーン、福祉機器の開発に力を入れており、国内初の階段昇降機を開発したことでも知られている加賀市のものづくり企業です。ワークショップのテーマとして「Assistive Products で創る移動の笑顔無限大」を掲げ、若手社員6人、経験豊富な社員3人の計9人と10人の学生が、健常者も障がいのある方も共に活躍できる社会に向けた「移動」が抱える課題について考え、それぞれの経験や知見をもとに、独創的な意見やアイデアを出し合いました。

今回のワークショップでは、企業の社員と学生の両者とも「新しい視点や発想が得られた」「今後の活動の刺激を受けた」などの感想が聞かれ、



意見やアイデアを発表する学生ら

充実したイベントとなりました。また両社は、本学の革新複合材料研究開発センター(ICC)と石川県が中心となって進める内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」の連携先企業であり、こうしたワークショップを通じて、学生らが地域の特色ある企業を知り、自ら地域産業振興の担い手となることが期待されます。

学友会 フレッシュマン in Summer 2024 を実施

本学学友会の学生地域活動推進委員会は、学友会課外活動団体の新入生を対象に、8月1日(木)、学友会のメンバーとフレッシュマン in Summer 2024 を実施しました。本活動は奉仕活動を通して学生相互のコミュニケーションを図ると共に、自らの意識を高め自律性と協調性を得ることを目的に行われています。

今回は、学友会体育部会・文化部会・同好会・サークル、学友会の専門委員会から310人が参加し、野々市市内の保育所・認定こども園など19カ所を訪問し、清掃活動を中心に取り組みました。

主催する学生地域活動推進委員会は、開催日までに野々市市子育て支援課と連携し、雨天時の場合や熱中症対策を含めた調整を行いました。また、参加学生に対して事前にオンラインで説明会を行い、概要と作業内容のほか、開園中の作業となるため、園児の安全を考慮することと、学生自身にも事故や怪我がないように注意を促しました。

当日は快晴で気温も時間と共に上昇し、作業するには厳しい条件の中、熱中症対策として学友会から配られた飲料水で水分補給をしながら、窓ふき、エアコンフィルターの清掃、草むしりなど各施設の要望に応え、様々な作業に汗を流しました。



エアコンのフィルターを清掃する学生

また作業終了後、園児との交流を希望された施設では、園児からの歌の披露やダンボールを使った工作などの交流が行われ、各施設からは多くの感謝の言葉をいただきました。



清掃終了後に園児から歌を披露してもらう学生

能登半島地震・豪雨災害からの復興支援

自主ボランティア組織「JAN2 ボランティアチーム」による復興支援活動

令和6年能登半島地震で被災した地域の復興に向け、本学の教職課程を履修する学生らによる支援物資の運搬や中学生の集団避難施設の清掃などのボランティア活動を継続的にしています。

100人以上のメンバーによる自主ボランティア組織「JAN2 ボランティアチーム」は、「ニーズに応えることが重要」とのアドバイスのもと、珠洲市と輪島市の中学生が集団避難した「白山ろく少年自然の家」「医王山スポーツセンター」の清掃やJAいしかわと協力した生鮮食料品の提供を行いました。また、珠洲市の吉木教育長からの要望により、被災地での教育ボランティアを引き受け、珠洲市立緑が丘中学校を中心に、被災地の生徒を対象とした2泊3日の学習支援プログラムを実施しました。

珠洲市の大谷小中学校の児童生徒が立案した「大谷ガチャ」は、大谷町の魅力を伝えるために、大谷町でしか作ることのできない商品をカプセルに入れ販売し、その利益を珠洲市や大谷町の復興に貢献する取り組みです。これを工大祭にブースを設けて設置し、実際に大谷町や珠洲市の資源を使い、工大祭に訪れる多くの人たちに作ってもらう機会を設けるなど、学生自身が被災地域のニーズをくみ取り、様々な支援活動を展開しました。

仮設住宅の環境改善のためのボランティア活動を開始

令和6年能登半島地震で被災した地域の復興に向け、仮設住宅の環境改善に向けた椅子や棚の製作に関するボランティア活動を開始しています。

被災地域や1.5次避難所などでの支援活動を行っている石川県リハビリテーションセンターによると、仮設住宅は高齢者・要支援者の居住を前提としていないため、身体的負担を強いる課題が生じているとのことでした。そこで、被災された高齢者・要支援者の自立生活の再建・復興に向けて、夢考房プロジェクトに参加する学生を対象に仮設住宅・環境改善ボランティアへの参加を募集し、活動を開始しました。

第1回目は仮設住宅の浴槽に沈める踏み台を6台製作しました。製作した「浴槽内踏み台」は、被災地域の各市町の担当者がサンプルとして持ち回り、仮設住宅入居者にヒアリングし、活用されます。



踏み台製作の様子

今後も、夢考房プロジェクトの特色である「多学科・他学年によるものづくり体制」の特色を生かしながら活動を継続する予定です。

GAPPA noto (北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト)による復興支援活動

北陸三県の建築系学科のある7大学・1高専の20研究室が連携した北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト「GAPPA noto」(会長:本学建築学部 竹内申一教授)は、能登復興支援に向けて、被災地に建設された仮設住宅地における居住者の方々の安らぎのある住環境と豊かなコミュニティ形成を支援するため、令和6(2024)年5月に発足しました。

※GAPPA noto 参加大学・高専

(7大学・1高専の20研究室)

■富山県: 富山大学、富山国際大学

■石川県: 金沢大学、金沢工業大学、
金沢美術工芸大学、石川工業高等専門学校

■福井県: 福井大学、福井工業大学

11月には、輪島市三井町第一団地集会所で、仮設住宅の限られたキッチンスペースを有効に使えるようにする「まなピタ」の製作と、高齢者の方々に大学生がスマホの楽しい使い方と緊急時や復興関連情報の取得の仕方を伝授する「スマホ教室」、居住者の皆さんと楽しくお話しする「茶話会」を企画し実施しました。



「まなピタ」の設置や利用方法について
利用者に説明するボランティアスタッフ

その後も、七尾市田鶴浜地区のコミュニティセンターでの交流イベントや、珠州市蛸島町の元気の湯と蛸島町第2～4団地集会所でのワークショップの開催、能登町・上町公民館での炊き出しと収納BOX製作ワークショップを行うなど、精力的に活動を展開しています。

本学が有する教育資源等を活用した復興支援の取組

令和6年能登半島地震および9月の豪雨災害は甚大な被害をもたらしました。発災後から本学の学生・教職員による災害ボランティアへの参加のほか、本学の持つ研究・教育資源を活用して、令和6(2024)年度も様々な取組を行っています。

松林研究室では、「あきおベジタブルファームグループ」が能登町で経営する奥能登農場の復興支援ボランティアに取り組みました。能登町では被災により県内外へ避難中の農業関係者が多く、収穫が危ぶまれる夏ジャガイモの収穫と輸送を手伝いました。

出原研究室では、のとじま水族館がオープンできない間、いしかわ動物園に協力を仰ぎ、最新のMRデバイスMeta Quest 3を使って実空間に仮想イメージが映し出せるバーチャル水族館を作って応援しました。

また、包括連携協定に基づく復興支援ボランティアとして、土居研究室の有志が、被災した北菱電興株式会社のアグレッシブ・アグリイチゴの圃場(七尾市中島町)で、補修が終わったビニールハウス内イチゴ高設栽培ベンチに培養土を敷き込む作業を行いました。

8月に「学友会」と「SDGs Global Youth Innovators」のメンバーが中心となり、織田信長軍と激しい攻防を繰り広げた先人の遺徳を偲ぶ「鳥越一向一揆まつり」の開催に協力し、例年実施している1万本のキャンドルを灯す「鳥越万灯華(とりごえまんとうか)」について、今年度は「能登半島地震復興応援キャンドルプロジェクト」と銘打って実施しました。

また、継続的なボランティア活動を行っている防災・減災プロジェクト SoRA が、金沢大学の防災系サークル「ボランティアさぼーとステーション」と一緒に、輪島市の重蔵神社を中心に倒壊した建物の瓦礫の撤収や分別作業などを行いました。

今後も、本学の持つ資源を活用しながら、能登半島地震・豪雨災害からの復興支援に向けた取り組みを推進していきます。

VI. 自己点検・外部評価

本学園は、教育プログラムの品質、研究プロポーザルと成果、法人経営の透明性や安定性などについて、高等教育機関として「社会から必要とされる大学」であるために、自己点検評価を図り、第三者評価を受ける仕組みを設けています。これらは教職協働で取り組んでいます。

令和6年度外部評価委員会を開催

学外の有識者から成る外部評価委員を招き、本学の三つのポリシーを踏まえた教育研究活動全般の取組に対する評価・アドバイスを受ける外部評価委員会を3月19日(水)に開催しました。文部科学省の方針に鑑み、外部評価委員には令和5(2023)年度に引き続き、産業界、官公庁、大学及び高校、金融界から5人を選出しました。令和6(2024)年度も対面と遠隔によるハイフレックスで開催し、2人が会場である本学で、3人がオンラインで参加しました。また、学内からはKIT評価向上委員会の委員の他、大学事務局の部課長が参加しました。

委員会に先立ち、司会進行を務める谷正史大学事務局長が本委員会の趣旨を説明し、学外の有識者から直接ご意見をいただく貴重な機会であり、本学の発展において重要な会議体の一つである旨を述べました。

本委員会では、前回に受けた指摘事項に対する取組や、学長方針の下で取り組んできた令和5(2023)年度教育改革の内のカリキュラム編成、入学教育の推進及び教育DXの取り組み事例報告並びに令和7(2025)年度の学部学科改組について意見交換をしました。

はじめに、大澤敏学長が開催のあいさつをし、外部評価委員の皆様の協力に対し、感謝の意を述べました。

続いて前回に指摘を受けた事項を振り返り、変化の激しい時代に、社会課題の解決には技術者だけではなく文系志向の考え方など様々な分野を取り入れていく必要があるとの考えから、文系・理系の枠を超え、社会で知識や技術を活用することに視点を置いた社会実装型総合大学へ変わることを表号して令和7年度から学部学科を改組することを報告しました。本改組では、本学が長年培ってきたプロジェクト型教育を実践する中で、昨今の時代の変化から「情報に強い」また専門性を兼ね備えた「専門人材」を育成することを目的に、この3点に注力して大学

改革を推進する旨を報告しました。また、改組にあたり、教育目標を「自ら考え行動する技術者の育成」から「自ら考え行動する創造的探究・実践人材の育成」に改めることを示し、人間形成における主体性となる「自ら考え行動する」は堅持しつつ、ディプロマポリシーに定める能力との整合性をとった新たな教育目標を掲げ、学修者本位の教育を実践していく旨を説明しました。

次に、青木隆入試部長が人口減に伴い日本中の大学がシフトチェンジの時期にある中で、本学が取り組むKIT入学教育について、その狙い、具体的な取り組み内容及びその評価を報告しました。

続いて、Society5.0時代に必要なイノベーション力を身につけた人材育成を目標に令和5年度から取り組んでいる教育改革のうち、多様性と修学レベルに対応したカリキュラム編成について、この2年間の成果と不具合による更なる改革の内容を、4つのポイント(修学レベルの広がりへの対応、多様な幅広い志向への対応、これから求められる教育の強化、本学の良い部分を堅持&進化)に基づき山口敦史教務部長が報告しました。

今回は新たに、山本知仁DX推進委員長が、本学が推進している教育DXの取り組み内容を紹介しました。取組①(学生一人ひとりの学びに応じ



外部評価委員に報告をする大澤学長(奥)

た教育実践)では学生の修学ビッグデータを解析し、それに基づいた教育支援を行っています。取組②(時間と場所の制約を超えた学びの場の創出)ではVR技術等を用いて学びの場を創出しています。取組③(PD 教育を軸とした社会実装型 PBL 活動の実践)では AI、データサイエンス等を活用して PBL のクオリティをより現代的なものにします。本委員会では取組①及び取組②の具体的な取り組み内容と、その他の取り組みとして令和 6 (2024)年度に実施した DX ハイスクール応援プログラムについて報告しました。

本学からの報告を受け、外部評価委員の方々から、期待や評価だけでなく貴重な意見やアドバイス、課題などを頂きました。

最後に大澤学長が総括として「キャンパスの中に留まるのではなく、日本の教育の閉塞性の一つである同年代の学び合いを、縦の繋がりに広げることに注力していきたいと思う。大学の役割は、社会の中であって、文系・理系を問わず、かつ年代も問わず、様々な職種の人が交わる、世代・分野・文化を超えた共創を通して生涯学び続けることができる大学として本学が機能していかなければいけないと改めて感じさせていただいた。産・官・学・金の様々な方面の外部評価委員から貴重なご意見をいただくことができ、今後の教育研究活動の改善に活かしていくよう努めたい」と述べました。

次年度以降も改革・改善のための自己及び外部点検評価を継続するため、外部評価委員の皆様引き続き本学の充実発展への協力をお願いし、閉会しました。

学生対応に関する研修を実施

本学園は5月の「障がいのある学生の受け入れと合理的配慮」に関する全学的な研修会に引き続き、8月5日(月)に前富山大学保健管理センター准教授/アクセシビリティ・コミュニケーション支援室長の西村優紀美(にしむらゆきみ)氏を講師に招き「発達障がいに伴う配慮を求める学生への対応」と題する研修会を開催しました。さらに、9月3日(火)には筑波大学学生サポートセンター学生相談室の杉江征(すぎえまさし)氏を講師に招き「自殺危険のある学生への対応：教職員のゲートキーパー対応」と題し講演いただきました。なお、8月5日と9月3日の講演は、大学では全学部会(教育フォーラム)として実施しました。

◇8月5日(月)「発達障がいに伴う配慮を求める学生への対応」研修会：西村優紀美講師



発達障がい学生の対応
について講演する西村講師

「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」(いわゆる「障害者差別解消法」)の改正

法が、令和 6 (2024)年 4 月 1 日(月)から施行され、合理的配慮の提供が私立大学でも義務化されました。本学でも規則の見直しや申請から合理的配慮の提供までのプロセスを整理し、4月から新しい体制で対応を始めたところです。

富山大学は、平成 20 (2008)年度から障害大学生修学支援ネットワークの拠点校の一つとして活動されていて、平成 21 (2009)年にはアクセシビリティ・コミュニケーション支援室を設置し、身体障がいや発達障がい学生の支援を行っています。

講演では、障害者差別解消法に関する法律の説明や合理的配慮の提供方法、情報公開、また、発達障がいごとの特性や対応について、具体的な事例を挙げた分かりやすい説明を受けました。

講演会終了後、西村氏と修学相談室・進路開発センター・カウンセリングセンターの職員との座談会を実施し、実際に現場で抱えている問題について意見交換を行いました。本学でも障がいのある学生から合理的配慮を求める声が

年々増加していて、障がいのある学生への対応について、理解を深める貴重な機会となりました。

同じ種類に分類される障がいであっても個々の特性には違いがあり、困難を感じる点や必要とする支援内容は学生ごとに異なるため、学生・父母等と教職員とのコミュニケーションが重要であることを再認識する機会となりました。

◇ 9月3日(火)「自殺危険のある学生への対応：教職員のゲートキーパー対応」研修会：杉江 征講師



自殺危険のある学生対応について講演する杉江講師

現状として、令和3(2021)年度全国の大学における死亡学生は636人となっており、そのうちの約半数が自殺(疑いを含む)となっています。本研修会では教職員に対し、学生の自殺者が発生しやすい学期始めを前に、自殺危険のある学生への対応について研修会を開催しました。

講演で杉江講師は、全国大学の自殺した学生の現状と自殺する学生の特徴や危険因子について解説され、筑波大学の状況や支援体制、さらに具体的な取り組みを交え、「つながる」・「つなげる」・「つながりあう」をキーワードに分かりやすい説明を受け、今後の学生対応の助けになる研修となりました。

著作権等の取り扱いに関する研修を実施

本学園の職員を対象としたSD研修「著作権等の取り扱いに関する研修」を令和6(2024)年12月17日(火)にライブラリーセンターで実施しました。

昨今、情報発信のIT化が進み、生成AIの登場などにより、著作権の取り扱いが重要視されています。本学園でも各部署の業務を通して、多種多様な資料などを作成する際、イラストや画像、レポートといった他者の著作物を利用する機会があります。企業や他大学でも著作権に関する取り扱いのトラブルが増えていることを踏まえ、業務における著作権の取り扱いに関するモラルを高めることを目的として研修を行いました。

今回は、課長クラスを中心に52人の職員が参加しました。最初に村井好博法人代表人本部長から「今回の研修を通して、業務における他者の著作物の取り扱いについて考えるきっかけとしてほしい。本日学んだことはぜひ部署に持ち帰り、部署内でも展開し、職員一人ひとりが意識できるようにしてほしい」とあいさつしました。



草野氏の説明を真剣に聴く参加者

その後、著作権審査委員会の草野舞委員(ライブラリーセンター業務部業務課)が、文化庁が提供している著作権の取り扱いに関する情報を基に、著作権の基礎知識を深める情報提供を行いました。引き続き、業務における著作権の取り扱い例を紹介しました。なお、今回は「学校その他の教育機関における複製等」に関する取り扱いは対象外としました。

後半では業務別のグループに分かれ、各部署の業務で行われている著作権の取り扱いについてお互いに紹介し合いました。各グループでは、学生や地域、企業などに対して、チラシ、冊子、



グループごとにディスカッションをする参加者

学生ポータル、ウェブサイト、メールなどを活用して情報発信を行っている業務を対象に、話し合いました。

研修を通して著作権の理解を深め、業務における著作物の取り扱いについて再確認しました。

今回の研修では、Microsoft 社の m365 のアプリとして提供されている、短文で発信でき、署名なども不要な簡単なコミュニケーションツールである「Teams」を活用しました。本学では Zoom や Box などのクラウド型の情報共有システムも有し、オンライン会議やファイルの共有を行っていますが、業務目的のテキストコミュニケーションはメールが主流であり、Teams はあまり活用していません。そこで、部署間の効率的なコミュニケーション・情報共有のツールの体験学習として、主に受講者と運営側の情報伝達と添付ファイルの共有等に Teams を使いました。また、資料を更新するたびに添付ファイルをメール配信するのではなく、Excel や PowerPoint をオンライン上で共有し、複数名が編集することで素早く資料を作成する体験もしました。m365 のアプリを使うことで、受講者側は運営からの連絡も容易に受信し、ファイルのダウンロードやアップロードも簡単に行うことができました。共同作業の効率化を図る業務 DX に繋がる SD 研修になりました。

Microsoft 365 Power Platform 研修を開催

本学では、令和 3 (2021) 年より Microsoft 365 (以下：m365) を導入し、クラウド型の Office ツールを活用しています。m365 には従来、業務で活用している Word、Excel、PowerPoint、Outlook 以外にも、クラウド上で利用できる多種多様なアプリケーションが用意されています。

今回、大学事務局で業務の DX に向けて、m365 の活用を推進するために、3月18日(水)に大学事務局職員 10 人を対象に、m365 で利用できる「Power Platform」の「Power Automate」と「PowerApps」の研修を行いました。

Power Automate は、パソコン業務をノーコードで自動化できるプログラミングツールで、ルール化されている単純なエクセル入力業務の自動化や簡単な承認フロー、自動メール通知など業務の効率化を図ることができます。また、PowerApps もノーコードで業務アプリが開発できるツールであり、申請や報告等のフォームのカスタマイズができ、m365 で利用できる「SharePoint(リストやデータ管理が可能)」を併用してデータの入力・管理を自動化できます。

研修は(株)菱友システムズ(東京都)から講師を派遣いただき実施しました。研修当日は、開始前に谷 正史事務局長が「学生や教員向けに教育 DX やシステム化が推進されているが、大学事務局内の業務の DX 化が遅れている。その一つが職員の IT スキルが追い付いていないことである。今回の研修を通して m365 の操作スキルを磨き、業務の DX 化を推進してほしい」と参加者に向けてあいさつしました。



業務の DX 化推進のため m365 を学ぶ参加者たち

各自のノートパソコンに導入されている m365 のアプリケーションを使って実践型で研修を行いました。

1. 研修の内容

○「Forms の応答があった際にメールに自動で送信するフロー」の作成

Forms の設問で「はい」または「いいえ」を選択することによって、送信するメール文章を変えるアクションについて、Power Automate にてノーコードでプログラミングする方法を学びました。

○「自身と特定の人物の Outlook スケジュールの空き時間を検索するアプリ」の作成

PowerApps を使って、自身と特定の人物の Outlook に登録された予定表からスケジュールの空き時間を検索するアプリを作成しました。予め講師が用意したプログラミングコードをコピー&ペーストをする形で PowerApps にプログラムを入力し、組織メンバーのユーザー情報と Outlook の予定表データから、自身と特定の人物の空き時間を検索するアプリの開発方法を学びました。

○「備品持出申請アプリ」の作成

PowerApps で申請書フォーマットを作成し、Power Automate で貸し出しの申請受付及び承認可否アクションを行い、可否によってメール内容を分けるアクションのプログラミング方法を学びました。PowerApps では、予め SharePoint アプリケーションで用意された備品リストからプルダウン式で選択できる画面作成や、貸出期間(開始日・返却日)等の情報を入力するフォームをカスタマイズに作成し、そのフォームで入力されたデータを別の SharePoint のシートにデータ管理するプログラムを作成しました。主に講師が用意したプログラミングコードをコピー&ペーストする形でプログラムの動作を確認しました。また、Power Automate では、予めアプリ内の機能としてある「承認」機能を活用し、「申請データが SharePoint リストに追加されると、承認・可否の確認アクションを行うプログラムを紐づける作業」を行いました。この結果、PowerApps 画面から備品貸出申請処理のアクションがあると、管理者宛にメール(または Microsoft Teams)で承認可否のアクション依頼が



プログラミングを行う参加者

通知され、「承認」または「否認」のアクションによって、その内容のメールを申請者に通知するプログラムを各自のパソコンで実行しました。

本研修では、講師が用意したプログラムコードをコピー&ペーストをする形でアプリの機能やプログラムの動きを確認しました。コードの詳細を理解していなくても、普段利用しているパソコンで業務の一部を自動化できることがわかりました。なお、PowerApps や SharePoint は大量データに対応していないため自動化できる業務は限定されますが、IT スキルの向上に努め、業務 DX を推進に寄与する研修会となりました。

令和6年度 拯友会理事会を開催

令和6(2024)年度拯友会理事会を4月20日(土)午前10時から、前年度同様オンライン会議ソフト「Zoom」を併用して、酒井メモリアルホールで開催しました。全国各地から21人の理事が来学し、5人の理事がオンラインで参加しました。遠方で来学できない理事に対しても参加する機会を提供することができました。

欠席の理事とオンライン参加の理事から34通の委任状が提出され、理事総数62人に対して21人の会場参加理事と34通の委任状によって、拯友会会則にある理事会定足数(過半数)に達しました。本学からは学長、副学長、各部長、事務局長が出席し、会は拯友会長のあいさつから始まりました。その後、学長あいさつ、学校側参加者紹介、議案審議へと進みました。

1. 令和5年度 拯友会会務報告

2. 議案

第1号議案：令和5年度収支決算報告

第2号議案：令和6年度役員選出について

第3号議案：令和6年度拯友会行事計画について

第4号議案：令和6年度収支予算案について

3. その他

保護者ポータルについて



審議進行する中村氏(右)

審議中は会長の中村城(なかむらじょう)氏が議長となり、議案の説明は新井真二学務部長が行った。各審議事項は会場出席者の同意で承認される方式とした。

オンラインで参加した理事にはチャット機能で議事を配信し、質問やご意見をいただいた。

令和5年度拯友会会務報告と第1号議案の令和5年度収支決算報告で昨年度の実績を報告し、第2号議案では令和6年度の新役員案を可決しました。第3号議案では令和6年度の行事予定を説明し、審議し可決しました。第4号議案で

は、令和6年度の収支予算案を審議し、賛成多数で可決しました。

その他の項目では新井学務部長が保護者ポータルサイトへの登録数を報告し、さらに登録を呼びかけている現状を報告しました。

また、令和6年1月に発生した能登半島地震の被害学生への対応、拯友会予算による各助成金の使用状況などを報告しました。

すべての議案審議のあと、参加理事に自由な発言を求め、意見交換をしました。



「工学の曙文庫」を見学する理事

理事会終了後、希望された理事はLCの「工学の曙文庫」や五十嵐威暢アーカイブ、SDGs推進センターなどキャンパスを見学しました。システム設計工学専攻2年次の陸田駿弥(むつだしゅんや)さんと、環境土木工学科4年次の石田慎吾(いしだしんご)さんの2人が案内役を務めたほか、2人の学生が理事の誘導や受付の補助などを務めました。

令和6年度拯友会定例総会を開催

令和6(2024)年度拯友会定例総会を5月25日(土)午前10時から、本学の6号館多目的ホールで開催しました。総会の模様は、YouTube Liveと動画配信システム「AVIS Cloud」で会員にオンライン配信し、議事資料は来場者には冊子を、中継視聴者にはWebで配付しました。会場には中村 城(なかむらじょう)会長以下32人の拯友会役員や、北は北海道から南は熊本まで27の地区から理事が来学しました。大学からは学長、副学長、学部長、教務部長、学生部長、進路部長、教育点検評価部長、専門基礎教育部長、事務局長、学務部長、庶務課長が出席しました。総会は中村会長のあいさつで始まり、大澤学長のあいさつ、参加者紹介、議事審議へと進みました。

[中村拯友会長あいさつ]

本日はご多忙の中、会場にお越しいただき、またWebでご視聴いただきました事に、厚くお礼申し上げます。

金沢工業大学はこの春、学部、大学院に約1,600人の新入学生を迎え入れ、また拯友会の会員も新たになりました。新会員の皆様よろしくお願ひいたします。

この金沢工業大学「拯友会」は「会員と大学の連携を緊密にすることにより、充実し、かつ円滑な学生生活の維持・向上に寄与」することを目標としている父母等の会です。

学生たちの学生生活、学友会活動、県人会、就職活動などを積極的に支援し、会員と大学とを結ぶための活動を行っております。会員の皆様にご理解とご協力をお願いいたします。

本年度は昨年に引き続き地区交流会の開催を予定しております。全国の開催地に教職員がおもむき、大学の取り組みを説明し、情報交換ができる貴重な機会です。また、参加いただいた会員同士で情報交換ができることも貴重な機会と言えますので、ぜひご参加いただきますようよろしくお願いいたします。

本日の定例総会では、令和5(2023)年度の決算報告、及び令和6年度の役員案、予算案など



中村会長

が審議されます。また、今年1月に発生した能登半島地震をはじめとする災害に対する助成や、昨年度から始まった各種の助成金についてもおはかりしたいと思っております。

何とぞ慎重にご審議いただき、円滑に議事が進行され、有意義な総会になりますようご協力をお願い申し上げ、誠に簡単でございますが、私のあいさつとさせていただきます。

続いて、大澤学長があいさつと本学の教育研究への取り組みについて説明しました。

[大澤学長が本学の教育研究への取り組みについて説明]

大澤学長より、あいさつと本学の取り組みについて会員に説明がありました。最初に日頃のご理解とご協力について感謝の言葉を述べ、続いて大学の学びについて説明しました。本学の教育の特徴であるプロジェクト型教育とその社会実装について画像を提示して説明しました。キーワードとして「デジタル(DX)」と「グリーン(GX)」などこれからの社会に適応した学びの必要性を説明し、さらに今後、文系理系を融合した新しい学びを進めて行くことを説明しました。また、コーオプ教育、学内インターンに触れ、企業や学校で働きながら学ぶ取り組みについて述べました。最後に、来年度に行われる学部学科の改組について説明し、拯友会会員にご理解とご協力をお願いしました。



大澤学長

(令和7(2025)年度から学科名称変更)

「航空システム工学科」→「航空宇宙工学科」

「応用化学科」→「環境・応用化学科」

「応用バイオ学科」→「生命・応用バイオ学科」

※在学生を含めた全学生に適用

[議案審議]

続いて出席した大学教職員、拯友会役員の紹介の後、中村拯友会長が議長となり議案審議に移りました。

なお、議案の説明は画像を投影して新井真二大学事務局学務部長が行いました。

1. 令和5年度 拯友会会務報告

2. 議案

第1号議案：令和5年度収支決算報告

第2号議案：令和6年度役員選出について

第3号議案：令和6年度拯友会行事計画について

第4号議案：令和6年度収支予算案について

3. その他

- ・保護者ポータルについて
- ・能登半島地震の対応について
- ・助成金についての報告等

「令和5年度会務報告」と第1号議案「収支決算報告」では昨年度の拯友会行事の報告と収支決算が報告され、承認されました。

第2号議案では令和6年度の役員案が審議され、承認されたことによって新会長である八田有花(はったゆか)氏が中村氏と議長を交代しました。

八田新会長は就任のあいさつで「前会長の在任中はコロナの収束にもなった行事の再開や大雨、能登に起こった2度の地震災害などの自然災害も多く発生し、大変な期間でしたが、職務を全うされました。新役員も前役員と同様努力してまいります」と述べました。



八田新会長

第3号議案では令和6年度行事計画を詳細に説明し、審議され、承認されました。

第4号議案では令和6年度拯友会予算案について審議され、承認されました。

その他の項目では、保護者ポータルサイトの機能についての説明や登録の状況を事務局が報告しました(令和6年5月現在の登録率約80%)。今後更なる登録数増加に向けて会員に協力を依頼しました。更に、令和6年1月1日(月)に発生した能登半島地震の被災学生に対する拯友会からの見舞金、災害奨学金等の支援について報告し、最後に昨年度実施した各種助成の活用状況について報告がありました。

質疑の中で、理事から「近年の物価上昇によって災害奨学金の金額見直しが必要ではないか」との意見があり、令和6年度新役員で検討することが決定しました。

議案の審議はすべて承認され、定例総会は午前10時50分頃終了しました。

10分の休憩をはさみ、11時から講演として、佐藤進学生部長から現在の修学状況を説明し、進路部長の徳永光晴教授は進路指導の状況や求人状況の推移、インターンシップ、大学院進学などについて講演しました。



学内を見学する参加者

講演会終了後、会場を学内に移し、オプションプログラムを行いました。

オプションプログラムとして学内見学と進路キャリア開発室室長の二飯田一貴室長の講演会の二つを用意し、最後に学食を体験していただきました。

応募した家族約250人を10チームに分け、現役学生を含む10人が引率を担当しました。

オプションプログラムは午後2時10分ごろ終了し、すべての日程は無事終了しました。

令和6年度拯友会地区交流会を開催

6月から7月にかけて令和6(2024)年度の拯友会地区交流会を全国54会場で開催しました。開催案内に力を入れ、保護者ポータルでも参加者の応募を促しました。定例総会で正式に開催日程を決定し、Webで参加希望を受け付けました。

大分地区は参加希望がなく、能登地区は震災から間もないため開催を見送りました。

【地区交流会開催日程】

日付	地区(56会場)
6月8日(土)	鹿児島、宮崎、熊本、福島、福井、広島、山口
6月9日(日)	沖縄、大分※、福岡、茨城、滋賀、奈良、岡山、新潟
6月22日(土)	長崎、上越、浜松、長野、山形、京都
6月23日(日)	佐賀、富山、東京、豊橋、松本、高岡、岩手、宮城、兵庫
7月6日(土)	群馬、岐阜、神奈川、高知
7月7日(日)	埼玉、栃木、千葉、三重、山梨、愛媛
7月20日(土)	旭川、帯広、鳥取、名古屋、大阪、香川、能登※、青森
7月21日(日)	札幌、北見、島根、静岡、和歌山、徳島、秋田
7月27日(土)	金沢

※未開催

前年度同様、全体交流会と個別懇談を各地区で実施しました。また、本年度は、KITブックセンターで販売されている、能登の復興を願い石川県産の食材を使用したお菓子を交流会のお土産として参加者にふるまいました。

全体交流会は地区理事のあいさつから始まり、大学代表教員のあいさつ、大学からの出席者紹介、同行した学生の大学生生活の発表の後、交流会と個別懇談を並行して実施しました。教員からの推薦を受けた学生を中心に延べ109人の協力学生が参加し、受付や学生生活の発表、交流会での会員との会話など多岐にわたって活躍しました。また、延べ273人の教員と、延べ95人の職員が今回の地区交流会に参加しました。参加会員数は前年度と比べ1.5倍に増加しました。



学生生活についての発表を聞く会員＝金沢会場

令和6年度拯友会常任理事会を開催

令和6(2024)年度拯友会常任理事会は、令和7(2025)年1月25日(土)午前10時から1号館で開催しました。会長をはじめとした常任理事と監事9人に参加を呼びかけ、2人の参加と5通の委任状を得て開催しました。



拯友会役員(左列)と議案審議をする大学出席者(右列)

拯友会役員からは、八田有花会長、横山 薫常任理事の2人が出席しました。大学からは、大澤 敏学長、谷 正史大学事務局長、新井真二学務部長、鈴木節純庶務課長、石田侑吾庶務課副主幹が出席しました。

本会は八田拯友会長のあいさつから始まり、大澤学長あいさつ、出席者紹介、議案審議、意見交換と進みました。議案審議は次の順に行われました。

◇議案

- 第1号議案 令和6年度 会務報告
- 第2号議案 令和7年度 役員(案)
- 第3号議案 令和7年度 行事計画(案)
- 第4号議案 令和7年度 会則改正(案)
- 第5号議案 その他

- ・保護者ポータル登録状況の報告
- ・学生の健康増進サポートを目的とした100円朝食の助成拡大、及び100円夕食の新設について
- ・報告事項

議事の進行は八田拯友会長から指名された石田副主幹が務めました。

第1号議案から第4号議案までは資料を基に説明を行い、審議の結果、承認されました。第5号議案では令和7年1月20日(月)現在の保護者ポータルサイト登録率が学部全体で約80%と説明しました。役員からは、現在Webで運用しているポータルサイトのアプリへの変更、時間割が確認できる機能や単位取得状況が一目で分かる機能、父母等からの問い合わせ機能の追加などの要望があり、今後の検討課題となりました。

また、学友会助成の一部である100円朝食について、拯友会事務局が学生の健康増進サポートを目的とした助成拡大、及び100円夕食の新設について提案し、承認されました。また、報告事項として、令和6年能登半島地震に対する災害見舞金の支給状況や、研究室助成金や学友会助成金などの拯友会費利用について報告しました。

議案審議の後、出席した役員を交えて意見交換を行いました。役員からは、父母等や地域住民、社会人、高校生向けの公開講座や体験型イベントの創出等を通して大学をさらに認知してもらう仕組み作りの重要性、令和7年4月からの新学部学科体制の詳細、入試結果と修学状況との関連性、ハラスメント対策の取り組み、アルバイトの働き方や扶養と所得、税金などのお金に関わる知識を学べる場の必要性など、幅広い意見をいただき、大澤学長や谷大学事務局長が主体となって一つひとつ丁寧に説明しました。貴重なご意見をたくさんいただき、午前11時40分頃閉会しました。

VII. 学生募集

令和6(2024)年度も、KIT オープンキャンパスを中心とした学生募集活動を行いました。

対面でのオープンキャンパスは春(5/12[日])、夏(7/15[土]、16[日])、秋(10/22[日])の3回実施しました。

また、自宅からスマホ・PCで参加できる「KIT オンライン説明会」を実施しました。進学説明会では、オンラインにてYouTubeやZoomを活用し、双方向性を活かして高校生や保護者の方々へ説明から質疑までを生中継するインターネットを活用して実施しました。

このほか、入学試験や大学の特徴など、ステークホルダーの相談や質問に職員が個別にお答えする「オンライン個別相談」を平日に受け付けています。

学生募集活動

KIT 春のオープンキャンパス'24 を開催

高校生とその保護者を主な対象とした、「KIT 春のオープンキャンパス'24」を5月12日(日)に開催し、北海道から沖縄まで35の都道府県から高校生402人(前年546人)、保護者・その他417人(前年531人)、合わせて819人(前年1,077人)が参加しました。

今回のオープンキャンパスは、令和7(2025)年度に文系と理系の枠を超えた社会実装型総合大学として、6学部17学科体制に大きく進化することを公表する初のイベントであり、参加した高校生が学科の学び・研究を理解できるように努めました。

参加者はまず、各学科教室に分かれて、大澤敏学長による「成長分野(デジタル・グリーン)をリードする情報に強い人材育成」と題した教育や学科などの説明を聴講しました。

その後は、高校生向けプログラムと保護者向けプログラムに分けて実施しました。今回のオープンキャンパスのキャッチコピーは「文理の枠を超えた、もっとその先へ。」とし、文理探究学部として新設した「情報デザイン学部」と「メディア情報学部」の2学部の他、情報に強い金沢工業大学として、同じく新設の「情報理工学部」を主軸に学科での学びを比較できるプログラムスケジュールとしました。

学科名	体験プログラム
経営情報学科	【合同実施】 ①SDGs人生ゲームで未来を創る力を学ぶ!
環境デザイン創成学科	②SDGsとデータに強い情報デザイン学部
メディア情報学科	【合同実施】
心理情報デザイン学科	①新たなメディアを創造するクリエイティブエンジニア! / 心とデザイン Part1 ②情報テクノロジーで感動メディアをデザインする / 心とデザインPart2
情報工学科	【合同実施】
知能情報システム学科	①②③輝く未来は多様な君たちが創る! AI、IoT、データサイエンス、セキュリティを1から学ぼう
ロボティクス学科	①情報技術で進化するロボティクス学科その1 ②情報技術で進化するロボティクス学科その2 ③情報技術で進化するロボティクス学科その3
環境・応用化学科	①水をキレイにする! 環境・応用化学科の紹介 ②水の浄化実験 & 環境・応用化学科を知ろう! ③未来の環境・化学技術を目指す君へ
生命・応用バイオ学科	①②③生命・応用バイオ学科での学生生活と研究
機械工学科	【合同実施】
先進機械システム工学科	①②③「機械工学=ものづくりの基盤」を学んで社会を支える人材になろう! / ものづくりの最先端を学ぶ先進機械システム工学科
航空宇宙工学科	①②③航空機や宇宙機で工学を学び社会にはばたく
電気エネルギーシステム工学科	【合同実施】
電子情報システム工学科	①②③豊かな社会と未来を創造する電気電子学
環境土木工学科	①環境土木工学科での学び Part1 ②環境土木工学科での学び Part2 ③環境土木工学科での学び Part3
建築学科	【合同実施】
建築デザイン学科	①建築デザイン学科と建築学科の紹介 ②学科紹介と大学生による学び・活動の発表 ③建築デザイン学科と建築学科の紹介



夢考房を見学する来場者



ロボットを操作する来場者

KIT 夏のオープンキャンパス'24 を開催

「KIT 夏のオープンキャンパス'24」を開催し、7月13日(土)と14日(日)の2日間で39の都道府県から高校生1,363人(前年1,206人)、保護者・その他1,197人(前年960人)を合わせて2,560人(前年2,166人)の参加がありました。

今回のオープンキャンパスは、文部科学省に設置認可の届出を行っていた学部学科改組が、正式に受理されたことを受け、令和7(2025)年度の学生募集を進めることが可能となった最初のイベントとなりました。文系と理系の学生が共に学ぶ、6学部17学科体制へ大きく進化することを伝えるべく、キャッチコピーを「進メ、化ケロ。」としました。参加した高校生には、本学に進学し4年後に社会人として活躍できる自身の成長過程がイメージできるよう、学問の理解を深めるマッチングを図る学科紹介、社会課題を実践的に学ぶプロジェクトデザインⅢの研

究や実験を体験する学科体験をメインとして実施し来場者に満足感を与えられるように努めました。

学科紹介並びに学科体験の実施時間は定めず午前10時40分～午後3時30分の時間帯で各学科自由なプログラムで実施しました。

このほか、終日イベントとして「なんでも相談」「就職・進路紹介」「資格取得紹介」「部活動・サークル紹介」「学生アパート紹介」「留学紹介」「英語教育紹介」「夢考房プロジェクト紹介」「クラスター研究室紹介」「SDGs Global Youth Innovators プロジェクト活動紹介」「サイコロプロジェクト活動紹介」「防災・減災プロジェクト『SoRA』プロジェクト活動紹介」「キャンパス案内」を設けて、参加者への紹介や相談対応を行いました。

高校生や保護者はそれぞれ希望の学科や各ブースで情報収集し、予定した全プログラムは午後4時に終了しました。

○7月13日(土) 学科別開催内容

学科名	実施時間	タイトル	実施時間	タイトル
合同実施 経営情報学科	10:40~12:30	人生ゲームで未来を創る力を学ぼう!	13:45~15:30	ボードゲームでデータサイエンス力を向上!
合同実施 環境デザイン形成学科				
合同実施 メディア情報学科	10:40~11:05	文? 理? 神を越えた探究型の情報系新学部!		
合同実施 心理情報デザイン学科	11:10~11:40	メディア情報の学び・研究・道筋を知ろう!①	13:00~15:30	「感動デザイン工学研究所」見学ツアー
合同実施 心理情報デザイン学科	11:10~12:00	心とデザイン	13:30~15:30	心理学者が語るリラックスの魔法
合同実施 情報工学科	10:40~11:40	高1と共に創る未来はどのようなものか?情報を学んで新たな社会を創造しよう!	13:00~15:30	AI・データサイエンス系研究室に訪問しよう!
合同実施 知能情報システム学科	10:40~10:55	サイバー・フィジカルを要るロボティクス!	14:00~15:30	ドローンの安定飛行の秘密を解明!
合同実施 ロボティクス学科	10:55~12:45	キミは自在に動かせ!7種ある2つの制御手法! 終了 シュートを決めろ!ロボットサッカー(常設体験展示)	終了 14:00~15:30	広がるフィールド、進化するロボティクス(常設展示) 散らしてセンパイ!ロボティクス学科のコト!
環境・応用化学科	10:40~10:55	学科紹介「15分でわかる! 環境・応用化学科」	13:50~15:30	学科体験: 思い地のよい化粧品を作ろう!
環境・応用化学科	10:55~12:35	学科体験「蛍光体をつくってみよう!」		
生命・応用バイオ学科	10:40~12:10	生体で働く分子を、見て力で操作する	13:30~15:30	バイオと化学で医薬品原料を創ってみよう!
合同実施 機械工学科	10:40~11:30	生まれ変わる機械工学科、先進機械システム工学科とは?	13:00~15:30	機械工学科、先進機械システム工学科の研究室ツアー
合同実施 先進機械システム工学科	10:40~11:20	航空宇宙に開眼!ある人へ	13:00~15:30	工学を航空宇宙分野で楽しむ工夫
合同実施 航空宇宙工学科	終了	本物のプロペラ機やヘリコプターのメカニズムを体験しよう	終了	羽田空港やセントレア空港に着陸しよう
合同実施 航空宇宙工学科	終了	ドローンの操縦を体験しよう	終了	研究室公開
合同実施 電気エネルギーシステム工学科	10:40~12:00	豊かな社会と未来を創造する電気電子工学	13:15~15:20	最先端の再生エネ、EV、バッテリー、人工衛星を体験しよう
合同実施 電子情報システム工学科	13:15~15:20	未来のエレクトロニクスを築く! 電波・音響・ネットワークの技術を体験しよう!	13:15~15:20	最先端半導体技術と未来の機械工場を体験しよう!
合同実施 環境土木工学科	10:40~11:30	特色ある教育現場とキャリアデザインの紹介	12:45~15:30	地域防災環境科学研究所(やつかりサーチキャンパス)ツアー
合同実施 建築学科	10:40~12:10	建築の2学科の説明、建築デザインツアー	13:30~15:30	建築構造・環境Gツアー
合同実施 建築デザイン学科				



来場者で賑わう受付の様子



研究施設見学の様子

○7月14日(日) 学科別開催内容

学科名	実施時間	タイトル	実施時間	タイトル
合同実施 経営情報学科	10:40~12:30	マイコンで学ぶIoT体験	13:45~15:30	身の回りのデータ分析体験
合同実施 環境デザイン形成学科				
合同実施 メディア情報学科	10:40~11:05	文? 理? 神を越えた探究型の情報系新学部!		
合同実施 心理情報デザイン学科	11:10~11:40	メディア情報の学び・研究・道筋を知ろう!②	13:00~15:30	未来に繋がるメディアの制作と実験体験
合同実施 心理情報デザイン学科	11:10~12:00	心とデザイン	13:30~15:30	大学生と体験する心理学実験: データをとって分析してみよう!
合同実施 情報工学科	10:40~11:40	高1と共に創る未来はどのようなものか?情報を学んで新たな社会を創造しよう!	13:00~15:30	AI・データサイエンス系研究室に訪問しよう!
合同実施 知能情報システム学科	10:40~10:55	フィールドを巡る! ロボティクス体験!	14:00~15:30	なぜ飛ぶ?ドローンで学ぶロボット制御の面白さ
合同実施 ロボティクス学科	10:55~12:45	最速を目指せ! ロボットカーの競争! 終了 シュートを決めろ!ロボットサッカー(常設体験展示)	終了 14:00~15:30	広がるフィールド、進化するロボティクス(常設展示) 散らしてセンパイ!ロボティクス学科のコト!
環境・応用化学科	10:40~11:00	学科紹介「20分でわかる! 環境・応用化学科」	13:50~15:30	学科体験: 手作り測定機で水を分析しよう!
環境・応用化学科	11:00~12:35	学科体験「インジゴ(藍)の合成と染色に挑戦!」		
生命・応用バイオ学科	10:40~12:10	アクアロボティクスシステムから学ぶSDGs	13:30~15:30	えっ、こんな食品に美白効果!
合同実施 機械工学科	10:40~11:30	生まれ変わる機械工学科、先進機械システム工学科とは?	13:00~15:30	機械工学科、先進機械システム工学科の研究室ツアー
合同実施 先進機械システム工学科	10:40~11:20	航空宇宙分野で工学を学び社会に貢献しよう	13:00~15:30	工学を航空宇宙分野で体験を持って学ぶ
合同実施 航空宇宙工学科	終了	本物のプロペラ機やヘリコプターのメカニズムを体験しよう	終了	羽田空港やセントレア空港に着陸しよう
合同実施 航空宇宙工学科	終了	ドローンの操縦を体験しよう	終了	研究室公開
合同実施 電気エネルギーシステム工学科	10:40~12:00	豊かな社会と未来を創造する電気電子工学	13:15~15:20	最先端の再生エネ、EV、バッテリー、人工衛星を体験しよう
合同実施 電子情報システム工学科	13:15~15:20	未来のエレクトロニクスを築く! 電波・音響・ネットワークの技術を体験しよう!	13:15~15:20	最先端半導体技術と未来の機械工場を体験しよう!
合同実施 環境土木工学科	10:40~11:30	特色ある教育現場とキャリアデザインの紹介	12:45~15:30	地域防災環境科学研究所(やつかりサーチキャンパス)ツアー
合同実施 建築学科	10:40~12:10	建築の2学科の説明、建築デザインツアー	13:30~15:30	建築構造・環境Gツアー
合同実施 建築デザイン学科				

KIT 秋のオープンキャンパス'24 を開催

「KIT 秋のオープンキャンパス'24」を9月22日(日)に開催しました。メイン会場を8号館に23号館及び24号館などを使用しました。39の都道府県から高校生640人(前年493人)、保護者・その他666人(前年495人)、合わせて1,306人(前年988人)が参加しました。

今回のオープンキャンパスは、例年実施していた10月から1ヶ月前倒しして開催しました。変更理由として、令和7(2025)年度から学部学科改組により6学部17学科体制へ大きく進化するを、少しでも多くの高校生に周知できるよう、募集定員が一番多い一般選抜対象者のみならず、総合型選抜や学校推薦型選抜を受験する対象者まで網羅するためです。

主たる構成としては、本学に進学し4年後に社会人として活躍できる自身の成長過程がイメージできるよう、学問の理解を深めるマッチングを図る学科紹介、社会課題を実践的に学ぶプロジェクトデザインⅢの研究や実験を体験する学科体験を実施し、来場者に満足感を得られるよう努めました。

学科紹介並びに学科体験の実施時間を定めず、午前10時40分～午後3時30分の時間帯で各学科自由なプログラムで実施しました。

また、一般選抜の「大学入学共通テスト利用」を受験する高校生向けに、特別プログラム「駿台予備学校講師による「大学入学共通テスト対策講座」」を実施しました。午後1時から2時10分の70分間で高谷唯人(たかたに・ゆいと)氏による【数学】を、午後2時20分から3時30分の70分間で鈴木貴之(すずき・たかゆき)氏による【英語】が行われ、傾向と対策を基にしたオリジナルの問題集を使用し受講者に対して丁寧に分かりやすく解説されました。

保護者向けプログラムとしては、保護者に本学の教育内容や教育サポート、修学サポートの仕組みなどを理解いただくための「保護者説明会」や、昨年に続き「保護者のためのキャリア支援説明会」を実施し、コーオプ教育やキャリア支援及び最近のインターシップ事情に関する説明をした他、協力学生によるキャリアパスを題材としたプレゼンテーションも併せて行いました。



学科体験プログラム一覧

学科体験プログラムの様子

実施種別	学科名	実施時間	実施場所	実施		実施時間	実施場所	実施	
				タイトル	内容			タイトル	内容
合同実施	経営情報学科 環境デザイン創成学科	10:40~11:45	8・104	人生ゲームで未来を創る力を学ぼう！	タカトミ・やほ遊遊を始め合計4組編と連携して開発した506版人生ゲームを体験！未来の社会を先取りしよう！	13:00~15:30	8・104	ボジティブ環境を楽しくデザインする方法！	指が能力を最大限に発揮できるボジティブ環境を新発見！「beingコードゲームと生成AIを使って楽しくデザインしよう！」
	メディア情報学科 心理情報デザイン学科	10:40~11:05	8・304	「文？ 理？ 枠を超えた探究型の情報系新学部！」	文理の枠を超えた新設学部であるメディア情報学部の魅力を、メディア情報学科、心理情報デザイン学科の教員がそれぞれ紹介いたします。				
合同実施	メディア情報学科	11:10~11:40	8・304	メディア情報の学び・研究・進路を知ろう！	Web、XR、AI、UXなどのメディアに関する幅広い教育と、そこから繋がる多様な研究・進路について、教員と在学生が紹介いたします！	13:00~15:30	8・304	未来に繋がるメディアのコンテンツを体験しよう！	学生が制作した社会実装に繋がる様々なメディアコンテンツ、授業で実施しているコンテンツ制作・分析に繋がる実験などを体験いたします！
	心理情報デザイン学科	11:10~11:40 11:45~12:00	8・301	心とデザイン	機軸講義【人の心を「調る」・「ふる」・「ハカル」】情報デザインに繋がる心の科学〜 学科体験【心を測ってみよう：視感と心拍】	13:30~13:50 13:50~15:30	8・301	心理情報デザイン学科物語	学科紹介【心とデザイン 詳細版】 心理情報デザイン学科について、学生が自ら語ります。
合同実施	情報工学科 知能情報システム学科	10:40~11:40	8・401	汎用AIと共に創る未来はどのようなものか？最新の情報技術で社会をよりよくしよう！	生成AIの急速な進歩により、世界が変わりはじめています。今後、AIと仕事をやるのは当たり前になるでしょう。本2学科では、AI・IoT、セキュリティなど、今、必必要とされている知識とスキルを0から身に付けられます。情報を学び、より良い社会を創ろう！	13:00~15:30	8・401	最先端の情報系研究室に訪問しよう！	最先端のAI・データサイエンス・IoT・セキュリティに関連する研究室の見学ツアーです。具体的にどんな事をしているのかを現役学生が紹介いたします！
	ロボティクス学科	10:40~11:00 11:00~11:45 終日	23・102	バジョンアップする社会のロボット技術！ まるっと紹介！ロボティクス学科探検！ 広がるフィールド、進化するロボティクス(情報展示)	社会を革新するロボット技術。情報技術からもつくり技術でも、分野横断的に学ぶロボティクス学科で何が出来るかを紹介します。 本学科で研究されている多岐にわたるロボット展示をツアー形式で回って紹介します。限定のスペシャル展示物があるかも？！ ロボティクス学科で開発している様々なロボットを展示、AIロボットやドローンシステムなど最新の取り組みも紹介します！	13:00~15:30 終日	23・102	掃除ロボットでプログラミング！ シュートを決めろ！ロボットサッカー(常設体験展示) 教えてセンパイ！ロボティクス学科のコード！	ロボット掃除機を教材にロボットの動きや音・光をプログラミングする体験をします。終了後は一緒に学科展示を回ってみよう！ ロボット掃除機を遠隔操作してサッカー体験！どんな仕組みで動いているか？近くで見て、触って、体験してください！ ロボティクス学科のセンパイが何で何でも相談に乗ります！学生生活から研究、課外活動まで、何でも聞いてください！
環境・応用化学科	環境・応用化学科	10:40~10:55	24・117	学科紹介「15分でわかる！環境・応用化学科」	環境・応用化学科で学ぶこと、研究テーマ、理科教員免許などの取得可能な資格、就職や進学など実用と交えて学科を紹介します。	14:00~15:30	24・117	手作り装置で水を分析してみよう！	LEDを使った手作り分析装置で、川の水に含まれる物質の濃度を測定してみよう！
		10:55~12:30	24・117	学科体験「蛍光体をつくってみよう！」	蛍光を発する新機軸化合物を合成します。添加する蛍光イオンを変え、様々な色調の蛍光体を作ってみよう！	終日	24・117	研究紹介&化学実験ミニ体験	最新の研究展示に加え、調から顔・色色を作る。水の浄化など、15分ほどのミニ実験で化学の面白さを体験してみよう！
合同実施	機械工学科 先進機械システム工学科	10:40~11:30	8・204	皆さんの生活に密着した「機械工学」を知ろう！	「ものづくり」の基礎を支える機械工学科、機械システム工学科での学びと現役学生の本音を聞いて、活躍の場を広げよう！	13:00~15:30	8・204	センパイに聞いてみよう！「機械」のいいところ	機械工学科、先進機械システム工学科の最先端の研究紹介と現役学生との座談会を通して、キャンパスライフの「夢」を広げよう！
	航空宇宙工学科	10:40~11:20 終日	24・112	航空宇宙や宇宙で工学を学び社会にはどう？ 本物のプロペラ機やリコプターのメカニズムを体験しよう！	航空工学科は航空宇宙産業のみならず様々な産業に貢献しています。そのため学びの場も広いので、実験実習を通して体験してください！ 空を飛んでいる本物に触れ、コックピットに座ろう。操縦桿を動かしてみよう。ドローンのシミュレーターで事前練習もできます。	13:00~15:30 終日	24・112	航空宇宙や宇宙で工学を学び社会にはどう？ 空を飛んでいる本物に触れ、コックピットに座ろう。操縦桿を動かしてみよう。ドローンのシミュレーターで事前練習もできます。	航空宇宙や宇宙で工学を学び社会にはどう？ 本物のプロペラ機やリコプターのメカニズムを体験しよう！ 空を飛んでいる本物に触れ、コックピットに座ろう。操縦桿を動かしてみよう。ドローンのシミュレーターで事前練習もできます。
合同実施	電気エネルギーシステム工学科 電気情報システム工学科	10:40~11:45	8・201	豊かな社会と未来を創造する電気エネルギー	「電気エネルギーシステム工学科」および「電気情報システム工学科」で学ぶ内容を紹介します。学科選びの参考に！卒業後の幅広い就職先や、今後の学科体験についても説明します。	13:00~15:30	8・201	最先端の西エネ、EV、バッテリー、人工衛星を体験しよう！	太陽光発電システムや電気自動車(EV)を使った次世代電力ネットワーク、EV用のモータ、パワーエレクトロニクス、バッテリー、高電圧絶縁の最先端研究を体験します。
	環境土木工学科	13:00~15:30	8・201	未来のエレクトロニクスを築く！電波や音響・ネットワークの技術を体験しよう！	革新的な無線給電の技術や音響を制御する技術を体験します。電波や音響・ネットワークの技術を通じて未来のライフスタイルを創造しよう！	13:00~15:30	8・201	最先端半導体技術と未来の植物工場を体験しよう！	半導体による「光・電気」エネルギー変換(太陽電池、LED)の体験と、LED照明を利用した持続可能な未来の植物工場を特別公開します。
合同実施	建築学科 建築デザイン学科	10:40~12:10	23・211	建築の2学科の紹介、建築デザインツアー	環境土木工学科の学びの特徴や魅力を紹介します。かつはりサーキットの最先端の研究施設、現役学生による学生生活の紹介も。	13:30~15:30	23・211	建築構造・防災・環境GXツアー	研究室から3DCGのモデルを作成するフォトグラメトリを通じて、写真測量の技術の最先端を知る体験型の講義を実施します。

I. 教育・研究の取り組み

「グローバルイノベーターの育成」のための教育システム

アドミッション・ポリシー

国際高等専門学校（以下、本校）は、建学の綱領に掲げる「高邁な人間形成」、「深遠な技術革新」、「雄大な産学協同」の理念に基づき、新たな価値の創出、先進的な工学教育の導入、社会において活躍できる「グローバルイノベーターの育成」を教育の目標としています。

グローバルイノベーターの素養をしっかりと身につけるため、1学年・2学年は全寮制教育により自らが持つ資質や多様な能力の向上を目指し、3学年は1年間の海外留学を義務づけています。4学年・5学年は、金沢工業大学と専門分野やプロジェクト活動において連携することで、最大の成果を生む教育を実践し、世界で活躍できる「リーダーの育成」を目指します。

さらには、「学園共同体が共有する価値」に基づく、行動規範であるKIT-IDEALSに共感し、自らの自己実現を目指す者の入学を求めています。

【求める学生像】

- ① 自ら学ぼうとする意欲・基礎学力を持ち、科学技術やデザインシンキング（課題の発見・解決、ものづくり等）、イノベーション（新しい価値の創造）に関心を持つ人
- ② グローバル社会での活躍に強い関心と探求心を持ち、英語コミュニケーション能力を高めようとする人
- ③ 多様な価値観を理解し、社会や地域の課題解決に意欲を持ち、主体的に行動する人

【入学までに身につけておく能力】

中学校卒業までに学ぶ基礎学力（数学、理科、英語、国語、社会、美術、技術等）を幅広く学習していることが必要です。

【入学者選抜における基本方針】

入学試験は、多様な学生を募集するため「グローバル入試」、「一般入試」、「自己推薦入試」を実施します。

中学校等の課程で学習する知識・技能を重視し、学習の達成度を測るとともに表現力、コミュニケーション力等主体性を持って学ぶ姿勢について、多面的・総合的に評価します。

「面接試験（主に対話）」は、英語及び日本語によりコミュニケーション力等の能力を総合的に評価します。

「学力試験」は、中学校等の課程における数学及び英語の基礎学力を筆記試験（記述）により評価します。

カリキュラム・ポリシー

本校は、グローバルイノベーターの素養をしっかりと身につけさせるために、下記を特色とする「CDIO イニシアチブ」の理念をカリキュラムに織り込み、学生の主体的な体験を重視するカリキュラムを編成しています。また、学修成果の評価については、成果物や試験以外に、活動プロセスや協働状況を評価するためにLMS（学習管理システム）を活用しています。

- ① 課題発見・解決力を高める。
入学時から、Open-ended、即ち決まった答えのない問題について解決策を探るプロジェクトを早い段階でスタートさせる。継続的にデザインシンキングを実践する機会を設けて、課題を発見・定義する経験を繰り返し、幅広い研究成果や調査技術を駆使し、課題の解決へと結びつける力を養っていく。
- ② 科学的思考力、コミュニケーション能力を鍛える。
他者と協働しながらアカデミックな探究の精神を養うこと、批判的・分析的思考の技術を磨くこと、ディスカッションやディベートを含む効果的なコミュニケーション能力を育成することに努める。
- ③ よりよい社会づくりに積極的に参画する態度を養う。
地域とのふれあいを意識し、地域社会や自然・環境を調査・研究対象としたプロジェクトを行い、地域貢献を通じて社会の一員としての自覚を醸成する。
- ④ グローバルに活躍できる英語力を培う。
特に数学、科学、工学における教育伝達的手段としてほとんどの授業を英語で行う。
- ⑤ 異なる文化や、多様な価値観を持つ人々と協働する力を身につける。
文学と芸術に触れる機会や、世界の人々と協働する体験を通じ、創造性と、自身や社会並びに世界に対する深い理解を育む。



ディプロマ・ポリシー

本校は、グローバルに活躍するイノベーターの素養を身につけた実践的・創造的技術者を養成しています。

グローバルイノベーターとは、課題を発見する科学的思考力を持ち、最新の工学知識や洞察力を身につけ、創造的な解決策を用いて新しい価値を生み出す人材です。さらに、さまざまな分野の専門家たちと協働し、文化や価値観の多様性を受け入れ、グローバル社会で活躍する力を持ったプロフェSSIONALでもあります。

新しい価値の発見者“イノベーター”は、工学原理、工学実践を幅広く理解していなければなりません。つまり、工学教育改革を目指す国際的組織「CDIO イニシアチブ」の「Conceive、Design、Implement、Operate」というそれぞれの段階を理解し実践する者です。

具体的には、次の能力及び行動規範を身につけることが求められます。

I. 社会に貢献するリーダーとしての人間力

- ① 革新への挑戦
信念(高い志・強靱な意志)を持って行動し、失敗に臆することなく粘り強く挑戦し続け、自身やチームを成功へと導くことができる。
- ② 社会的使命感
地域社会や自然環境に関心を持ち、社会的な課題の解決に使命感を持っている。
- ③ リーダーとしての高潔
グローバルな環境でリーダーシップを発揮する一方で、謙虚さや他者への尊敬、思いやりを持ち、信頼される人格を備えている。

II. グローバルに活躍できるコミュニケーション能力

- ① コラボレーション
チームで目標を達成するために、自分の役割と提供できる価値を認識し、積極的に貢献する。
- ② 多様性とアイデンティティ
多様な文化や価値観を持つ人々と協働するための教養を備えつつ、自身の考えを持っている。
- ③ 心を動かす力
自身の考えを論理的にまとめたうえで、相手の立場や気持ちを考慮しながら効果的に伝えることができる。

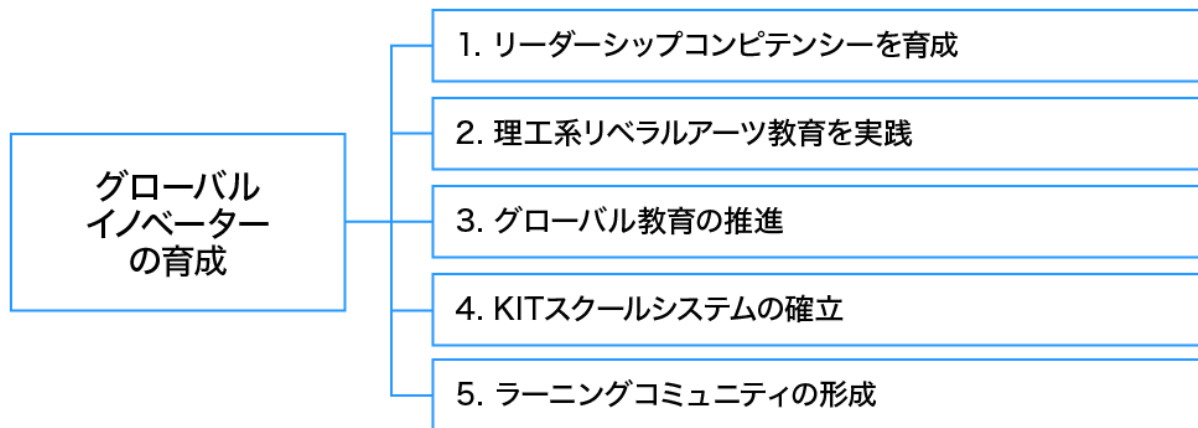
III. イノベーターに相応しい卓越した科学技術力

- ① 価値創出
幅広い学問領域の探求とデザイン思考の実践により、これまでにない価値を創出することができる。
- ② 自然・社会・産業と結びつけた科学的思考
科学技術を自然・社会・産業の面から理解・分析し、自分の考えを述べるができる。
- ③ 常に学び続ける姿勢
科学・工学の基礎を土台として、常に新しい知識・技術を獲得する姿勢を持っている。

これらの認識の下、本校の教育理念と教育目的に沿って設定された授業科目や教育プログラムを履修し、基準となる単位数を取得することが卒業の要件です。

国際高専 2025 In Sight

本校は、我が国の先駆となる理工学教育を着実に成功へと導き、KIT スクールシステムを基盤とし更なる発展を遂げることを目的に「国際高専 2025 In Sight」を策定しています。



国際高専 2025 In Sight は、<https://www.ict-kanazawa.ac.jp/about/2025-in-sight/> で紹介しています。

グローバルイノベーターを目指す高専から大学院までの5 + 4の9年間一貫教育
(4つの学びのステージ)



<ステージ1:白山麓キャンパスでの学び>

「白山麓キャンパス」は1年生・2年生の学生、教員、スタッフ、さらに地元の方々と交流する「英語によるラーニングコミュニティ」です。ここでは、徹底した英語スキルの取得を、英語科目だけではなく、数学、理科、共創科目を含め、白山麓キャンパス全体の中で展開していきます。確かな学力を身につけるエンジニアリングデザイン教育を通して地域社会の多様な課題にチャレンジすることで、様々な価値観を尊重し柔軟な思考を育みます。さらに、豊かな自然環境の下、学生と教員が寝食を共にする全寮制による集団生活や地域の方々との交流を通して、思いやりの心、リーダーシップ、アイデンティティなどを育み、強靱な人間形成に努めていきます。

学びの特色

理工系リベラルアーツ教育

世界のイノベーションシーンの教育実践としてデザインシンキングや「CDIO」を取り入れた『エンジニアリングデザイン教育』です。予測困難な時代にあっても自分を活かしていける、自律性、チャレンジ精神、リーダーシップ、チームワークといった人間力と、新たな知識を獲得し、それを活用して多様な課題を解決していく力を身につけます。

理工学的思考力を身につける「STEM教育」

従来型の教育で別々に捉えていた数学、物理、化学といった理系科目を総合的に学ぶことで、理工学的思考力を身につける新しい教育の方法です。

夜の学校

月曜日～金曜日の19時30分～21時30分には、ラーニングセッションが行われます。学習内容の確実な定着と次回授業に積極的に参加するうえでの重要な課外学習です。もちろん担当教員がいますが、学生同士が教え合う場もあります。また、英語で行われる授業も多いことから英語のサポートも各自の習熟度に合わせて行います。さらに、授業以外で行われるプロジェクト活動を学生自らが発案し、活動していく時間にもなります。

<ステージ 2:ニュージーランドへ留学>

3 年生は全員がニュージーランド・ダニーデン市にある国立オタゴポリテクニクへ留学し、世界中から若者が集まる環境で学びます。

現地での生活は地元の家庭にホームステイします。企業でのインターンやプロジェクト活動など様々なプログラムが準備されています。

学びの特色

オタゴポリテクニク

ニュージーランドで最も歴史のある国立の高等教育機関で、国際高等専門学校（以下、本校）とは 2002 年から協力協定を結んでいます。ポリテクニクとは実社会で即戦力となる知識と技術の修得に重点を置いた学校で、企業からの高い評価を得ています。オタゴポリテクニクでは、約 4,000 名の学生が在籍し、世界 27 カ国から約 230 名の留学生が学んでいます。

留学スケジュール

4 月	白山麓キャンパスで留学前集中講義「グローバルスタディーズ」を履修し、海外での学修や生活をしていくための準備を行います。留学中は、地元の家庭にホームステイします。
5 月 6 月	オタゴポリテクニクに到着後 2 カ月間は、「ファンクショナルイングリッシュ」及び「工学基礎実技」を履修します。これは通常の授業に入るための事前学修となります。
7 月～	オタゴポリテクニクの学生たちと一緒に、「テクニカルイングリッシュ」と、実技中心の専門科目を選択し履修します。
12 月～	本校の学生のために設けられた「エンジニアリングデザインⅢ」にて、1 カ月程度のインターンシップあるいはプロジェクト活動を行い、その後 1 年間の成果を論文にまとめ、プレゼンテーションを行います。



<ステージ 3:大学生と共に学ぶ>

4 年生・5 年生はより高度な English・STEM を学びます。また、金沢工業大学（以下、金沢工大）の学生と連携した研究やプロジェクト活動を行います。

学びの特色

世代・分野・文化を超えた共創教育

金沢工大はプロジェクトデザイン教育を軸として「世代・分野・文化を超えた共創教育」を実践しています。本校の 4 年生・5 年生では金沢工大の学部 4 年生や大学院生と連携した「高専・大学クラスター研究プロジェクト」に取り組み、Society 5.0 の基盤となる AI や IoT、ロボティクスなどの専門分野の実践力を高め

ます。世界の舞台で活躍できる能力を育む「アクティブでオープンな夢考房キャンパス」を実現し、学生はそれぞれの夢やビジョンの実現を目指してアクティブに知的創造活動に取り組みます。

Challenge Lab

高専・大学クラスター研究プロジェクトの拠点

Challenge Lab は「高専・大学クラスター研究プロジェクト」の活動拠点の一つです。社会性の高い研究テーマに、学部・学科を超えて学生や教職員が集まり、新しい技術に挑戦しています。



<ステージ 4:企業や地域との共創>

企業や地域との共創（研究夢考房活動）

高度な研究環境で、最先端のイノベーションプロジェクトに取り組む

本校卒業後は金沢工大 3 年次に編入、さらに大学院へ進み、高度な研究環境で最先端のイノベーションプロジェクトに取り組むことができます。大学院では、ロチェスター工科大学への留学プログラムがあります。ロチェスター工科大学とはデュアルディグリープログラムも用意されています。また、WACE（世界産学連携教育協会本部：米国ボストン）にも加盟し、国際 COOP 教育を実施しています。



正課・課外教育プログラムの充実と実施

エンジニアリングデザインI(1年生)の最終発表会を開催

人に役立つものづくりを目標に1年間取り組んできた1年生の授業「エンジニアリングデザインI」の「最終成果発表」を令和7(2025)年1月24日(金)に行いました。各チームはターゲットユーザーへのインタビュー調査などを通して、そこに潜む問題や要望を発見・把握し、それらを解決する装置等を製作して、プレゼンテーションに臨みました。

【温泉施設「比咩(ひめ)の湯」Aチーム】

本チームは温泉従業員(以下、温泉スタッフ)をサポートする「温泉施設英語案内システム」を製作しました。本校敷地内には「比咩の湯」という温泉施設があります。学生や地元住民の他、観光客も利用する施設です。本チームは温泉スタッフへのイ



温泉施設英語案内システム

ンタビューを通して、初めて「比咩の湯」を訪れる外国人のお客様の中に、利用料金やチケットの購入方法、温泉の使い方やルールが分からない方が多く、英語で説明するのが困難だという点に着目しました。そこで、海外からのお客様向けに入浴料の支払い方や温泉の入り方などを英語の音声・字幕付きの動画で説明するシステムを製作しました。アプリが動作するタブレットの周囲をかわいらしく飾り付け、人が近付くのを検知して音声案内するプログラムも組み込みました。動画にはタイからの留学生が出演し、国際色豊かなプロジェクトになりました。

【温泉施設「比咩の湯」Bチーム】

本チームは「温泉情報ガイドマスコット」を製作しました。Aチームと同様に本チームも温泉スタッフを手伝う製品を製作しました。温泉スタッ

フは、お客様に「比咩の湯」温泉について説明する機会が頻繁にあります。本チームはインタビューを通して、温泉スタッフが外国人のお客様へ「比咩の湯」の魅力の伝え方やコミュニケーションに苦労している場面があることが分かりました。



温泉情報ガイドマスコット
を紹介する学生

そこで本チームは「温泉情報ガイドマスコット」を制作しました。マスコットには白山に生息している「オコジョ」をモデルに採用し、手に抱えている桶のなかにパンフレットやグッズを入れることができます。マスコットにはスピーカを内蔵し、あらかじめ学生による英語と日本語で録音した温泉紹介メッセージを流します。当初は温泉施設内を移動するロボットを製作する予定でしたが、都合により設置するタイプに変更しました。

【体育館チーム】

本チームは、体育館の片付けをサポートする「バドミントンのシャトル回収ロボット」を製作しました。体育館をよく使用する先生方にインタビューしたところ、体



シャトル回収ロボットを
体験する教員

育館をもっと綺麗に保ちたいとの声がありました。バドミントン部が放課後の練習後に体育館に散らばったシャトルコックを回収してケースに入れて片付けるのが大変ということで、シャトルコックを適当に投げ入れるとケースに自動的に収めるロボットの製作に挑戦しました。自動でケースに収めるのは難しく実現できませんでした。自動でものを運ぶことの難しさを学ぶことができました。特にシャトルコックの羽根の部分は自動搬送の難易度が高い形状であり、実現できな

かったことをしっかり見直して、分析する大切さも学びました。

【メーカースタジオチーム】

本チームは「片付け時間お知らせロボット」を製作しました。本校にはメーカースタジオと呼ばれるモノづくりのための施設があります。放課後はいつもモノづくりが好きな学生たちで賑わっています。ただ、活動に集中していると、メーカースタジオを管理している教員が学生たちに



片付け時間お知らせ
ロボットを操作する学生

片付けの時間を促しても、片付けに取り掛からなかったり、夕食の時間が過ぎてしまい食事を摂り忘れたりすることがしばしばあるようです。そこで、メーカースタジオチームは、片付け時間が近づくと、現在時刻を表示しながら音声案内をしてスタジオ内を移動するロボットを製作しました。大きな時刻表示と、ちょっとうるさいくらいの音声案内が素敵なロボットになりました。本チームにはNHK高専ロボコンに参加した学生が何人かいることもあり、タイヤによる移動、時刻表示などの複数の機能がきちんと動作するロボットを製作することができました。

発表は全チーム英語で行い、外国人教員との質疑応答も英語で行いました。日本の中学校に通っていた学生たちは、英単語が出てこないこともありましたが、入学からの1年間の生活で身に付いた英語力を使い、自ら製作した製品のプレゼンテーションを立派にこなしました。

4・5年生のエンジニアリングデザイン最終発表会を開催

金沢キャンパスに通う国際高専4・5年生のエンジニアリングデザイン最終発表会を1月22日(水)に開催し、学生たちが研究成果を披露しました。5年生はポスターセッション形式、4年生はプレゼンテーション形式で、それぞれ英語で行いました。

■5年生

Development of Scratch Programming Materials to Control Spherical Robots by Image Recognition

必修化した小中学校でのプログラミング教育に対応する基礎的なプログラミング技術と画像認識の教材を開発しました。使用するのはScratchの拡張機能とブロックプログラミングで、Sphero(スフィロ)と呼ばれる球体のボールを操作します。例として開発したのは鬼ごっこゲームで、Spheroを指で操作して鬼から逃げます。

若いうちにScratchに触れるハンズオン教育を行うことで「難しそう」というハードルを取り払い、プログラミングや画像認識の基礎知識のみならず課題解決力を楽しみながら伸ばしました。



開発したウェブサイトを実際に使用する学生

Development of a Learning Website to Improve Secure Coding Skills by Fixing AI-Generated Vulnerable Code

サイバー攻撃が増加傾向にある現在、安全性の高いプログラミングコードを書ける人材が求められています。この需要を満たすべく開発したのはAIを活用してプログラミングの練習ができるウェブサイトです。5つのプログラミング言語に対応した本サイトはChatGPTを使って生成した「脆弱性が高いコード」を、練習問題を解く要領で修正することで、スキルを磨くことができます。書いたコードはAIが評価し、的確にフィードバックするなどアフターケアも充実していました。

The Effect of Music on Concentration while Studying

勉強中に音楽を聴くことで効率が上がるのか研究しました。使用した機材は脳波 (EEG) を測定する EMOTIV 社のヘッドセット「Insight」で、様々なジャンルの音楽をかけて脳波を記録しました。平均的には5人の被験者が最も集中できたジャンルはクラシック音楽という結果になりましたが、残念ながら個人差が大きく結論を導き出すには不十分でした。「音楽が集中に何らかの影響を及ぼしていることは確認できたが、ジャンルそのものより被験者の好みが想定以上に影響している」と感想を述べました。

Development of a Scrap Material Management System

レーザー加工機は国際高専で最も使用頻度が高い機械ですが、便利である反面、加工したアクリルや木材の端材が残ってしまう場合があります。余った端材を画像データとして取り込み、ユーザーが切ろうとしている図形を自動的に配置するシステムを開発しました。撮影ブースに端材を設置するとアルゴリズムが図形を自動的に回転・配置します。課題として計算に時間がかかってしまう場合があり、回転の角度を調整するなどの改善点があげられました。

Predicting Stock Price Using Machine Learning

投資で資産運用したい人のために機械学習によって株価の動きを予測するシステムを開発しました。日経平均株価、スペシフィック・リターン、RSI 14、ドルと円の為替レート of データを元に、グレンジャー因果性検定、ファクターモデル、LightGBM で分析を行います。残念ながら明確な結論にはたどり着けませんが、改善すれば今後の経済的安定を実現できると考えています。

Development of a Simulator Considering Airflow for Safe Navigation of Small UAV in Mountainous Areas

現在、中山間地域での配達員不足の解決策としてドローンによる荷物の搬送に期待が寄せられています。課題は山岳地域の複雑な気流で、これに対処すべく中山間地域の気流をシミュレートするプログラムを作りました。流体力学で用いられるナビエ-ストークス方程式で気流を予測し、

ラーエディシミュレーションで乱流を計算します。プログラムに現在の風の状況を入力すると色分けされた地図が表示されます。



研究内容を説明する学生

現在は数百メートル四方しか計算できませんが、能登半島地震のような災害時に孤立集落へ物資を届ける場合はピンポイントに地域を絞れるため、活躍の場があると考えています。

Development of an ADHD Brain Training Game System

ADHD (注意欠如・多動症) 患者が注意力を鍛えることができる脳トレーニングゲームを開発しました。プレイヤーは画面に映る図形をボクシングの要領でパンチし、Kinect がその動きを読み取ります。装着した EEG ヘッドセットが



学生(奥)が作ったゲームを体験する教員(手前)

AF4 (右前頭部) と AF3 (左前頭部) の脳波を計測し、注意力を示す TBR (シータ/ベータ比) を算出して効力を測りました。残念ながら今回の実験では TBR に有効な変化が見られませんでした。計測改善のヒントを得られました。

Serious Game for Fire Extinguisher Training

日本は低い火災件数に対して死亡率が高い。これは避難が遅れがちな高齢者が多いことと、初期消火の訓練が少ないことが原因です。低コストかつ正しい初期消火の知識を身に付けられる教育用ゲームを Unity で開発しました。Blender で作った 3D モデルに UV マッピングでテクスチャを付け、ピンを抜くなどの正しい手順や火の根本を狙う必要があるなど本格的な作りに仕上げました。ブースでは開発したゲームを実際に遊ぶことが可能で、発表を聞いた参加者が試遊しました。

■ 4年生

XR Display Research

リモート会議・授業中の人間の視線を研究対象にしました。2D画面上の人間の顔は、角度が変わっても目が合っているように感じる「モナ・リザ効果」が存在し、それによって情報が正しく伝達されないと考えました。現実世界とは違う人間の視線が視聴者に与える影響を調べ、コロナ禍が収まっても普及し続けるバーチャル環境を、よりリアルに近づける方法を探りました。発表では3Dスキャナーで取り込んだマネキンの頭部でモナ・リザ効果のデモンストレーションを行いました。

Bee-hive Management System

養蜂家が悩まされているミツバチのダニ被害を解決する研究を発表しました。損害は甚大で、巣箱のミツバチが全滅することも



除湿システムをプレゼンする学生

あります。ダニは高温多湿を好み、養蜂で用いられるミツバチは西洋生まれなため、日本の高い湿度には羽で換気を行う程度しか対抗手段を持ちません。そこで巣箱を除湿するシステムを考案し、その第一歩として巣箱の湿度を測定する装置を開発しました。

使用したのは Raspberry Pi、Env3 センサ、Pa. HUB ハブユニット、M5stack マイクロコントローラで、複数のセンサが感知した湿度をグラフで表示し、平均値が高ければ空調ファンを動かします。今後の課題は正確性と電源の確保です。

Live Motion Capture Streaming

31号館に導入されたばかりのモーションキャプチャーを利用して、ライブ動画配信サービスで3Dモデルをリアルタイムで動かすシステムの構築を目指しました。使用したソフトは OptiTrack、Motive、Unreal Engine で、被写体の動きをモーションキャプチャーで取り込んで3Dのキャラクターを動かす、それをライブ配信します。AIにオリジナルのキャラクターを描いてもらい、Meshy.aiで3Dモデル化します。これを Unreal Engine に取り込みスケルトンを設定しました。その後は OBS 上に様々な学校の背景を映し

て、バーチャル学校案内のライブ配信を試みました。

ED 4 Part 2

エンジニアリングデザイン IV の活動として2人の学生で高専ロボコンに出場しました。2024年の高専ロボコンは2台のロボットを製作し、ロボット1に投げ飛ばされたロボット2がボールや箱を回収する競技でした。二つのエリアの間には「川」があり、ロボット2は川を乗り越えて戻ってくる必要があります。

少人数チームなため試作機を複数作れないと判断し、ロボット2はあえて本番機で一発勝負する決断を下しました。その代わりに、ロボット1は様々な投げき方法を試しながら5台の試作機を製作し、バネで強化した平衡錘投石型の機構が完成しました。投げ飛ばされたロボット2は着地の衝撃をエアバッグで吸収し、箱を回収したあとアームを伸ばして「川越え」する作戦をとりました。

しかし、やはり人数不足で時間に追われたためロボット2の調整が完璧ではなく、当日に急遽義務付けられた改造に対してエアバッグのサイズが大きすぎたため、本番でひっかかってしまいました。それでもその独自性とサイズの大きいロボットを飛ばすチャレンジ精神が評価され「デンソー特別賞」を受賞しました。

STEM Fair2024 を開催

国際高専白山麓キャンパスで9月18日(水)・25日(水)の2日間に1年生と2年生のSTEM Fairを開催しました。本校では夏季休暇中の宿題として、授業の内容にとらわれないSTEMプロジェクトを課しており、その成果発表の場としてSTEM Fairを開催しています。STEMプロジェクトは自分の興味あるテーマについて、実験や製作を通してより知識と技能を深めてほしいと期待しています。

STEM Fairでは、学生は自分のテーマとその成果についてポスターを英語で製作し、ポスターセッションの形式で発表します。ネイティブの教員には英語で説明しなければならず、発表の準備にも時間がかかるため、学生にとってはかなり大変な発表会です。

評価については、国際理工学科の理科学科教員が審査員を務め、本校の全教員を招待し、発表を聞くことができます。「研究内容」「ポスターの出来」「発表態度(英語含む)」を総合して評価し、優秀な評価を得た学生には賞状と副賞を贈ります。



自作の風洞実験装置のデモンストレーションを行って発表する太田さん(左)

【2年生の受賞者】

Best STEM Project Award 1st Place : 太田光貴(おおたみつぎ)さん

Best STEM Project Award 1st Place : 安田 萱(やすだかや)さん

SDG's Award : 中澤琉月(なかざわるうな)さん

Special Award : 青山貴恵斗(あおやまきえと)さん

Special Award : 石田ゆら(いしだゆら)さん

Special Award : 江口太一(えぐちたいち)さん

Special Award : 村井優風香(むらいゆうか)さん

【1年生の受賞者】

Best STEM Project Award 1st Place : 五百蔵蒼天(いおろいそうま)さん

Best STEM Project Award 1st Place : 万江琴莉(まえことり)さん

SDG's Award : ラパンラット・パンタワットさん

Special Award : 中澤円香(なかざわまどか)さん

1年生は自分の興味を追求したユニークで多様なプロジェクトが多く、もう少し踏み込んだ実験や考察があるとより良くなる発表が多く見られました。2年生はより科学的なテーマとなり、データの取得とグラフ化がしっかりできていました。令和6(2024)年度は、海外英語研修に参加した学生はSTEM Fairではなく、成果報告会で発表を行ったので、STEM Fairに参加した人数は少なかったですが、全体的に非常に良くできていました。また、ほとんどの学生が前年度のプロジェクトと比べると、内容、発表ともにレベルアップしている様子が窺えました。将来の高専5年生・大学での研究活動のための第一歩として十分な成果でした。

ICT Startup Competition 2025 を開催

本校はグローバルイノベーターの育成を目指し、白山麓キャンパスと金沢キャンパスにビジネスアイデアを形にするためのメーカースタジオの環境整備を進め、更にはイノベーション基礎やビジネスマネジメント基礎という科目を整備し、ビジネスマインドの醸成にも力を入れています。

2月21日(金)に第2回となる ICT Startup Competition 2025 を金沢工業大学のイノベーションホールで開催しました。なお、同イベントは全て英語で行い、質疑応答も英語で実施しました。

当日は、パネルディスカッションを午前中に行い、講師として北陸先端科学技術大学院大学未来創造イノベーション推進本部特任教授の内田史彦教授、タイ王国のスタートアップ支援機関であるナレッジ・エクスチェンジよりマタス・ダニエラビシヤス氏、TSFC Securities Public Company Ltd. 副社長のキッティナンド・ピタヤプリチャング氏、スタートアップ・ウィークエンド金沢リードオーガナイザーの増井大樹氏が登壇し、海外のスタートアップ事情並びに、日本のスタートアップ事情について活発なディスカッションを行いました。

特に、日本ではスタートアップ事業は始まったばかりで、近年日本政府も5ヵ年計画を打ち出し、国内におけるスタートアップの創出に対し多額の資金援助を含め活発な動きがあることが紹介されました。

また、午後のセッションでは、ベトナム、マレーシア、タイ、日本の各大学や高専の学生によるピッチングイベントを開催しました。今回はアジア地域の学生も参加し、オンラインと対面両方を活用したイベントとなりました。



笑顔で記念写真に納まる講師と学生たち

ピッチングでは、3分間の発表と、9分間の質疑応答を行い、パネラーを務めた各講師による鋭い質問に対し、発表者が戸惑いながらも真剣に受け答えしました。

本校からも3チームが登壇し、それぞれ緊張しながらも堂々と発表し、審査員からも高い評価を得ることができました。

第2回目となる今回は、海外からの学生も参加した初めての国際的なイベントとなりました。各国の学生たちは自国の抱える社会的問題をどう解決するかといったビジネスアイデアを紹介するチームも多く、魅力的なピッチングが多く披露されました。

学生たちにとっては、このようなピッチングイベントを通じて、自身のアイデアがどのような社会価値を生み出そうとしているのか、これまであまり考えた事のない、リアルな視点で物事を考えるきっかけになりました。

本校では、今後も高度な技術力を身に付けつつ、その力をどう社会に生かしていくかといったビジネスマインドも兼ね備えた、グローバルイノベーターの育成を推進します。



笑顔で記念写真に納まる講師と学生たち

「第2回高専起業家サミット」に国際高専から2チームが出場

独立行政法人国立高等専門学校機構と月刊高専が主催する、第2回高専起業家サミットが2月24日(月・祝)と25日(火)の2日間に亘り東京の一橋講堂で開催され、本校の2チームを含む全国の高専生36チームが参加しました。

本サミットは、起業を目指す全国の高専生が一堂に会し、ビジネスプランの発表や相互交流を行う場で、令和5(2023)年度に始まりました。本校は2年連続の出場となりました。

多様な社会課題に挑み、地域コミュニティのより良い未来を築くアイデアを発掘・支援する「ソーシャルドクター部門」に“PlayGround”というチーム名で1年生のLapananrat Pantawat(ラパンラット・パンタワット)さんをリーダーに、2年生の中山尚(なかやましよう)さんと村井優風香(むらいゆうか)さんの3人が出場しました。また、既存組織の枠組みを越えて新たな事業や価値を創出する人材を発掘・支援する「イントラプレナー部門」に“キウイ同好会”というチーム名で、1年生の万江琴莉(まゑことり)さんをリーダーに中澤円香(なかざわまどか)さんの2人が出場しました。

事前に各チームとも主催者側が選任した社会人メンターによるオンラインメンタリングを2回受け、そのアドバイスをもとに、Tossa Mebusaya 准教授、Sangenchai Apirak 助手、Rattiya Mebusaya 氏から発表内容やプレゼンテーションに関する指導を受けて当日に臨みました。

初日の24日(月・祝)は翌日の発表準備やポスターの掲示のあとに開会式と交流会が行われました。交流会では全国から参加している高専生同



他校の学生と交流する本校生

士で連絡先を交換するなど、積極的にコミュニケーションを取りました。

25日(火)に部門ごとに分かれて各チームがプレゼンテーションを行いました。プレゼンテーションは、3分間のピッチと審査員による6分間の質疑応答の合計9分間で行われました。また、並行して別会場で開催されたポスターセッション



記念写真に納まる参加学生 (左から)万江さん、中澤さん、パンタワットさん、村井さん、中山さん

では発表内容に関する様々な質問に丁寧に回答しました。

“PlayGround”チームのLapananrat Pantawatさんは英語でプレゼンテーションし、タイからの留学生として日本の生活で感じた実体験をもとに海外から日本に来た外国人が安心して日本のコミュニティに参加できるビジネスプランを提案しました。質疑応答は中山さんが担当しました。



ポスターセッション会場
来場者に対応する中山さん

“キウイ同好会”チームの万江さんは、ニュージーランドに留学をしている本校の3年生が感じている課題をもとにニーズを確認し、香りのお守りというビジネスプランについて発表しました。

両チームとも表彰には至りませんでした。他校の発表内容に大いに刺激を受けました。

高専ロボコン 2024 東海北陸地区大会で「デンソー特別賞」と「マブチモーター特別賞」を受賞

アイデア対決・全国高等専門学校ロボットコンテスト 2024 東海北陸地区大会が 10 月 5 日(土)、6 日(日)に静岡県沼津市で開催され、金沢キャンパスの A チーム「X A ㄐ P T A ㄐ ㄐ ㄐ ㄐ ㄐ ㄐ」(読みはハイリタイシュウサンゼン)と、白山麓キャンパスの B チーム「飛び砲台」が参加しました。

片道 8 時間のバスでの長旅となりましたが、参加した学生たちは移動の疲れを見せることなく、現地でも精力的にロボットの調整に取り組みました。今回の大会のテーマは「ロボたちの帰還」で、ロボットがロボットを飛ばし、飛ばされたロボットがオブジェクトを回収して帰還するという、難易度の高いものでした。特に、飛ばされたロボットが着地の衝撃で壊れることが、練習中や本番でも多く発生しました。両チームの学生は、ロボットが壊れる度に修理し、不具合を改善し、より良いロボットとなるように製作に取り組んできました。

A チームは衝撃吸収にエアバッグを用い、帰還時にはクレーン車のようなアームを伸ばす仕組みのロボットを製作しました。ただ、メンバーが 3 人と少ないこともあり、ロボットの調整をしっかりと最後まで行うことができませんでした。大会当日も会場で調整作業を進めましたが、惜しくもエアバッグをつかってロボットがふんわり着地する様子を見せることはできず、予選リーグ 2 敗という結果となりました。しかし、少ない人数

での活動にも関わらず、ロボットに様々な工夫を取り入れたことを評価され「デンソー特別賞」を受賞しました。



横断幕を手を駆け付けた鹿田校長(左上)と国際高専応援団

B チームのロボットは着地で上下が逆さまとなっても、ロボットが動作を継続できるように構造を工夫し、試合でもその様子を見ることができました。予選リーグでは 1 勝 1 敗の成績となり、決勝トーナメントへの進出は逃したものの、若い学生たちの取り組みが評価され「マブチモーター特別賞」を受賞しました。



真剣に試合に臨む A チーム

両チームともに全国大会への進出は叶いませんでしたが、日頃の活動の成果を十分に発揮できました。



「デンソー特別賞」を受賞した A チーム



「マブチモーター特別賞」を受賞した B チーム

全国高専プロコンで敢闘賞を受賞

全国高専プログラミングコンテストが10月19日(土)から20日(日)に行われました。第35回を迎えた今回は奈良高専が主管し、「なら100年會館」で大会が開催されました。本校からは、課題部門に1チームが参加しました。2年生の江口太一(えぐちたいち)さん、角隼(すみはやと)さん、中澤琉月(なかざわうるうな)さん、1年生の五百蔵蒼天(いおろいそうま)さん、藤原聖也(ふじわらせいや)さんによる学年混合のチームでした。

今回の課題部門は「ICTを活用した環境問題の解決」というテーマで行われました。本校のチームは「だすぼす -農家と家庭をつなげる堆肥共有プラットフォーム-」という作品で出場しました。「だすぼす」は、スマートコンポスターとモバイルアプリケーションで構成されるシステムで、スマートコンポスターは自動化により生ごみを堆肥化する手間を省き、モバイルアプリはコンポスターとの同期を行う他、作られた堆肥を必要とする農家や家庭菜園を行う人と、コンポスターユーザーをつなぐ、情報・物々交換のためのプラットフォームとなるシステムです。一般家庭が生ごみを簡単にコンポストにできるようにし、それを流通させることで、本来捨てられるものであった生ごみを気軽に有効活用できるようにし、家庭から環境問題に取り組めるようにしたものです。

本選では、初日にプレゼンテーション審査、2日目に3回のデモンストレーション審査とマニュアル審査が行われ、本校は敢闘賞を受賞しました。

他校の参加作品の完成度・技術レベルが非常に高い中でも、本校の作品は審査員から良い評価を得られましたが、実際の運用試験等までは行えていなかったことが惜しいポイントとなりました。しかし、今回の作品はちゃんと動くコンポスターとモバイルアプリケーションの完成まで持っていったので、学生たちは非常に良くやったといえます。また、多くの企業人と意見交換できたことが学生にとって良い刺激になりました。



会場前で記念写真に納まる学生



プレゼンテーションをする学生



ポスターを使って「だすぼす」の説明をする学生

国際高専が京都の e-kagaku 国際科学教育協会と連携協定

本校は、令和6(2024)年5月7日(火)に一般社団法人e-kagaku国際科学教育協会(京都市伏見区、代表理事:北原達正)及び株式会社サイエンス・ラボ(京都市伏見区、代表取締役:北原達正)との連携協定調印式を金沢キャンパスの校長室で執り行いました。

e-kagakuは「科学を通じた人間教育」を目指して、AI・データサイエンス、ICT、IoT、科学コンテスト等の開催や国内外の科学教育団体・ロボット関連団体との協力、交流事業を実施しています。なかでも世界初のジュニア衛星プロジェクト「Space Satellite Project」は、超小型衛星に世界で初めてレーザー反射装置を搭載し、世界のレーザーサイトと協力して正確な軌道を求める、中高生が主体のクラブ活動で、令和7(2025)年に打ち上げが予定されています。また、サイエンス・ラボは各地の科学教室のコンサルタントや教材開発に取り組む企業です。本プロジェクトに取り組んできた山本叶夢(やまもと・かなむ)さんが2023年に本校に入学し、引き続き本プロジェクトの設計開発メンバーに選出されたことがきっかけとなり、今回の協定締結に至りました。

◇協定の趣旨および今後の展望

スポーツでは13歳、14歳でもオリンピックの選手が出たり、金メダルを獲得したりしています。なぜスポーツでそれができるかというと、最初から大人と同じものを使って、同じゴールに向かい、年齢に関係のない予選があるからです。一方、科学は残念ながらそうはなっていません。スマートフォンはリチウムイオン電池やセンサ、カメラ認識等の技術で構成されていますが、海外では子どもの頃からそういう技術を使って開発をしています。3Dプリンターを当たり前に使っている海外と、特殊な人が使うと思われる日本ではそもそもスタートラインが異なります。

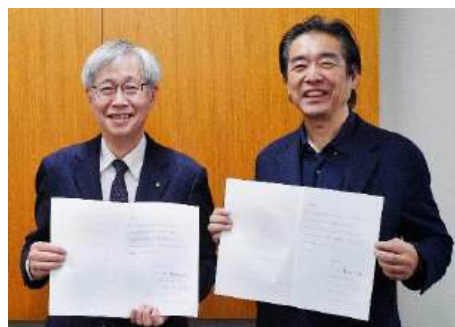


協定書にサインする鹿田校長(左)と北原氏

山本さんが使うシミュレーションソフトMATLABは世界の自動運転企業の70%に採用されていて、これらの企業が集まるシンポジウムで山本さんは賞をとり、その後、国際高専に進学しました。中学生のときにそういう実績を持った子を更に伸ばしたり、ステージを上げたりするため、e-kagakuと連携協定を締結しました。

小学生から、自動車メーカーや宇宙航空研究開発機構(JAXA)でも採用されているソフトウェアを使ってJAXAと共同研究し、中高生主体で衛星を打ち上げるプロジェクトを実施しているe-kagakuと連携することにより、山本君だけではなく国際的に活躍する人材を伸ばしていきたいと期待しています。

本協定を基に、10月27日(日)に金沢キャンパスにて、小学3年生から中学2年生までを対象に「スペースロボットを体験ここにしかないチャレンジ宇宙探査ローバーを作ろう」と題し、自由な発想で本物の宇宙探査ロボットと同じロボット作りを行うイベントを開催しました。



協定書を持って記念写真に納まる
鹿田校長(左)と北原氏

「知的財産に関する講話」実施

金沢キャンパスで、7月5日(金)午後3時10分から4・5年生を対象として「知的財産に関する講話」が実施されました。講師にはINPIT石川県知財総合支援窓口の弁理士である橋爪慎哉(はしづめ・しんや)氏をお招きし「知的創造活動と知的財産～私たちの暮らしを支えるために～」と題して講演をいただきました。

前半は資料とパワーポイントに基づいて、知的財産制度の概要と知的財産の種類についての説明がありました。知的財産には経済産業省が管轄する「特許・実用新案」「意匠」「商標」と文部科学省が管轄する「著作権」があり、それぞれ法律により保護されていることが述べられました。一言に知的財産といっても種類があり、申請方法や、権利が保護される期間も異なり、学生たちも話しに聞き入っている様子でした。

後半はWEBサイトを利用して実演を交えての講演となりました。利用した特許情報プラットフォーム「J-PlatPat」は、特許・実用新案、意匠、商標の情報を検索・閲覧できるサービスです。こちらをもとに実際に登録されている情報を検索によって絞り込み、自分が検討している特許に関連する先行事例をみつけ、確認、比較検討する方法を実演されました。

今回の講演が、日頃学生が自ら創造したものの価値を確認・認識し、その権利を守ることに繋がるとともに、学生による知的財産申請が増加することを期待します。



知的財産について講話する橋爪氏

白山麓キャンパスでスポーツフェスティバルを開催

白山麓キャンパスで1、2、4、5年生合同の「スポーツフェスティバル」を6月22日(土)に開催しました。例年、スポーツフェスティバルは金沢キャンパスで行っていましたが、今回は初めて白山麓キャンパスで開催しました。4、5年生にとっては、久しぶりに白山麓キャンパスに戻り、1、2年生とスポーツを楽しむ良い機会となりました。当初は、50人近い学生がバスケットボール・バレーボールコート1面とバドミントンコート3面だけで全員が競技に参加できるのか心配でしたが、全員プレーできるように学生会が工夫しました。

午前中は室内でバスケットボール大会、外では鬼ごっこを楽しみました。芝生のグラウンドで鬼役の教員たちは学生たちを追いかけました。学生たちの逃げ足に追いつくのは大変でした。体育館で行われたバスケットボールは激しい試合となり、下級生が先輩に挑戦する姿が印象的でした。

午後は、まずバドミントンの試合が行われました。今年は例年以上に白熱した戦いが繰り広げられました。多くの1、2年生は放課後にバドミントンの練習に励みました。練習の成果が実を結び、4、5年生よりも強いことを証明しました。

最後にバレーボール大会が開催されました。まずは学生チーム同士が試合し、優勝した学生チームは教員チームと対決し、楽しい試合が繰り広げられました。

この素晴らしいスポーツフェスティバルを計画してくれた学生会、そしてベストを尽くしてくれた学生たちのおかげで、参加者全員が競技を楽しむことができた一日となりました。



白熱した試合をする学生

スポーツフェスティバル第1回駅伝大会を開催

令和6(2024)年度スポーツフェスティバル第1回駅伝競技大会が、11月9日(土)に白山麓キャンパスランニングコースで開催されました。これは、白山麓キャンパスの1、2年生と、金沢キャンパスの4、5年生をミックスし、教職員も含めた1チーム15人でチームを構成して、両キャンパスの交流を図ることを目的に企画されました。

ルールは1周700メートルのコースを、1チーム合計30周をタスキで繋ぐというものです。また、一人必ず1周は走り(15周分)残りはチームで相談をして分担します。

当日は、天候にも恵まれ、学生・教職員共に素晴らしい走りでも盛り上がりました。特にタスキを繋ぐ場面では、多くの激励の声が上がり、各チームのランナーの走りにも一層力が入りました。初めての試みでしたが、大きなトラブルもなく無事終了することができました。



素晴らしい走りを見せる学生と教員

白山麓キャンパスでハロウィンイベントを開催

毎年ハロウィンが近づくと、白山麓キャンパスの校舎内は、学生たちとラーニングメンターたちによって、ハロウィン仕様に飾り付けが行われます。学生たちとラーニングメンターたちは、大階段をハロウィン仕様に可愛らしく装飾したり、床から吹き出ているエアコンの吹き出し口に絵が描かれたビニール袋を貼り付けたりしました。ビニール袋には、可愛いオバケなどが描かれました。ビニール袋が風でユラユラとオバケのように揺れる姿がとても可愛らしく、教職員からも大好評でした。

英語科目担当のイアン・スティーブソン先生主催の「ジャック・オー・ランタン」作りが10月24日(木)に開催されました。今年は天候と野生猿の影響により、イアン先生の庭でパンプキンを収穫することができなかったため、今年のジャック・オー・ランタンは全てペーパーマッシュと呼ばれる紙粘土の素材を使って製作することになりました。

1年生の万江琴莉(まへ・ことり)さん、中澤円香(なかざわ・まどか)さん、伊藤綾音(いとう・あやね)さん、村山 毅(むらやま・たけし)さん、そして、ラーニングメンターのシャーデー・モーア先生がそれぞれのジャック・オー・ランタンを作り、仕上がったジャック・オー・ランタンの中にライトを入れ、校舎の向こう側にある「道の駅 瀬女」から見える位置に吊りました。中澤さんは、牙を切り出して星の目をしたモンスターを作り、万江さんは緑の髪の毛のジャック・オー・ランタン、伊藤さんは「カボカボ」というオリジナルのパンプキンキャラクター、村山さんのパンプキンはコウモリへと姿を変えました。



ジャック・オー・ランタン作りに夢中になる学生と先生

10月25日(金)のラーニングセッション(夜の学校)オプションの日には「校内かくれんぼ」が開催されました。かくれんぼは4ラウンド行い、隠れる学生たちは校舎棟の中に身を潜め、探す学生は第1ラウンドでは5分間、第2～4ラウンドでは10分間で隠れている学生たちを探し出しました。探し出す学生の人数は各ラウンドにつき3～6人で、制限時間内に見つけ出すのがルールでした。

普段とは違う静かで真っ暗な学校の雰囲気、より一層スリルを加え、学生たちはとても楽しみ、当初、3ラウンドでかくれんぼを終了する予定でしたが、追加するほど盛り上がりました。制限時間内に見つからなかった学生たちにはラーニングメンターからお菓子がプレゼントされました。



仮装をしながら授業をする先生と学生

10月31日(木)は、白山麓キャンパスでは教職員や学生たちがハロウィンの仮装をして授業を行い、キャンパス全体がハロウィンムード一色に染まりました。学生たちはキャラクターや映画の主人公の衣装、教職員はメイド服やホットドッグなどの衣装を身にまとい、ユニークなスタイルで授業をしました。

さらに、昼食には、ハロウィンスペシャルメニューが提供されました。可愛いオバケの形をしたサラダや、焼き立てのパンやクッキーが7種類も並び、学生たちは楽しそうに好きなお菓子を選びながらハロウィン気分を満喫しました。

授業終了後「ハロウィンコスチュームパレード」が開催されました。学生と教員はステージを歩き、観客の前でポージングを決め、自分たちで考えた演劇などを披露しました。中でも、1年生の伊藤さん、中澤さん、万江さんは映画「キョンシー」の主人公の衣装をお揃いで着用し、音楽に合わせてダンスを披露しました。その瞬間、会場からは「可愛いー！」と歓声が上がリ、大いに盛り上がりました。また、授業中には仮装を身に付けていなかった1年生のパンタワット・ラパナンラットさんは、ハロウィンコスチュームパレード開催直

前に巨大な恐竜の衣装を身に付けて登場し、会場は驚きと笑いに包まれました。

ハロウィンコスチュームパレード終了後「最も面白い」「最も怖い」「最も可愛い」「最もクリエイティブ」で賞のコスチュームを決めるコンテストが行われました。



メキシコの行事「ピニャータ」で盛り上がる学生たち

最後に、ピニャータが行われました。ピニャータとは、メキシコのお祝い事で有名な行事で、くす玉を叩いて割るゲームです。目隠しした学生は周囲の声を参考にしながら前後左右に進み、くす玉を叩き割りました。くす玉に入ったお菓子が飛び散る瞬間は歓声が上がりました。

10月の白山麓キャンパスは、ハロウィンムード一色となり、楽しい雰囲気に包まれました。本校ならではのハロウィンイベントであり、学生たちにとっても特別なひと時になりました。



色々な仮装をして記念写真に納まる学生と教職員

クリスマスパーティーを開催

【金沢キャンパス】

金沢キャンパスのクリスマスパーティーを12月24日(火)に31号館1階で開催し、4～5年生と教職員が美味しい食事と楽しい時間を共有しました。部屋はツリーを含みクリスマス色に飾り付けされ、テーブルにはピザ、サラダ、チキン、クッキー、ポテトチップスやポップコーンなどのスナック菓子とドリンクが並びました。

食事の後は各ブースで、ボードゲームで遊んだり、談笑を楽しんだりしました。参加者が全員揃ってからは、プレゼントを購入した者同士でシークレットサンタのプレゼント交換会をしました。クリスマスツリーの下にプレゼントを並べて、くじで引いた番号をそれぞれ開けました。ユニークなプレゼントが沢山ありましたが、不思議とそれが似合う者が手にし、喜びと笑いが溢れました。最後に皆でチョコレートケーキを食べてパーティーは解散となりました。



交換したプレゼントを開ける学生

【白山麓キャンパス】

リビング commons で11月29日(金)の放課後に、学生と教員とで協力してクリスマスツリーを飾り付けました。ツリーの組み立てからスタートし、学生と教員は色とりどりのオーナメントやキラキラ輝くライトを次々と飾り付けました。そんな中、学生とドミソン・アブワン先生がクリスマスソングに合わせて踊ったり、学生をクリスマスツリーに見立ててオーナメントを飾ったりといったユニークな場面もありました。学生と教員は階段や自動ドアにもデコレーションし、校内全体がクリスマスモードに包まれました。

12月24日(火)、クリスマスを祝うため、希望者を対象とした教職員と学生でプレゼント交換会を開きました。まず初めに教職員で「ホワイト・エレファント・プレゼント交換」をしました。こ

のプレゼント交換は、自分が用意したプレゼントが誰に届くか分からないので、全ての性別や年代にも贈ることができるプレゼント選びが必要となります。参加する教職員は、番号が書かれた紙を引いて、引いた番号のプレゼントを受け取ります。全員が番号を引き、プレゼントが行き渡ったところでプレゼントを開きました。どのプレゼントも冬の季節に適した素晴らしい物ばかりでした。

また、ラーニングセッションの時間に学生たちへのクリスマスプレゼント交換を開催しました。パーティーをより楽しむために、ラーニングメンターたちはプレゼントを隠して学生に見つけ出してもらうことにしました。プレゼントを見つけた学生は中央に来て、プレゼントを開きました。どの学生もワクワクしながらプレゼントを開けました。プレゼント交換の後は、ラーニングメンターがパーティーのためにお菓子を用意しました。寒い日に最適なホットココア、クッキー、チョコレート、ポップコーンなどを食べて楽しい時間を過ごしました。学生みんなが楽しんでくれたクリスマスパーティーとプレゼント交換会でした。



プレゼントを手にクリスマスツリーを囲み
写真に納まる学生と教員

国際会議 IWMCA2024 でラーニングメンターのアピラク・サンゲンチャイ先生が最優秀論文賞を受賞

本校のラーニングメンターのアピラク・サンゲンチャイ先生が8月11日(日)から13日(火)にかけて北海道大学で開催された、国際会議 The first International Workshop on Mobile Communications and Applications (IWMCA2024) で「最優秀論文賞(Best Paper Award)」を受賞しました。

同賞は本会議で行われた41件の発表の中から、最も優秀であると認められた4件の論文に対して送られました。

アピラク先生は現在、ラーニングメンターとして課外におけるSTEM科目を担当する傍ら、併設校の金沢工業大学大学院工学研究科博士前期課程(修士課程)情報工学専攻2年次に在籍し、研究指導担当教員の中沢実教授のもとで修士論文に取り組みました。

発表タイトル:Real-time Forklift and Worker Detection in the Warehouse for Work Zone Safety

著者 : Apirak Sang-ngenchai、Minoru Nakazawa(Kanazawa Institute of Technology)

【受賞したアピラク先生の研究について】

製造現場における工場内のフォークリフトと作業員の安全確保は極めて重要です。この研究は、高度なディープラーニング手法を使用して、危険区域内のフォークリフトと作業員を迅速に検出するフレームワークを提案しています。このプロセスは、管理者や監督者が潜在的に危険な傾向やパターンを早期に特定することを支援するために、工場内に設置されたカメラからフォークリフ



アピラク・

サンゲンチャイ先生

ト作業員をリアルタイムで監視することを目的としています。これを達成するために、研究プロジェクトは、畳み込みニューラルネットワークを用いました。特に物体検出のための“You Only Look Once(YOLO)”アーキテクチャの活用と改善の提案をしています。研究の結果、本アプローチは85%以上の検出精度を達成することがわかりました。この研究プロジェクトは、工場内の安全基準と作業効率を大幅に向上させる可能性があります。



中沢教授(左から3人目)と共に
写真に納まるアピラク先生(左から2人目)

II. グローバル化への取り組み

3年生 17人がニュージーランドへ出発

国際高専3年生 17人がニュージーランドのダニーデンに向けて19時45分発ニュージーランド航空90便に搭乗し、4月4日(木)成田空港から出発しました。

空港では本学教員の津田明洋准教授、留学支援課の小沢香澄、及び保護者の方々の見送りを受け、学生たちは留学への期待を胸に笑顔で留学をスタートさせました。途中オークランドで乗り継ぎを行い、現地時刻で4月5日(金)午後2時30分に無事にダニーデン空港に到着しました。オタゴポリテク職員の温かい歓迎を受け、キャンパスへ向かいました。道中、長閑なニュージーランドの風景を目の当たりにして、感動の声が聞こえてきました。キャンパスに到着すると、いよいよホストファミリーとの対面、期待と緊張の様子でホストファミリーと初顔合わせをし、学生がお互いにエールを掛け合って各家庭へと向かっていきました。

ホストファミリーと過ごした週末の後、4月8日(月)は初めての登校となり、オタゴポリテクの歓迎式に参加しました。歓迎式(ミヒ フアカタウ)は、ニュージーランドのマオリ族の伝統的な形式で行われ、オタゴポリテク代表者からのマオリ語と英語での温かい言葉と美しい歌声の歓迎を受け、学生代表の出口天仁(でぐち・てんじん)さんがお礼の言葉を述べた後、学生全員でGreeNの「キセキ」の合唱を贈りました。この歌は、人生の中で出会った人や、起こることは奇跡的で、それを大切にしたいという想いで、出発前に学生たちが選び、練習していた曲です。気持ちを込めた双方の歌声に、学生は感銘を受け、またオタゴポリテクの関係者からも「感動し学生の団結力を感じた」との言葉をいただきました。

初めの1週間はオリエンテーションが行われ、オタゴの担当者から学校生活及びニュージーランドでの生活についての説明がありました。日本とは異なる事も多々あるが、それを受け入れて馴染んでいくことが異文化体験になり、そこから多くのことを学ぶことと感じました。

これから様々な異国での体験が待ち受けています。嬉しいことや楽しいこともあるが、辛いことや苦しいことにも立ち向かい、乗り越えること

で、学生自身が強くなり大きな成長に繋がるはずです。

学生はこの度の留学までに、保護者や高専の教職員、オタゴポリテクの関係者やホストファミリー等、沢山のサポートがあつて実現していることに感謝し、一日一日を大切に自らが異国の地で頑張ることで、その恩に報いることとなります。



ダニーデン空港に到着した学生たち



オリエンテーションで学生生活について説明を受ける学生たち



オタゴポリテク前での記念撮影

オタゴポリテク留学を終えた学生たちが帰国

16人の学生が、午後5時着のニュージーランド航空99便で、3月17日(月)に無事帰国しました。成田空港には保護者をはじめ、本校から向井 守副校長と留学支援課の小沢が出迎えました。久しぶりの保護者との対面は、笑顔と涙があふれる感動的な場面が見られ、心温まるひとときとなりました。ある学生の妹さんが「押し活」に使うようなうちわを作成し、お兄さんの帰国を喜んでいる微笑ましい場面も見られました。家族の温かい歓迎に、学生たちも再会の喜びを分かち合いました。

背丈がひと回り大きく成長した学生や、髪が伸びてイメージチェンジした学生もあり、外見の変化があったと同時に、様々な経験を通じて内面的にも成長している様子が感じられました。学生からは「やっぱり日本がいいな」「早速かつ丼が食べたい」「お茶づけでもいいや」といった声が聞かれました。また、留学中に変わった新札を手にして感動している学生もいました。異国での生活を通じて、日本の良さを改めて実感した学生も多く、帰国後の日本の食事や文化に対する愛着が一層深まったようでした。



様々な経験を経て無事に帰国した学生たち

留学中、学生は現地のホストファミリーやオタゴポリテクのスタッフ、地元の方々の温かいサポートを受け、充実した忘れられない経験を積みました。具体的には、日々の生活の中で自然豊かなダニーデンの街を散策してリラックスし、近くのセントクレアビーチで釣りを楽しんだ学生もいました。学校の体育館で運動を通じて現地の学生と仲良くなり、日本に関しても興味を持ってもらい、良い国際交流の機会があったという経験も印象的です。良いことばかりでなく、苦しく辛いことも乗り越えました。この1年間の経験は、彼らにとって将来に繋がる貴重なものになった



成田空港到着ロビーで写真に納まる3年生

はずです。学生たちは、現地での様々な経験を通じて、自分自身を見つめ直し、成長する機会を得たようです。

また、日本の地でいつも温かく見守ってくれていた保護者にも深い感謝の気持ちを抱いていることと思います。保護者の支えがあったからこそ、この留学が実現し、貴重な経験を積むことができました。遠く離れた地での生活に不安を感じることもあったかもしれませんが、保護者の励ましや愛情が学生たちの心の支えとなり、困難を乗り越える力となりました。ニュージーランド・ダニーデンを第二の故郷として、将来再度訪れる学生もいるかもしれません。学生たちがオタゴポリテク留学で得た知識やスキル、そして人間としての成長を大切にし、その経験を未来へと繋げてほしいと心から願うばかりです。この1年間の努力と学びが、彼らの人生において輝かしい未来を築く礎となることを期待したいと思います。

在日アイルランド大使のデミアン・コール氏が白山麓キャンパスに来校

紫陽花の色が美しく映える候、スポーツフェスティバルで活気溢れる白山麓キャンパスに、令和6年(2024)年6月22日(土)在日アイルランド大使デミアン・コール氏が来校しました。この度は石川県で行われた英語スピーチコンテスト「第1回エヒュコーション・イン・アイルランド杯」観覧のため、金沢に来訪したのを機に、是非とも国際高専を来訪したいとお声をいただき千載一遇の機会となりました。アイルランド側はコール駐日大使をはじめ、ニール・クーニー氏(アイルランド政府商務庁日本代表)ジョナサン・ケリー氏(アイルランド政府商務庁・マーケットエグゼクティブ)、マイケル・スチュアート氏(グリフィス大学・留学生募集マネージャー)の4人が来校しました。国際高専側は泉屋吉郎理事長、村井好博常務、鹿田正昭校長をはじめ、教職員と学生で温かく歓迎しました。本校では昨年度からアイルランドとの交流が始まり、アイルランド関係者が数回来校したり、鹿田校長と向井副校長がアイルランド大使館での式典に参加したりとお互いの親睦を深めている中で、の更なる関係を紡ぐ機会となりました。



記念写真に納まるアイルランド大使一行と高専生

歓迎式では鹿田校長から「アイルランドとの親交が深まり、将来的に本校の学生が貴国において学ぶ機会が訪れることを願う」との言葉があり、学生代表の泉屋匠吾(いずみや・しょうご)さんが「古い歴史や文化を有する、自然豊かなアイルランドにいつか行ってみたい。ダブリン大学トリニティ・カレッジ図書館にある the book of kells を見てみたい」と大使に向けてのメッセージを贈りました。コール大使からはアイルランドの紹介と共に国際高専とのこれまでの交流に関して話があり「この度の温かい歓迎に感謝する。是非アイルランドを訪れてください」との光栄な言葉を

いただきました。キャンパス見学の際には、整った施設や白山の木を利用したぬくもりを感じる学びの場、温泉施設も完備していることに感動している様子でした。スポーツフェスティバルの会場にも足を運び、活気あるバドミントン競技の様子を観覧されていました。その中で2年生の中澤流月(なかざわ・るうな)さんが勇気を出してコール大使に話かけた際は、それに対して笑顔で温かい言葉を返してくださり、優しい人柄を垣間見ることができました。中澤さん自身もアイルランドのことにしてもっと知りたいとのことで、意欲を掻き立てるまたとない経験になったはずです。

この度は短い時間でしたが、アイルランド大使が来校することで、お互いの親睦を更に深める貴重な機会となりました。学生にとってもアイルランドに興味を持ち、今後の学びに繋がる刺激的な経験になったことは確かです。世界で活躍するグローバルイノベーターを育成することを目指している国際高専にとって、今後もアイルランドとの交流を深め、近い将来、学生がアイルランドの地で学ぶことで、本学の理念の実現に繋がることを望んでいます。



コール大使と笑顔で写真に納まる泉屋さん(左)中澤さん(右)

米国ミズーリ州コロンビア市から高校生 6人が来校

米国ミズーリ州コロンビア市の高校生(以下:高校生)6人が6月9日(日)から6月21日(金)白山麓キャンパスに来校しました。コロンビア市の高校生たちは白山麓キャンパスに滞在し、国際高専の1、2年生と寮生活を送り、国際高専のプログラムに参加したほか、白山市でのホームステイ、白山ジオツアー、日本文化体験など、白山市が提供した様々なプログラムに参加しました。

高校生たちは、国際高専のプログラムに参加し、高専生たちと共に英語科目や体育科目の授業を受け、交流を深めるとともに、日本語のレッスンや化学実験、プログラミング、本校のオリジナル工学教育である「エンジニアリングデザイン」などのSTEM体験なども行いました。

「エンジニアリングデザイン」では「外国人が日本に来た際に直面するコミュニケーションの問題を解決する方法」をテーマにアイデアを考え、高専生に向けて発表しました。その後、紙芝居「さるかに合戦」を披露しました。高専生は紙芝居に見入っており、その完成度の高さと日本語の上手さに感心し、驚きの表情を浮かべている様子でした。

高専生15人と高校生たちは、金沢観光として兼六園や金沢城散策、石川県観光物産館で金沢の伝統工芸である「金箔貼り」を体験しました。コンパクトミラーに金箔を貼り、それぞれ思い思いの作品に仕上げた。その後、高校生たちは白山市のホストファミリーと対面し、1泊2日のホームステイを通してホストファミリーとの交流や日本文化を楽しみました。

【6月17日(月)～21日(金)】

高校生たちは白山市のプログラムに参加しました。白山市は市全域が「白山手取川ユネスコ世界ジオパーク」に認定されており、高校生たちは白山麓地域を散策する「ジオツアー」を楽しみました。その他、河内地区「キッズの森 視察ツアー」や、豪雪地帯に暮らす白峰の人々の生活や限界集落での地域活性化の取り組みを学ぶ「白峰ツアー」、白峰恐竜パークにて化石クリーニング作業体験・館内見学、鳥越中学校で中学生の英語のクラスにも参加しました。

6月20日(木)の夕方、高校生たちの帰国前日に、白山麓キャンパスで「お別れ会」が開催されました。コロンビア市訪問団や白山市の国際交流員、白山市のホストファミリーを招待し、高専生や高校生たちと共に夕食を楽しんだ。お別れのスピーチでは、高校生からは「国際高専に来る前は不安いっぱいでしたが、学生たちがとても優しく歓迎してくれたので嬉しかったです。ありがとうございました」という温かいメッセージがあり、国際高専の学生からは「2週間という短い間でしたが、たくさんの思い出を作ることができました。国際高専に来てくれてありがとう。素敵な時間を過ごすことができました」という言葉が送られました。スピーチの最終には涙ぐむ学生たちの姿もあり、お互いの絆を感じることができ、心温まる素敵な時間となりました。



記念写真に納まるコロンビア市の高校生や高専生、ホストファミリーの皆さん

オタゴポリテクニクと調印式

新緑に囲まれた国際高専白山麓キャンパスで、5月21日(火)オタゴポリテクニクから3人の来校者を迎え「学術協力に関する国際高専とオタゴポリテクニクとの間の協定書」と「交流プログラムの実施に関する合意書」に署名をする調印式が5年ぶりに行われました。ニュージーランドの国立オタゴポリテクニクとの交流関係は平成14(2002)年から続き、22年に渡って両校は固い絆で結ばれています。高専3年生でのオタゴポリテクニク留学は、国際高専で学ぶ学生にとって大きな目玉となり、学習面は勿論、現地のホストファミリーや友人との生活を体験することで人間的にも大きな成長を遂げる大切な学びの場となっています。

オタゴポリテクニクからはマーク・カートライト氏(副教務部長)、エイドリアン・テットロ氏(国際高専プログラム主任教員)、ケリー・ホッジスン氏(国際マーケティングスタッフ)の3人が来校。国際高専からは、泉屋吉郎理事長、村井好博常務理事、鹿田正昭校長及び関係者10人が調印式に参列し、協定書と合意書にお互いサインを交わしました。向井守副校長のユーモア溢れる司会の元、調印式は和やかな雰囲気で行われました。調印式の中で、マーク・カートライト氏から「改めて両校の交流の歴史を重んじると共に、今後も更に良い関係が続くよう努めていく。温かい歓迎に感謝している」との言葉を頂戴しました。



協定書と合意書を持って記念写真に納まる
(左から)泉屋理事長、鹿田校長、カートライト氏、テットロ氏

Ⅲ. 社会貢献への取り組み

「紅はるか祭り」を開催

本校2年生が、エンジニアリングデザインの授業の一環で、10月28日(月)から11月末まで、校舎前にある道の駅瀬女とキジトラコーヒー研究所と連携し、白山麓キャンパス前の休耕田で栽培したサツマイモ「紅はるか」を使ったコラボイベント「紅はるか祭り」を今年度も開催しました。本校ではエンジニアリングデザインという課題解決型授業を教育の中核に据えています。2年生は「アグリビジネス班」と「テック対策班」に分かれ、全寮制キャンパスが立地する白山麓地域の課題解決に取り組んでいます。アグリビジネス班は、キャンパスの目の前にある休耕田を地域資源の一つとして捉え、その一部を地元の白山ろく里山活性化協議会からお借りしています。そこでは、紅はるかを学生自らが栽培し「高専紅はるか」というブランド名で生芋や焼芋販売、コラボ商品開発などの事業を実施しています。学生たちは、生産、営業、販売、収益性分析等の一連の取り組みを経験し、休耕田の利活用の可能性について探りながら、地域活性化に寄与することを目指しています。

この「紅はるか祭り」の期間中は、本校とのコラボ商品としてキジトラコーヒー研究所で、高専紅はるかを使用した「チップスベにゃソフト」と「べにゃソフト」を、道の駅瀬女では「紅はるかサンデー」及び「高専紅はるか」の生芋が販売されました。そして11月3日(日・祝)、4日(月)の2日間、道の駅瀬女店頭で本校生が「高専紅はるか」の焼芋販売を行いました。

前年度は、高専紅はるかブランドの浸透とファン作りを目的に、4種類の「高専紅はるか」マスコットキャラクターを用いたキーホルダーとマグネットを制作しました。これらのオリジナルグッズは、「高専紅はるか」の焼芋を一定額以上購入



焼き芋とオリジナルキャラクターステッカー



焼き芋販売店で記念写真に納まるビジネス班メンバー

された方に、カプセルトイとして無料で配布されました。

令和6(2024)年度は前年度に先輩が制作したキャラクターグッズを継承し、新たにアクリルスタンドを追加しました。また、今年度はより広くブランド周知の展開を図ることと、キジトラコーヒー研究所と道の駅瀬女での販売促進を目指し、各店舗で販売されている高専紅はるか関連商品を一定額以上購入された方にもカプセルトイ無料交換券を配布しました。昨年度は、30個程度のカプセルトイが配布されましたが、今年はキジトラコーヒー研究所や道の駅瀬女からも多くのお客様に焼芋屋台にお越しいただき、100個のカプセルトイが配布されました。お客様の中には、またカプセルトイが欲しいからと、別の商品を買に行かれた方や「昨年に引き続き今年も焼き芋を楽しみに来た」と学生に声を掛けてくれるお客様もいて、学生にとって大いに励みになりました。

2日間の焼芋店頭販売を通して、学生たちは様々な気づきを得ました。販売計画や焼芋準備の回転効率の向上、お客様の導線から自分たちの役割分担やシフト管理等、話し合いながら改善を試み、取り組むことができました。また焼芋の売上は昨年度の約1.2倍となり、準備してきたことがうまく結果にも繋がりました。その後、年度末の決算に向けて準備を進めました。



カプセルトイをする子ども

白金祭を開催

国際高専白山麓キャンパスで2月23日(日)に「白金祭(はっきんさい)2025」が行われました。白金祭は、白山麓キャンパスの活動を知ってもらうことを目的として、白山麓キャンパス開校当初から開催しているもので、今回で6回目を迎えました。在校生の保護者52人をはじめ、白山麓の地域の方、小中学生を含め合計109人が来場しました。

白金祭では、白山麓キャンパスの大階段でデザイン&ファブリケーションクラブの成果発表会、学内ロボコンとバンド演奏、教室を使用したゲームコーナーや学生・教職員を含めたフォトコンテスト、美術部の展示、国際理工学科の展示の他にも、校舎全体を巡るスタンプラリーも行われました。学校内部の教職員にとっては、普段あまり分からない学生たちの課外活動の成果報告やバンドのパフォーマンスを通して、学生の新たな一面を知ることができる機会となりました。また、外部の方々にとっては高専で行われている教育の理解促進に繋がったことと思います。

これまではなかなか地域の方々に本校を訪れてもらう機会はなかったのだが、今回の白金祭では子ども連れで来られる方もおり、徐々にではあるが、本校の敷居が取り払われつつあることを感じた。今後もより気軽に訪れてもらえるようにしていきたいです。



白金祭実行委員の学生たち



学内ロボコンでロボットを操作する学生

第59回高専祭を開催

第59回高専祭を10月19日(土)に金沢キャンパスで開催しました。昨年度は金沢工業大学の工大祭との共同開催でしたが、令和6(2024)年度は高専の校舎1、2階を利用して単独での開催となりました。今回のテーマは、参加者の皆さんがそれぞれ楽しめるようにとの思いで「Enjoy in your own way」とし、本校学生会が中心となり実施されました。カードゲーム、格闘ゲーム、フォトラリーと抽選会企画では、普段は別々のキャンパスに通う学生と教職員の交流の場となり楽しい時間を共有しました。

学科展示ブースは、学科紹介のポスター、学生研究ポスター、Spheroを使用したタイムアタックレースなど、本校の学びを知るブースとして、学外との交流の場となりました。また、教職員、学生の華道作品や1年生による美術作品、ロボコンなどの課外活動の展示紹介もあり、授業以外の活動の成果を披露していました。

午後には、金沢キャンパス見学会も実施され、参加した保護者は、改装後の新しい施設や学園の施設を見学しました。また、こぶし会によるホームカミングデーも行われ、OBや現役の学生は、金沢高専時代からの卒業アルバムを閲覧しながら楽しい時間を過ごしました。

高専祭の最後には、東海北陸地区大会に参加したロボコンチームの報告会が行われました。報告会では4・5年生で構成されたAチーム、1・2年生で構成されたBチームがそれぞれ自分たちのロボットを解説しました。本戦に出場できませんでしたが、両チームとも特別賞を受賞しました。

閉会式で鹿田正昭校長から「コンパクトな高専祭でしたが、テーマの通りそれぞれが楽しめた高専祭でした。」と講評がありました。



ロボット展示で成果を説明する生徒

「食事と薬についての健康講話」を実施

白山麓キャンパスで1、2年生を対象に4月24日（水）、かわちコメヤ薬局の前野洋徳（まえの・ひろのり）氏を講師にお招きし、「食事と薬についての健康講話」が実施されました。

薬は病院や薬局、ドラッグストアなどで購入することができ、病気の治療や予防、健康の手助け、痛みを和らげるなどに役立つ一方で、副作用があったり、用法・用量を間違えると毒になったり、乱用（オーバードーズ）を引き起こすことがあります。前野氏は市販の湿布薬や頭痛薬、薬局で処方される薬の効果や副作用、症状などを写真と共に説明し、オーバードーズを引き起こす要因や主な症状・事件などについて解説しました。

次に、学生同士で薬を交換し合うことで、どういったトラブルが起こりうるか説明がありました。「医師・薬剤師から処方された薬を適切な方法で服用し、万が一副作用が発生した場合は『副作用救済制度』という制度がありますが、処方されていない人が別の人に処方された薬を服用し、副作用が発生した場合は『副作用救済制度』の対象にはなりません。体格、性別、既往歴などによって、薬の効果は人によって違います。病院から処方される薬は自分専用なので譲渡をしないように、また薬の譲渡は犯罪である」ということが説明されました。

後半は、「食事と栄養」について講話が行われました。「食事が不規則になると、太りやすくなる・身長が伸びない・筋肉がつかない・腸内環境の乱れ・下痢・便秘・免疫力の低下などを引き起こします。また、砂糖の過剰摂取は精神的な気分の低下、体重増加、依存症につながります。白山麓キャンパスでは、毎日3食の食事を摂ることができ、必要なカロリーを満たし、PFC（タンパク質、脂質、炭水化物）バランスの良い食事を摂ることができます。時には加工食品を摂りたくなることもありますが、栄養表示を確認し、ビタミンやミネラルを補うためにサラダチキンや野菜炒めなどを食べるなど、自分で組み合わせることでバランスが良くなることや、エナジードリンクに含まれる砂糖の量を確認するのが良い。」ということが解説されました。

最後に、学生から「市販の薬は副作用救済制度の対象になりますか？」と質問があり、前野氏は「用法・用量を守った場合は対象になりますが、逸脱した飲み方をした場合は対象にならない

め、説明書通りに服用してください」と回答され、講話が終了しました。



講話をする前野氏

「自転車安全講習会」を実施

白山麓キャンパスでは5月15日(水)に1、2年生を対象に白山警察署 酒井 満氏を講師にお招きし、「自転車安全講習会」が実施されました。

令和5(2023)年に石川県内で発生した交通事故のうち、物損事故件数は31,138件、人身事故件数は2,059件、死者数28人、負傷者数2,356人で、そのうち高校生が怪我をした人数は66人でした。中でも1・3年生が圧倒的に多く、その原因のほとんどが自転車によるものです。

酒井氏は実際の事例を紹介しながら、交通事故を起こした場合に問われる「民事責任」や「刑事責任」について説明し、事故を防ぐためには交通ルールを守るだけでなく、自分の身は自分で守ることがいかに大切か解説されました。その後、自転車は車両として取り扱われることから「自動車の仲間」であり、自動車のルールが適用されること、車道を通行する際は原則とし左側通行であること、信号機や標識の解説、飲酒運転、二人乗り、並列運転は禁止であること、夜間ライトの点灯などを説明されるとともに、違反に伴う罰則や罰金についても説明されました。

最後に、令和5(2023)年4月1日から自転車のヘルメット着用が努力義務化されたことについて、ヘルメット着用がいかに命を救うか解説されました。酒井氏は「ヘルメットを被っていても、一生活躍する場がないかもしれませんが、それが一番幸せなことです。ヘルメットは事故に遭った時に活躍してくれるものです。しっかりと予防処置をしてください」と呼びかけ、講習会が終了しました。



講習会を行う酒井氏

薬物に関する講話を実施

白山麓キャンパスで1、2年生を対象に白山警察署生活安全課の佐藤芳乃(さとう・よしの)氏と南真季(みなみ・まき)氏をお招きし「薬物に関する講話」が6月12日(水)に実施されました。

覚せい剤を含めた大麻、麻薬、危険ドラッグなどわが国の薬物検挙人数は年間13,000人以上に達しており、若年層を中心に大麻の検挙数が増加している現状について説明がありました。大麻は覚せい剤に比べて、オシャレやファッションとしてかっこいいイメージが持たれる他、国によっては使用することが犯罪とならないケースがあることから他の薬物と比べ問題がないなどの誤解を受けやすく、軽い気持ちで使用するケースが多いことを指摘されました。しかし、大麻が違法でないのはその国が抱える薬物問題の事情によるもので、大麻の摂取が安全で問題がないということではないことを説明されました。

薬物には大きな健康被害が伴うとともに、欲する意識をなくすことができず「一生我慢し続けることとなる」ほどの強い中毒性があります。販売者にとって薬物を利用させることで安定した収入源の確保に繋がるため、仲間意識を巧みに利用して使用を勧められていることを理解し、そのような販売場面に遭遇した場合は、断る勇気が必要であることが強調されました。断り方についても、相手の気持ちを逆なですることなくきっぱりと断る言葉の使いかたなどについても説明されました。薬物の売上は暴力団などの闇組織の資金源になっていて、薬物の購入を通して貢献してしまうこと、そして組織と関係を持つことに繋がる危険性について考える機会となりました。

最後に、佐藤氏からは「ネットの情報に惑わされず、正しい道を選んでください。万一、薬物に限らず、何かあった時は警察に相談してください。決して一人で悩まないでください」と学生たちに呼びかけ、講話が終了しました。

IV. 自己点検・外部評価

ICTアンケート調査結果報告会を開催

FD・SD研修として、令和5(2023)年度の授業アンケート及び総合アンケートの調査結果報告会が8月30日(金)に開催され、本校の教職員42人(教員27人、職員15人)がオンラインで参加しました。

はじめに鹿田正昭校長から、アンケート結果を分析し、次の授業に備えることはとても重要であることが伝えられ、その後(有)アイ・ポイントの池田 晋(いけだ・すすむ)代表からアンケート分析結果の報告がありました。以下、分析結果を抜粋します。

■総合アンケートでの「満足度」

- ・満足度は過去最高の90.7%を記録しました。
- ・いずれの学年も高い満足度でしたが、低学年ほど満足度が高い傾向が見られました。

■「教員及び学習支援」「学校での過ごし方」など

- ・学習面では教員の評価が非常に高い結果でした。「勉強」「課外活動」など、学生生活は全般的に充実している様子が窺えました。
- ・1・2年生に質問した「RAのサポート」「ラーニングセッション」「カフェテリアの食事」及び「寮の生活」という項目の評価が低下していました。1・2年生は「満足度」は高いものの、この生活面の低下は今までにない変化です。

■「授業アンケート」のポイント

- ・科目の満足度は92.3%であり、ほとんどの学生が満足と答えていました。授業の評価は非常に高く、特に「シラバス」が高く評価されていました。
- ・学習時間を見ると「1年生」と「2年生」は同じような学習環境のようであり、高学年で学習時間がやや長いという傾向が見られました。

■「教職員アンケート」のポイント

- ・教職員自身の満足度は58.3%であり、加重平均で見ると平成30(2018)年以降で初めてプラススコアとなりました。また、満足度に関する全ての項目が平成30(2018)年以降で最高となりました。
- ・「方針や決定事項は教職員に伝わっている」はマイナススコアが継続しています。

分析結果報告後には質疑応答が行われました。カフェテリアや寮生活の満足度が低い理由に話が及ぶと、本田尋識白山麓高専事務室長から「昨年に関しては下がる要因があったことは認識しており、既にカフェテリアと学生間の直接対話の機会を設けるなどいくつかの改善を行っています」と報告がありました。来年度のアンケート結果に反映されることが期待されます。

5年生の授業満足度が低かった点に関しては、6人中2人が友人関係の不満を抱えていたため、それが要因ではないかという意見がありました。また、教員の満足度に関しては「メインキャンパスによって開きがあるのではないか」という教員からの質問があり、来年度以降、キャンパス別のデータを取るべきか検討するのも一案であると池田氏から回答されました。

さらに、ラーニングセッションに関しては内容の問題というより、他の学生が騒がしくて集中できない等、環境の問題もあり、原因追及のため設問を細分化して詳細に聞くという手段があることも述べられました。

終わりに、鹿田校長から11月に今回の結果を受けての意見交換会を開催する旨が伝えられ閉会となりました。

昨年までは外国人教員向けに英語での開催を別日に実施していましたが、その実施方法では疑問があっても池田氏へ直接質問することや、日本人教員を交えた意見交換もできないことから不満の声がありました。そのため今年は同日に通訳を交えて実施しました。



Zoomでアンケートの分析結果を聞く国際高専の教職員

31号館で合同避難訓練を実施

本校4・5年生が通う金沢キャンパスと金沢工業大学ロボティクス学科の研究室がある、31号館の合同避難訓練が5月10日(金)に実施されました。大学との合同避難訓練は前年に引き続き2回目となり、学生・教職員の災害時における適切で迅速な対応と防災意識向上を図りました。今回は1階のランニングコモンズで火災が発生したことを想定した訓練をしました。

午後3時、事務局内の放送盤から31号館内に火災を報せるアナウンスを日本語と英語で行いました。4階で授業を受けていた4・5年生は担任の指示のもと、中央階段で1階へ降り正面玄関から、大学生は2階学生通用口からそれぞれプラザ(正面玄関前広場)へ避難しました。プラザでは本校職員が指揮本部を設置し、高専・大学の担当教員が学生の数を確認して報告しました。今回は火災発生から2分37秒で避難を完了しました。

最後に鹿田正昭校長から学生に向けて「今日の訓練では皆さん速やかに避難することができましたが、実際の災害時にはそう簡単には避難できないこともあり得るので、学校や家でも常日頃から災害に対する意識を持って行動してください」と講評をいただき終了しました。



プラザに集合するロボティクス学科生と高専の4・5年生たち

育友会総会及びクラス懇談会を開催

育友会役員会・総会は、保護者が広く国内外に住まわれていることからオンラインで開催しています。

5月24日(金)午後6時30分から行われた総会(会員65世帯中49人出席、委任状10人、不明6人)は、宮野純光学務部長の司会のもと、木下留美(きのした・るみ)育友会長の挨拶、鹿田正昭校長の挨拶で始まり、その後、木下会長が議長となり議案審議が行われました。まず、山岸 徹育友会会計(高専事務局長)が令和5(2023)年度事業報告及び収支決算報告を行い、金 聖弼(きむ・そんびる)会計監査から会計監査報告が行われ、可決・承認されました。続けて山岸会計が令和6(2024)年度事業案、収支予算案を説明し可決・承認されました。新年度役員を選出については、会長に出口牧仁(でぐち・まきひと)さん、副会長に中澤秀子(なかざわ・ひでこ)さん、会計監査委員に橋本裕一(はしもと・ゆういち)さんが新たに選出されました。1年生の保護者からは橋本さん以外に万江厚志(まゑ・こうじ)さんが育友会理事に加わることが承認されました。各議案の可否はその都度Zoom機能を介して行われ、すべての議案ではほぼ全員の承認が得られました。続いて、1年間育友会長を務めていただいた木下氏に鹿田校長から感謝状が贈呈されました。

議案審議に続き、学校から近況報告が行われました。鹿田校長から学校方針と現況が伝えられ、藤澤 武教務主事、小高有普学生主事、宇都宮隆子修学支援主事が順に学修状況、課外活動状況、生活指導状況、留学への準備状況、進路指導状況等の報告を行い、最後に宮野学務部長が本校Webサイト、学年暦、保護者関連行事について説明して無事総会を終了しました。

総会終了後は、担任、副担任等とのクラス懇談が実施されました。鹿田校長を始めとする学務会議メンバーも手分けしてクラス懇談に参加しました。1・2年生の保護者からは授業や寮生活、課外活動など、3年生の保護者からはホームステイ先での様子など、4・5年生の保護者からは大学編入学などについて質問があり、担任や学務会議メンバーが回答しました。丁寧な説明により和やかな懇談会になりました。

V. 学生募集

ICT グローバルサマーキャンプ 2024 開催

国際高専白山麓キャンパスで、令和6(2024)年8月4日(日)から9日(金)の5泊6日の日程でICTグローバルサマーキャンプ、8月6日(火)から8日(木)の2泊3日の日程でICTサマーキャンプが開催されました。どちらも学外の連携パートナーとのコラボレーションにより、本校の教育環境を国内外にPRできる貴重な機会となった。基本的には、両プログラムは別々の教室、コンテンツとメンバー構成で実施されたが、食事や温泉、6日(火)の夕方に行われたタイの凧作り体験、7日(水)の夜に体育館で行われたスポーツコンペティションなどで相互に交流する機会も設けられました。

【ICTグローバルサマーキャンプ】

参加学生：37人(タイ人の生徒23人、立命館慶祥中学校生徒5人、沖縄アミックスインターナショナル生徒4人、海外子女教育振興財団/JOESの帰国子女生徒5人)

引率教職員：9人(タイ3人、立命館慶祥2人、沖縄アミックス1人、JOES3人)

主なプログラム：レーザーカッターや3Dプリンターを使ったものづくり体験、化学や電気に関するSTEAM体験、AIプログラミング、白峰での文化体験、温泉体験、Tシャツ制作体験、サマーフェスティバル(日本の夏祭り)体験、金沢キャンパス見学など。

グローバルサマーキャンプは、懇意にしているタイの留学エージェントの仲介で、コロナ前から白山麓キャンパスで開催をしていました。海外からの帰国子女に対して外国語保持教室を提供しているJOESと共催することもあったが、今年は初めて二つの教育連携協定校の生徒も参加することによって、より多様性のあるキャンプとなりました。プログラムはすべて英語となっており、参加者の中の6割を超えるタイの生徒は殆どがインターナショナルスクールの生徒ということもあり、参加した日本人生徒が国際高専の教員や参加者と英語で積極的にコミュニケーションを取る姿が印象的でした。また、最終日にはプログラム全体を通じて様々な体験をして得たもの、制作したものを各自が展示をし、ポスターセッション形式のようにプレゼンテーションをするセッション

があり、参加した生徒同士で写真を撮りあって交流し連絡先を交換するなど、別れを惜しむ姿が多く見られました。

【ICTサマーキャンプ】

参加学生：29人(本校24人、JOESの帰国子女5人)
引率教職員：3人(JOES)

主なプログラム：エンジニアリングデザイン体験、STEAM体験、Tシャツ制作体験、ボルダリング体験、温泉体験など。

サマーキャンプは、新型コロナの影響を受けた年以外には毎年開催しており、本校の教育環境のみならず入学後の生活環境まで体験できる機会となっており、在学生の中にも過去のサマーキャンプ参加者も多い。今年は「自分たちが見たい将来に向けた会社を考えよう」というテーマにそって、参加者は数名のグループを作り、本校の教育の特徴であるエンジニアリングデザインを体験しました。3日目の最終プレゼンテーションではグループ毎に話し合っ決めて、解決すべき社会課題、解決策、グループの会社名、会社のロゴ、スローガン等について、会社名とロゴの印刷されたお揃いのTシャツを着て発表をしました。参加者からは「英語はそれほど得意ではないが、このような環境であれば伸ばしていくことができると感じた」「参加前には寮生活などの不安もあったがすぐに友達もできて楽しめた」などの声が聞かれました。



授業体験で真剣に話を聞く参加者



笑顔で記念写真に納まる参加者

国際高専オープンキャンパス開催

本校のオープンキャンパスを8月3日(土)、4日(日)の2日間、白山麓キャンパスで開催しました。8月3日(土)は生徒21人(3年生10人、2年生7人、1年生4人)、保護者等30人、計51人。そして8月4日(日)は生徒29人(3年生16人、2年生7人、1年生6人)、保護者等40人、計69人が参加しました。

令和5(2023)年8月のオープンキャンパスの参加人数は、8月5日(土)は生徒30人(3年生18人、2年生6人、1年生6人)、保護者等34人の計64人。8月6日(日)は生徒26人(3年生14人、2年生7人、1年生5人)、保護者等23人の計49人でした。前年に比べ生徒数は6人減でしたが、保護者は13人増となりました。本校に進学させるかどうか真剣に見定めよう、という保護者の思いが数字から見て取れます。

また2日間の参加者の学校所在地を見ると、国内から茨城県(1)、東京都(5)、石川県(13)、山梨県(1)、愛知県(1)、京都府(3)、大阪府(1)、福岡県(1)の26組。海外からイギリス(1)、アメリカ(3)、シンガポール(1)の5組でした。さらに、東京流通センターで開催された「地域みらい留学高校進学フェス」で本校のブースに来られたKATOH塾の加藤正人(かとう・まさと)塾長も4日にお越しになり、キャンパスをご案内しました。加藤塾長は、東京私塾協同組合のメンバーで「実際にキャンパスを見ないと、生徒に自信をもって勧められない」という思いから参加されました。中小規模の学習塾は生徒本位できめ細やかな指導をされていて、生徒にとって役立つ情報収集に意欲的です。

今回のオープンキャンパスで特筆すべき点が2つあります。1点目は石川県内からの参加が多かったことです。本校では以前から「学習塾協議会いしかわ」加盟塾を対象に寮の宿泊体験を含めたキャンパスの見学会を実施してきました。これがきっかけとなり、塾生に本校を知ってもらいたいと熱心にオープンキャンパス参加を勧める学習塾が増えてきました。また今回、中学校から配られたチラシで、初めて本校の存在を知ったという加賀地区の保護者も参加されていました。加賀地区の学習塾や中学校は、小松高校への進学が第一義。国際高専は存在すらこれまで知らなかったというのが現状である。地道な学生募集活動の積み重ねがここにきて奏功してきたように思います。また、金沢大学附属中学校から参加があった

ことも注目されます。各都道府県の中学訪問の際に、まずどこに行くべきか、参考となる事例といえます。

2点目は、本校1年生でタイ出身のラパンラット・パンタワットさんが4日(日)に開催されたプログラミング体験授業で講師を務めたことです。高校で言えば、まだ入学後4ヶ月しか経っていない1年生。英語が流暢でも、AIの模擬授業で講師をつとめるとなると別問題です。ラパンラット・パンタワットさんの堂々とした説明に、新時代の到来を感じました。

今回、KATOH塾の加藤塾長が本校の在學生に話を聴きたいということで、5人の學生に話を聴きました。學生から「最初の数ヶ月は確かに英語の聴き取りができなくても、数ヶ月経つと分かるようになってくる」「数学は英語がわからなくても、見ればわかる。化学や生物は(ブリッジイングリッシュで専門用語を学ぶので)点数が取りやすい」「数学が苦手だったが、英語が好きで理工系にも興味があった。親からは猛反対されたが、国際高専に進学した」といった意見があり、今後の生徒指導に役立つ話が聴けて良かったとのことでした。



国際高専の授業を体験する参加者

「オンライン進学説明会」を5月と7月に開催

本校では5月25日(土)と7月6日(土)にオンライン進学説明会を開催しました。

両日のプログラムとも、鹿田正昭校長によるあいさつから始まり、松下臣仁国際理工学科長による「学校紹介」、佐野 文高専入試事務室課長による「入試及び奨学生制度説明」のあと、毎回好評を博している「学生による活動紹介」と「学生によるキャンパスツアー」が行われました。

5月25日は18組31人が参加しました。学校所在地別では茨城県1組、東京都3組、神奈川県1組、三重県1組、滋賀県1組、大阪府3組、鹿児島県1組の他、海外からはマレーシアのインターナショナルスクール2組、中国の日本人学校2組、ドイツの日本人学校1組などから参加があり、また学年別では、中学3年生が8人、中学2年生が3人、中学1年生が1人でした。

本校では毎年、白山麓キャンパスでオンライン進学説明会を行っていますが、今回が初めてということが3点ありました。

1点目は、オープニングの校長あいさつが中庭で行われたことです。青々としたリアルな芝生の上で行われたオープニングは、本校の立地環境の良さを印象付けました。

2点目は、本校として初めて1年間実施できたニュージーランド(以下、NZ)への留学について、4年生の三輪恵万(みわ・えま)さんと泉屋匠吾(いずみや・しょうご)さんが発表したことです。本校は3年生全員が1年間、NZに留学します。ところがコロナ禍に伴い、NZ政府は2020年3月に国境を封鎖しました。国際理工学科の1、2期生はオンラインでNZの授業を受けました。実際に最初にNZに行ったのは3期生(8月から3月)で、当初の予定通り4月から1年間、ニュージーランドに行くことができたのは、三輪さんと泉屋さんたち4期生が初めてでした。その意味では、1年間の留学生活や現地での活動について具体的に話が聞ける貴重な機会となりました。

3点目は「学生によるキャンパスツアー」で、案内役はもちろんのこと、メインカメラや体育館、寮でのカメラワークも今回初めてすべて学生が担当したことです。満足する学生が最大の広報であり、オンラインを通じて学生の喋りはもちろん、ちょっとした表情や仕草まで、画面を通じて保護者は数年後のわが子の「未来の姿」と重ねて観て

います。参加者からさまざまな質問がチャットで寄せられましたが、「先輩の皆さんの楽しさや笑顔が見られ安心しました」というのがまさにこのことを象徴しています。



中庭であいさつをする鹿田校長

7月6日は11組17人が参加しました。学校所在地別では東京都3組、神奈川県1組、石川県1組、静岡県2組、福岡県1組の他、中国の日本人学校1組、マレーシアのインターナショナルスクール1組、アメリカのmiddle schoolからも1組の参加がありました。学年は中学3年生が4人、中学2年生が1人のほか、小学校6年生の家族も参加されました。

「学生による活動紹介」は2年生の中澤琉月(なかざわ・るうな)さんが行いました。「パソコン一つの中で起こっている様々なこととその仕組みを知り尽くしたい」という中澤さんは、本校入学後、中学の時から取り組んでいる環境活動に加えて、英語スピーチコンテストやハッカソン型インターン、アイデアコンテストやアプリ開発コンテストなどに意欲的に参加してきました。2年生の現在は「コンピュータサイエンス基礎」「電気基礎」が特に好きで「難しいけどめっちゃ楽しい!」「毎回、疑問が解決していくのが面白い」と話します。また「第35回 全国高等専門学校 プログラミングコンテスト」にも仲間と取り組み、予選を通過。10月に奈良で行われる本選に向けてプロダクト作成など準備を進めました。「大学受験を意識せず、5年間没頭できる」ことは本校の魅力の一つはです。本校には、高校の「部活動」に代わる、没頭できるものが多々あることを「好奇心に従って多くのことを学んでいきたい」という中澤さんは自らの活動を通じて示しました。

国際高専オンライン進学説明会と学校見学会を開催

本校では12月7日(土)午前10時からオンライン進学説明会を、12時20分から学校見学会をそれぞれ白山麓キャンパスで開催しました。

オンライン進学説明会の参加者は8組(中学3年生4人、小学生1人、保護者7人)で、学校所在地で見ると、群馬県1組、埼玉県1組、東京都2組、神奈川県1組、長野県1組、岐阜県1組、長崎県1組でした。

また学校見学会は参加5組(3年生2人、2年生2人、保護者4人)で、東京都2組、新潟県1組、石川県1組、岐阜県1組でした。オンライン進学説明会、学校見学会共に向井 守副校長の司会で、鹿田正昭校長が学校説明を行い、佐野 文入試事務室課長による入試説明の後、学生による活動紹介、そして学生によるキャンパスツアーと続きました。

午前の「学生による活動紹介」は、国際理工学科1年生の五百藏蒼天(いおろい・そうま)さんが「国際高専での私」というテーマで発表しました。五百藏さんは「英語を勉強したかった」「ものづくりがしたかった」「海外留学がしたかった」という理由で本校に進学してきました。プログラミングコンテストではプロダクトのプログラミングを担当し、先生や先輩、仲間と一緒に一つのプロダクトを完成させたときはものすごい達成感を得ることができたと話します。

午後の「学生による活動紹介」は、国際理工学科1年生の田中駿太郎(たなか・しゅんたろう)さんが「国際高専の魅力」というテーマで発表しました。田中さんは本校に進学する前の1年間、アメリカに留学していました。本校に関心を持ったきっかけは、学校に置かれてあったチラシでした。「ものづくり」が好きでレゴのEV3をやっていたことや「英語力は高めたいがアメリカの現地の高校に通うにはちょっと不安」ということで、理工科目を英語で学ぶ本校はぴったりでした。「自分たちが作ったものが動いた時とかは、達成感が凄くて、これを感じたら、ロボコンはやめられない」という田中さんは「来年の目標はロボコン全国」と発表を締めました。



国際高専の説明をする鹿田校長

石川県内塾対象「国際高専進学説明会」を開催

県内の学習塾を対象とした「国際高専進学説明会」を5月9日(木)に開催し、塾関係者20人が金沢キャンパス1階ラーニングcommonsに集まりました。金沢キャンパスでは令和5(2023)年度から学生の学修スタイルに合わせて実験室や研究室を大幅に改装し、新メーカースタジオにモーションキャプチャー、木材CNCルーター、複合加工機などの新機材を導入しました。県内の学習塾に本校の新設備をご覧いただき、国内屈指の恵まれた教育環境をアピールしました。

当日は日能研入試情報室室長の井上 修氏による約50分の講演『首都圏における中間一貫校の受験状況と加速する高大連携について』を行いました。首都圏では校内カフェなど生徒のウェルビーイングを重視したキャンパス作りが進む中で、白山麓キャンパスのリビングcommons・金沢キャンパスのラーニングcommonsなど気軽に先生や仲間と好きなことに没頭できる空間作りは、まさに時代の最先端を進んでいると講評いただきました。加えて、世界が求める人材でもプロジェクトベースが主流となっていて、学生が大学受験を気にせずに自己研磨に集中できる本校の環境の優位性を説きました。

講演後は松下臣仁学科長による学校紹介、佐野文課長による入試説明があり、希望者はキャンパスを見学し、学食を体験しました。



説明を聞く参加者

第3回私立高専合同進学説明会を開催

第3回私立高専合同進学説明会が、7月7日(日)午前10時から、金沢工業大学の東京・虎ノ門キャンパスで開催されました。高等教育機関である高等専門学校(以下、高専)は国内に58校あり、その中で私立は4校あります。その4校である神山まるごと高専(徳島県)、近畿大学工業高専(三重県)、サレジオ工業高専(東京都)、国際高専(石川県)が東京・虎ノ門キャンパスに集結し、協力して合同進学説明会を行いました。各校の個別相談用ブースの会場、オンライン配信にも対応した各校の学校紹介会場や資料展示コーナーを設け、来場者の動線を考え、分かりやすい会場構成としました。気温34度を超える炎天下にもかかわらず、受験生、保護者、教育関係者、企業などから86人の会場来場者と、愛知、宮城、長野、静岡などからの21人のオンライン参加の合計107人の参加がありました。個別相談会場では熱心に質問する受験生や保護者が多く、学校紹介会場では真剣に説明に聞き入り、紹介用映像に見入る姿が見受けられました。高等教育機関である高専は、以前はその教育機関としての認知度が低かったですが、昨今、工業高校や高専の卒業生を対象とする求人倍率が過去最高水準の高さとなったとの報道もあり、高専への興味の高まりを感じました。今後もより効果的な構成を考え、毎年の開催に繋げたいです。



参加者に本校の紹介をする鹿田校長



建学の塔 碑文

人間形成
技術革新
産学協同

の旗を掲げ

無くてはならぬ 学園を
無くてはならぬ 人材を

求めて 三十年

堅忍不拔 全学一致

犬鷲の 天翔けるが如く

さらに 力めん

さらに 励まん

昭和六十二年六月一日
学校法人 金沢工業大学
学園長 泉屋利吉



学校法人金沢工業大学

『令和6年度 アニュアルレポート』
令和7年9月30日発行